

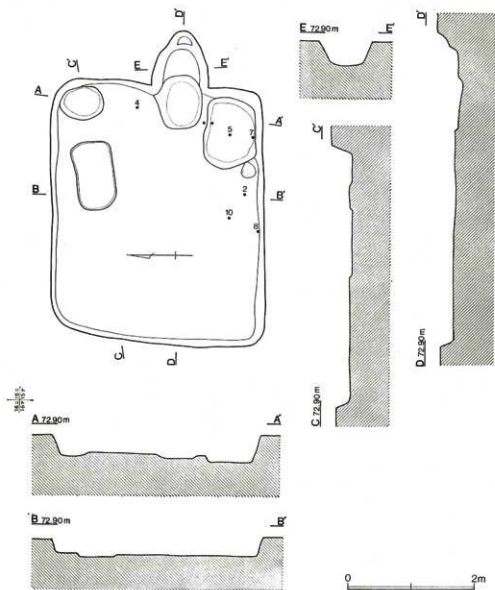
第84图 第59号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	高台付 碗 須恵器	口径 15.0 高台径 7.3 器高 7.0	高台はハの字状に張り出し、端部は水平になる。口唇は外反し、やや肥厚する。	右回転撫で8周。切り離し不明瞭。高台張り付け後、内外右回転撫で。末野産	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：1 色調：2.5Y8/2 灰白 残存：60%
5	台付甕 土師器	口径(11.2)	コノ字状口縁で、口唇は大きく外反する。	口縁2段の横撫で後、体部右→左への篋削り。二次加熱。	胎土：散A+E+F+G 焼成：4 色調：5YR5/8 明赤褐 残存：18%
6	甕 土師器	底径 4.0	小さな平底を造り出す。	胴部・底部とも篋削り。内面木口撫で。	胎土：散A多+F+G+H 焼成：4 色調：5YR7/4 にふい橙 残存：底のみ
7	甕 土師器	口径 20.2 胴径 22.1 現高 22.3	胴最大径は上位にあり、口縁はコノ字状となる。	口縁2段の横撫での後、胴部上位右→左、下位左上→右下へ篋削りする。内面は右→左の篋撫で。	胎土：散A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5YR6/4にふい橙 残存：60%
8	甕 土師器	口径(18.6)	コノ字状口縁で、口唇は薄く外反する。	口縁は2段の横撫での後、胴部は右→左への篋削り。内面は右→左への篋撫で。	胎土：散A多+F+H 焼成：4 色調：5YR5/8 明赤褐 残存：20%
9	甕 土師器	口径(21.4)	やや外に開くコノ字状口縁。やや厚手である。	口縁は2段の横撫で。	胎土：散A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5YR6/4にふい橙 残存：口縁20%
10	甕 土師器	口径(24.5)	やや外に開くコノ字状口縁。口唇は肥厚する。	口縁は2段に横撫でした後、胴部右→左への篋削り。内面は右→左への篋撫で。	胎土：散A多+D+E+F+G 焼成：4 色調：5YR6/6橙 残存：25%
11	甕 土師器	胴径(25.2)	胴部上位の破片で、最大径が胴上位にある。	外面は右下→左上へ篋削り。内面は右→左への篋撫で。	胎土：散A多+E+F+H 焼成：4 色調：5YR5/8 明赤褐 残存：18%
12	甕 須恵器	口径(39.0)	口縁は短かく大きく外反し、口唇は上下に尖き出し丸い。端面は窪みが巡る。	粘土帯積み上げ後、平行叩き成形。内面は篋撫でする。末野産	胎土：0.4以下A少+B 焼成：5 色調：2.5Y5/1 黄灰 残存：口縁45%

#### 第60号住居跡 (第85図)

15—ナ区に位置し、規模は4.08×3.36m、深さは0.32mを測る。形態は隅の丸い長方形で、主軸はN—90°—E、床標高は72.34mである。

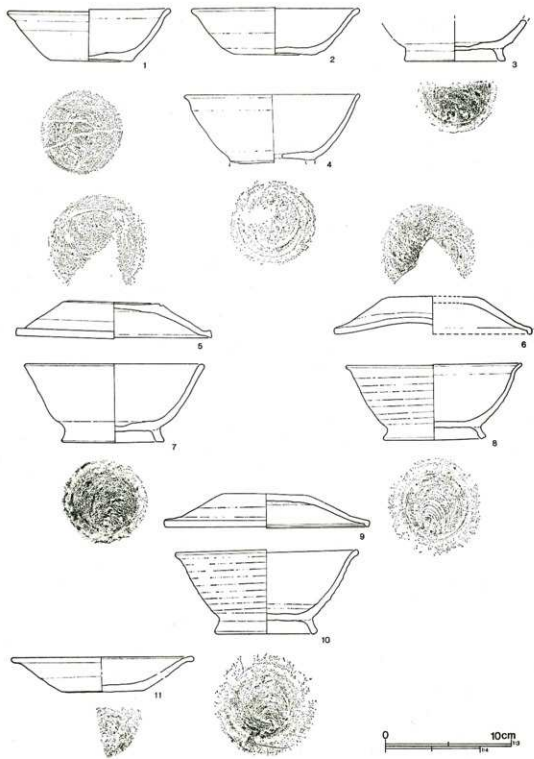
竈は短辺である東壁やや右寄りにあり、長さ1.54m×幅0.75mを測る大形竈である。焚口から煙道へは急に立ち上がる。床面南西隅の竈右脇に、貯蔵穴と考えられる0.15×0.8m、深さ0.1mの方



第85図 第60号住居跡

形土坑がある。他に北東隅、北壁寄りにも浅い落ち込みがある。柱穴は未確認である。

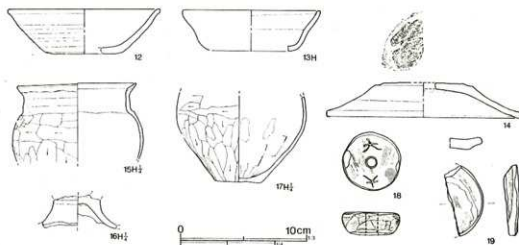
遺物は貯蔵穴から坏(1)、高台付塊(7)、蓋(6)・(6)が、竈左から高台付塊(4)が、南壁中央付近から坏(2)、高台付塊(8)・(8)が出土した。また竈内から坏(2)、蓋(9)、土師器坏(3)、土師器台付甕(3)・(3)、土師器甕(1)が、竈焚口から紡錘車(8)が出土する。鉄滓は少なく15gしかない。



第86図 第60号住居跡出土遺物(1)

第60号住居跡出土遺物 (第86・87図)

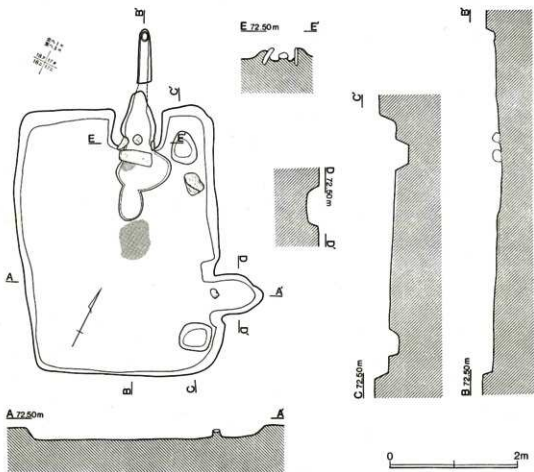
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 13.0 底径 6.6 器高 4.2	平底から指差し込み部を経て、体部と外反する口縁に至る。体部に微細鉄滓付着。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.4以下B+C+D+E 焼成：1 色調：10YR 6/3にふい黄橙 残存：90% 貯蔵穴
2	坏 須恵器	口径 13.4 底径 6.4 器高 4.7	平底から指差し込み部で外反し、体部を経て肥厚する口唇に至る。	右回転撫で。底部右回転糸前引き切り。 末野産	胎土：1.0以下のB・C・D+E多+金H 焼成：1 色調：5YR 5/4にふい赤褐 残存：70% 竈・床
3	高台付 碗 須恵器	高台径 8.0	高台はやや外に張る。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.3以下のB・C+E 焼成：3 色調：10YR 5/1褐灰 残存：底50%
4	高台付 碗 須恵器	口径 14.0 現高 5.5	体部は丸く、口唇にて僅かに反る。高台ははがれる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内側に粘土を補なう。末野産	胎土：0.7以下B+E少 焼成：3 色調：2.5Y6/3にふい黄 残存：60% 床
5	蓋 須恵器	口径 15.7 天井径 7.9 器高 2.9	つまみのない蓋で、天井部は平ら。口唇部は端面をつくり、断面三角形となる。	右回転撫で。天井部右回転離し糸切り1.5周。末野産	胎土：0.9以下B+D+E多 焼成：1 色調：N3/0暗灰 残存：60% 貯蔵穴
6	蓋 須恵器	口径(15.8) 天井(8.0) 器高 2.9	つまみのない蓋で、焼け歪む。天井部は平らで、口唇は屈曲して垂れ下がる。	右回転撫で。天井部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：B+E多 焼成：5 色調：N4/0灰 残存：50% 貯蔵穴
7	高台付 碗 須恵器	口径 14.4 高台径 8.2 器高 6.2	高台はハの字状に開き、端部水平となる。体部は直線的に開き、厚手である。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.7以下B・C・D・E多 焼成：5 色調：N3/0灰 残存：100% 貯蔵穴
8	高台付 碗 須恵器	口径 14.1 高台径 8.2 器高 6.0	高台はハの字状に開き、端部は沈線を持ち外傾する。口唇は大きく外反する。	右回転撫で8周。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.2以下のB+D+E多 焼成：2 色調：10YR 7/2にふい黄橙 残存：80% 床
9	蓋 須恵器	口径 16.4	天井部にはがれあり。口唇部は屈曲して垂れ下がる。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.7以下B・D+E多+H 焼成：2 色調：10YR 6/3にふい黄橙 残存：70% 竈
10	高台付 碗 須恵器	口径 14.7 高台径 8.2 器高 6.7	高台はハの字状に開き、端部は丸くなる。口唇は外反する。体部は輪軸目顯著。	右回転撫で9周。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後、回転撫で。 末野産 胎土分析№16	胎土：0.7以下B・C・D・E・H多 焼成：1 色調：10YR 6/2灰黄褐 残存：90% 床



第87図 第60号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	皿 須恵器	口径(14.6) 底径(6.4) 器高 2.7	平底から直線的に外傾し、口唇にて外反する。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.3以下B・D・E多 焼成：5色調：N3/0 暗灰 残存：25%
12	杯 須恵器	口径(12.2) 底径(5.0) 器高 3.5	平底から外傾する体部を経て、僅かに外反する口唇へ。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：B+D少 焼成：1色調：5Y 7/3 浅黄 残存：50%
13	杯 土師器	口径(19.0) 器高 3.2	底部から緩やかに屈曲して、体部で一端反り、口唇にて内彎する。口唇内側沈線。	口縁内外横撫で。外面底部筥削り。摩擦著しく整形不明瞭。	胎土：B・F多 焼成：1色調：5Y R 6/4 にふい橙 残存：15% 産
14	蓋 須恵器	口径(15.4) 底径(7.7) 器高 2.7	5と同様口唇部が三角形になる。天井部は糸切り失敗のため段が付く。	右回転撫で6周。天井部右回転糸切り。末野産	胎土：0.2以下B+C+E 焼成：5色調：N3/0 暗灰 残存：25%
15	台付甕 土師器	口径 12.3 胴径 13.1 現高 7.8	丸い胴部からコの字状口縁に移行するが、口唇は薄くなる。全体に薄手。	口縁2段の横撫での後、胴上部を右→左への筥削り。胴中位を上→下への筥削り。内面は筥撫で。	胎土：微A+B+C+H 焼成：2 二次加熱 色調：2.5Y R 6/6橙 残存：胴中位以上100% 産
16	台付甕 土師器	基部径 4.8	脚は大きく開くが上下が欠失。接合部より剥離する。	脚内面左回りの筥撫での後、内外横撫で。	胎土：微A多+B+F 焼成：3 色調：5Y R 7/4 にふい橙 残存：脚 産
17	甕 土師器	胴径 13.5 底径 4.9 現高 9.0	平底から直線的に外傾する体部を経て、中位にて屈曲し内彎する。	外面胴中位を右→左への筥削り、胴下位は上→下への筥削り、底部は一方方向の筥	胎土：微A多+B+D+H 焼成：3 色調：2.5Y R 6/6橙 残存：胴下半70%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	紡錘車 石製品	外径 4.6 器厚 1.8 孔径 0.9	側面は丸味を持ち、孔径部は端部でやや孔が広がる。表面に鉄滓が付着する。また広端部には「大」の刻線文字が、相対して2つある。	削りが施される。内面は右→左への筥撫で。 凝灰質砂岩製で、全体に研ぎ面が残る。広端部は平面をなすが、狭端部は荒れている。	重量：49.26g 残存：100% 電 竈焚口
19	紡錘車 土器製		土器の底部を擦って使用する。一面に糸切りらしきものが見られる。	末野産	胎土：0.2以下B+D 焼成：3 色調：7.5Y6/1 残存：30%

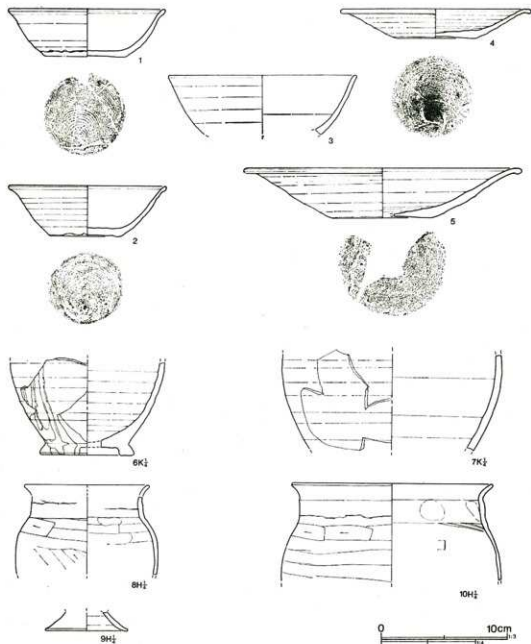


第88図 第61号住居跡

第61号住居跡 (第88図)

17-ニ・ヌ区に位置する。規模は4.2×3.2m、深さ0.2mを測る。形態は長方形で、主軸はN-26°-Wで、床標高は72.15mである。

竈は北壁右寄りと東壁右寄りの2ヶ所にあり、北竈は長さ1.9×幅0.5mで、長い煙道としっかりした袖を持つ。また石の支脚を備え、側壁と天井には片岩が使われる。東竈は長さ0.95×幅0.6mで、短い袖を持ち、石の支脚を備える。北・東両竈の右側にそれぞれ径0.5m前後の貯蔵穴を持つ。



第89図 第61号住居跡出土遺物



北窓焚口前方と中央付近に鉄滓が分布する。柱穴などは見つからなかった。

遺物は竈から土師台付甕(9)、土師器甕(10)が、南東隅ビットから杯(1)、埴(3)が出土した。他に皿(4)(5)と灰釉瓶(7)が出土する。(6)はA地区と(7)は62号住居跡と接合する。製鉄関連遺物として鉄滓235gが出土する。

第61号住居跡出土遺物 (第89図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 12.5 底径 6.3 器高 3.8	平底から内彎する体部に移り、口唇にて外反する。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：1.2以下B+D+E 焼成：2 色調：2.5Y6/3 にぶい黄 残存：80% ビット1
2	杯 須恵器	口径 12.6 底径 5.7 器高 4.0	平底から内彎気味に立ち上がり、口唇にて外反する。	右回転撫で7周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：1.1以下B+C+E 焼成：4 色調：5Y7/1 灰白 残存：60% ビット2
3	埴 須恵器	口径 16.0	内彎気味に立ち上がる。	右回転撫で5周。南比企産	胎土：微A微+金H+I 微 焼成：1 色調：7.5YR 6/3にぶい褐 残存：12% ビット1
4	皿 須恵器	口径 15.1 底径 6.2 器高 2.3	平底から直線的に外傾する。口唇は大きく外反する。	右回転撫で7周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：4 色調：5Y7/3 浅黄 残存：50%
5	皿 須恵器	口径 22.8 底径 8.0 器高 3.9	大形の皿であり、口唇部は大きく外反し、玉縁状になる。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.9以下B+E 焼 成：4 色調：5Y7/2 灰 白 残存：70%
6	瓶 灰釉	胴径(16.3) 高台径 (9.9)	高台は外へ張り出し、台形となる。端部は水平となる。内外面とも釉層目が明瞭である。濃緑色の釉が流れる。	右回転撫で。体部下位に回転篋削りが入る。高台付着後内側に指撫で。猿投産	胎土：夾雑物ほとんどない 焼成：5 色調：7.5R4/6 赤 残存：20% ビット1
7	瓶 灰釉	胴径 23.0	胴下半の部分。中位以上に斑点状の黄白色釉あり。	右回転撫で。一部左回転撫で。胴下位に右回転篋削り。猿投産	胎土：微B微、夾雑物ほとんどなし 焼成：5 色調：5Y5/1 灰 残存：25%
8	甕 土師器	胴径(14.9)	丸い胴部から直立する口縁に移る。	外面胴部右→左・右下→左上への篋削り。内面は上位が指撫で、下位が篋撫で。	胎土：微A多+F+H+G 焼成：4 色調：5YR5/4 にぶい赤褐 残存：27%
9	台付甕 土師器	脚径 8.6	脚はハの字状に大きく開く。	内外とも横撫で。二次加熱	胎土：微A多+F+G+H 焼成：2 色調：5YR6/6 橙 残存：50% 第1甕

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	甕 土師器	口径 21.0 胴径 22.9	球胴からコの字状口縁に移る。	口縁を横撫でした後、胴外面を右→左へ筥削りする。内面は右→左への木口撫で。	胎土：散A多+F+G 焼成：2 色調：5YR 6/6 橙 残存：75% 第1甕

#### 第62号住居跡 (第90図)

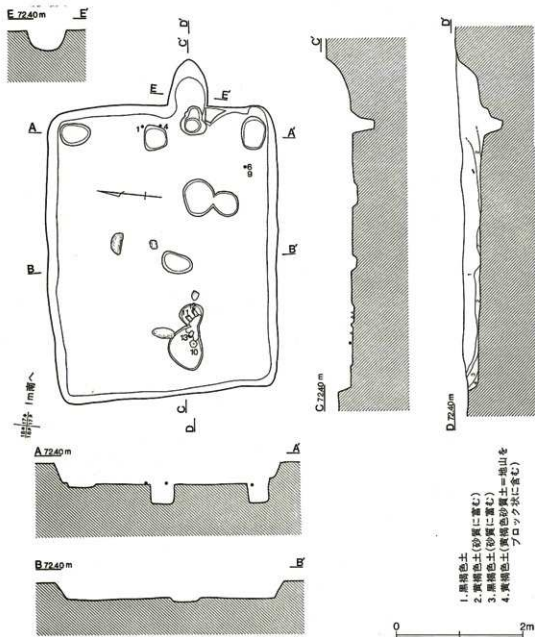
17—ヌ区に位置する。規模は4.6×3.65mで、深さは0.36mを測る。形態は長方形で主軸はN—84°—E、床面高は71.91mを測る。

竈は短壁である東壁中央右寄りにあり、長さ1.2×幅0.35mを測る。狹口には深さ0.35mのビットが存在するが、竈と直接関連があるか不明である。床には数個のビットが存在するが、竈左と南東部のビットは0.3mの深さがあり、貯蔵穴の可能性もある。西壁近くのビットには羽口が3本傾斜面に並ぶが、戸であるか不明である。

遺物は坏(1)・(2)、高台付埴(3)、蓋(4)、細頸壺(5)、土師器甕(6)・(7)・(8)・(9)、土師器台付甕(10)、羽口(11)・(12)・(13)が出土する。第76号住居跡と接合したのが4個体ある(第76号住居跡参照)。製鉄関連遺物として鉄滓200gと羽口数個がある。

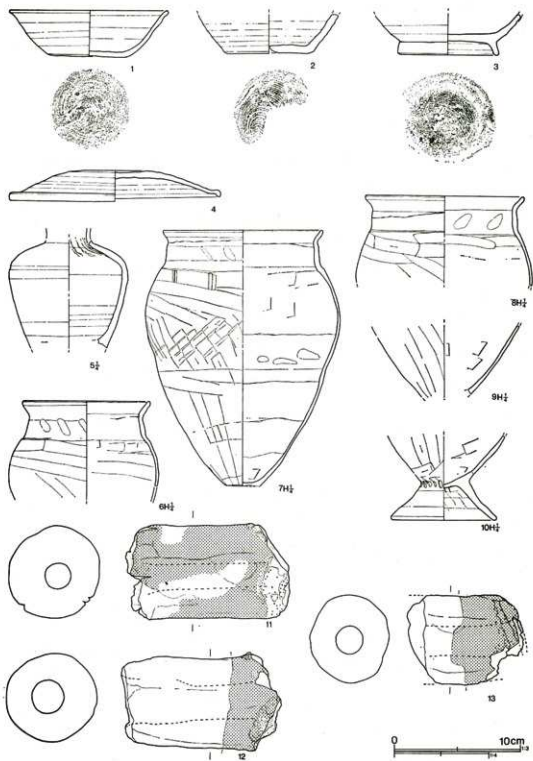
#### 第62号住居跡出土遺物 (第91図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.6 底径 6.2 器高 3.7	平底から外傾する体部に移る。摩滅著しい。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.6以下B+E多 焼成：2 色調：5Y 6/1 灰 残存：80% 床
2	坏 須恵器	底径 6.5	平底から外傾する体部に移る。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：5 色調：7.5Y 6/2 灰 オリーブ 残存：50%
3	高台付 埴 須恵器	高台径 8.0	高台は直線的に外開きする。端部は丸くつくられる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.7以下B+C 焼成：4 色調：7.5Y 7/1 灰 白 残存：底部100%
4	蓋 須恵器	口径 16.6 天井径 7.4 器高 2.5	つまみのない蓋である。口縁は下へ折れ曲る。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。摩滅のため不明瞭。糸切り部周辺筥削り。末野産	胎土：0.5以下B・C・D +E多 焼成：1 色調： 7.5Y 6/2灰オリーブ 残存： 80% 胎土分析№4 床
5	細頸壺 須恵器	肩部径 (12.3)	最大径が肩部にある。肩部から窄まり、外反して頸部に至る。	右回転撫で。外面体部下位は右回転筥削りされる。頸部から肩部にかけて内面に絞りが目が見られる。内面下位左回転撫で。南比企産?	胎土：0.2以下B+C 焼成：5 色調：10Y 4/1 灰 残存：体部20%



第90図 第62号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	甕 土器	口径 13.4 胴径 15.7 現高 8.8	丸い胴部から、内傾するコ の字状口縁に至る。口縁は 外傾し肥厚する。二次加熱	口縁3段の横撫での後、胴 部を右→左へ筥削りする。 内面は右→左への筥撫で。	胎土：0.3以下A+E 焼 成：3 色調：7.5YR6/6 橙 残存：75% 床



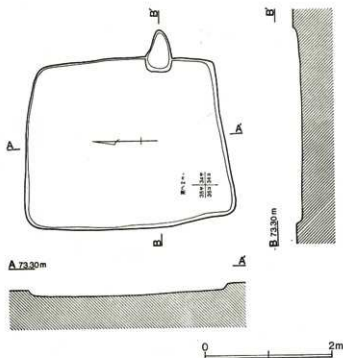
第91圖 第62号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	甕 土師器	口径 17.9 胴径 21.8 底径 3.8 器高 28.6	小さな底部から最大径を上位に持つ胴部を経て、コの字状口縁に移る。薄手。	口縁横撫で2段の後、胴部上位を右→左、下位を左上→右下へ笊削りする。内面は右→左への笊撫で。粘土帯載み上げは胴部で5段。	胎土：微A多+D+E+F+G+H 焼成：2二次加熱 色調：7.5YR7/6橙 残存：50% 甕
8	甕 土師器	口径(16.6) 胴径(18.4)	丸い胴から直立するコの字状口縁に至る。	口縁横撫での後、胴部は右→左へ笊削りする。内面は木口撫で。	胎土：微A多+B+D+E+F+G+H 焼成：4 色調：2.5Y6/6明黄褐 残存：30%
9	甕 土師器		外傾する胴下半部。6と同一個体か。	外面上→下への笊削り。内面右→左への笊撫で。	胎土：微A+E 焼成：3 色調：5YR6/6橙 残存：80% 床
10	台付甕 土師器	脚径 11.1	脚部は大きく開き、基部から体部へも内彎気味に開く。二次加熱。	脚部内面笊撫で。脚部内外横撫で。胴部外面上→下へ笊削り。内面右→左への木口撫で。	胎土：微A+B+F+G+H 焼成：2 色調：2.5YR6/6橙 残存：80% 床
11	羽	口全長 13.1 外径 7.3 孔径 2.05	外径は基部がやや太くなる。孔部も基部が太くなる。全面が還元部である。	両端を口部として使用しているため発泡している。右側を最初に使用したため、隔解が著しい。棒に巻きつけ、表面を指頭により押圧して整形する。	胎土：1cm以下A+スサ多 残存：100%
12	羽	口全長 12.8 外径 7.1 孔径 2.6	口部の方が径が太く、基部で窄まる。基部の孔径は狭れて太くなる。還元部が狭い。多に比べ砂が多い。	棒に巻きつけ、表を指頭で撫でる。口部は発泡し、一部鉄滓が付着する。	胎土：細A多+スサ 残存：90%
13	羽	口現長 9.3 外径 6.9 孔径 2.2	口部は傾斜するが、下半は欠損する。また基部も欠損する。	棒に巻きつけ板に押しつけ多面をつくる。口部は著しく発泡するがガラス質にならない。部分的に鉄滓付着。	胎土：A多+D+スサ 残存：60%

### 第63号住居跡 (第92図)

34—サ区に位置する。規模は2.7×3.2mで、深さ0.15mを測る。形態は東壁が狭い台形となり、主軸はN—89°30′—Eで、床高は72.87mである。

竈は長辺である東壁右寄りにあり、長さ0.65×幅0.42mである。柱穴はなく、出土遺物もない。



第92図 第63号住居跡

第64号住居跡 (第93図)

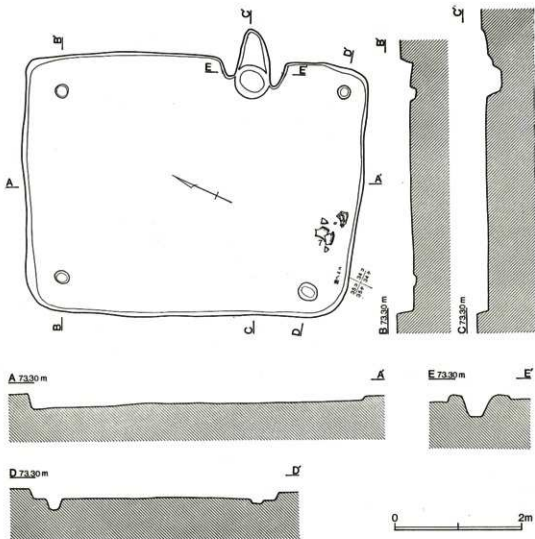
34-コ区にあり、規模は4.13×5.42mで、深さは0.24mを測る。形態は長方形で、主軸はN-68°-Eで、床欄高は72.86mを測る。

竈は長辺である東壁右寄りにあり、長さ1.1×幅0.95mで、焚口は深さ0.35mの掘り込みがある。袖は高まりを持って存在する。柱穴は4隅にあるが、径0.2~0.3mの浅いビットである。

遺物は竈内から坏(1)・(2)、砂鉄の付着した甕(5)・(7)、台付甕(4)が、覆土から坏(1)、高台付塊(3)、土師器甕(6)が出土する。甕(7)は床・覆土と接合した。製鉄関連遺物として鉄滓が2.35kgある。

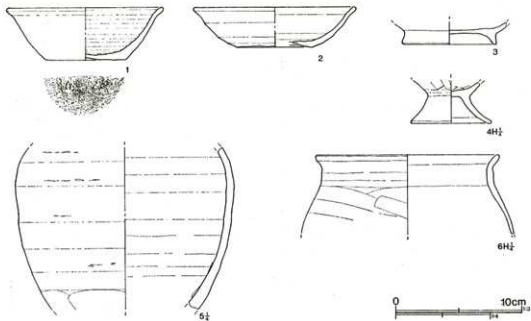
第64号住居跡出土遺物 (第64・65図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(12.5) 底径(6.3) 器高 4.2	平底から内彎気味に立ち上がり、口唇にて外反する。	右回転撫で8周。底部右回転糸切り。 南比企産	胎土: 0.7以下A+I 焼成: 5色調: 10GY6/1 緑灰 残存: 30% 竈・覆土
2	坏 須恵器	口径(13.0) 底径(6.0) 器高 3.2	底径から丸味を持つ体部を経て、僅かに外反する口唇に至る、扁平な形態である。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土: 0.7以下B+C+D 焼成: 5色調: N5/0灰 残存: 30% 竈

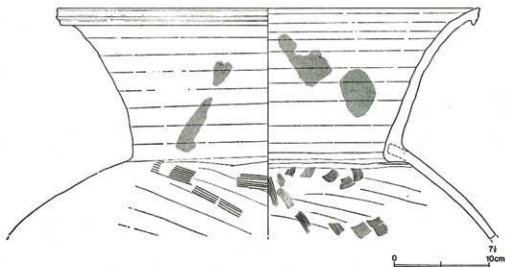


第93図 第64号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付坑須恵器	高台径 7.5	高台は僅かに外開きするが、端部は薄く尖る。	右回転撫で。摩滅著しく整形不明瞭。末野産	胎土：0.7以下B+D+E 焼成：1 色調：10Y R6/4 にふい黄橙 残存：底部100% 覆土
4	台付鉢土器	脚径 8.4	脚は外へ大きく開く。二次加熱を受けてもろくなる。	脚部内外横撫で。脚下位外面刮削り、内面木口撫で。	胎土：微A多+D+E 焼成：3 色調：2.5 Y R 5/6 明赤褐 残存：30% 甑



第94図 第64号住居跡出土遺物(1)



第95図 第64号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕 須恵器	胴径(22.8)	胴中位の破片であるが、最大径は上位に持つようである。内面に多量の砂鉄が付着し、砂鉄容器であろう。	粘土帯被み上げ真明瞭。右回転撫で。末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：胴15% 甕・覆土
6	甕 土師器	口径(17.8)	体部から緩やかにコの字状口縁に至る。	口縁横撫で。胴外面横位の寛削り。二次加熱のため器面が荒れ、整形不明瞭。	胎土：微A+E+F+G+H 焼成：2 色調：5 Y R 7/6 橙 残存：20% 覆土
7	甕 須恵器	口径 44.7 頸部径28.7 口縁高15.5	胴部から屈曲し、外反する口縁に至る。口唇部は下方に垂れ、端面に尖帯が巡る形態となる。口縁内外には厚く砂鉄がこびり付く。割れ目にも付着する例もあることから、破片になってから付着したものであろう。	粘土帯被み上げ、平行叩き成形。内面には青海波文が見られる。口縁は積み上げた後、回転撫でを施す。体部と口縁の接合は、体部に口縁を乗せ、粘土を内側に厚く巻き込んでいる。末野産	胎土：1.2以下のA+B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：口縁70% 肩部10% 床・甕・覆土

#### 第65号住居跡 (第96図)

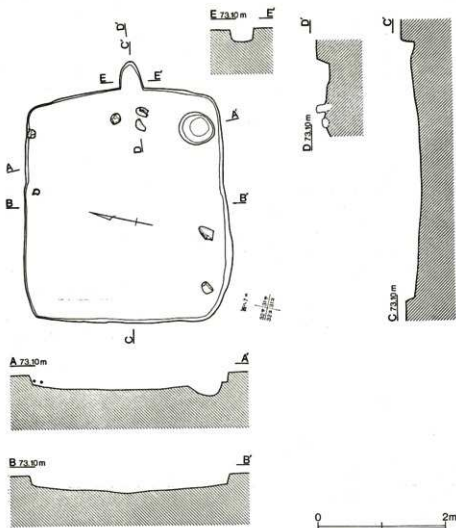
32—サ区に位置し、規模は3.68×3.21m、深さ0.25mを測る。形態は長方形で、北壁がやや短くなる。主軸はN—79°30'—Eで、床標高は72.74mを測る。

竈は短辺である東壁中央にあり、長さ1.0×幅0.35mで、竈前方には石が3つ見られる。床面南東隅に、径0.55mの掘り込みがあるが貯蔵穴であろう。柱穴は検出できない。

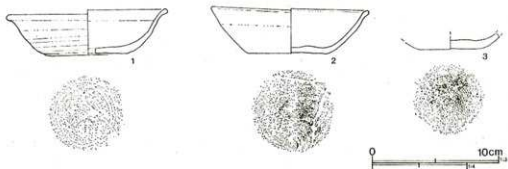
遺物は坏(1)・(2)・(3)が西壁脇より出土した。

#### 第65号住居跡出土遺物 (第97図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.8 底径 6.5 器高 3.6	平底から脹らむ体部を経て、やや肥厚し外反する口唇に至る。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：B+C+E多 焼成：1 色調：10 Y R 7/2に ふい黄橙 残存：80%
2	坏 須恵器	口径 12.5 底径 6.3 器高 3.5	平底からやや脹らむ体部を経て、外反する口唇に至る。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：0.2以下B・C・D多 焼成：2 色調：5 Y R 6/6 橙 残存：80% 胎土分析No.5
3	坏 須恵器	底径 5.3	平底から緩やかに体部へ移る。	右回転撫で。底部右回転引き切り。内面底部周辺に深い撫で。	胎土：0.1以下A多 焼成：1 色調：5 Y R 6/8 橙 残存：底部100%



第96图 第65号住居跡



第97图 第65号住居跡出土遺物

第66号住居跡 (第99図)

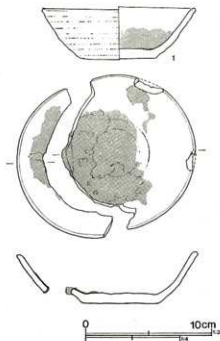
30・31一サ区に位置する。規模は5.1×4.1mで、深さは0.4mを測る。形態は長方形で、主軸はN—90°—Eで、床標高は72.35mある。

竈は東壁中央右寄りと、北壁中央左寄りにあり、東竈は煙道が垂直に立ち上がるが、北竈は緩やかに傾斜する。

竈と南壁脇には石が散乱する。

柱穴など床面の施設は検出できなかった。

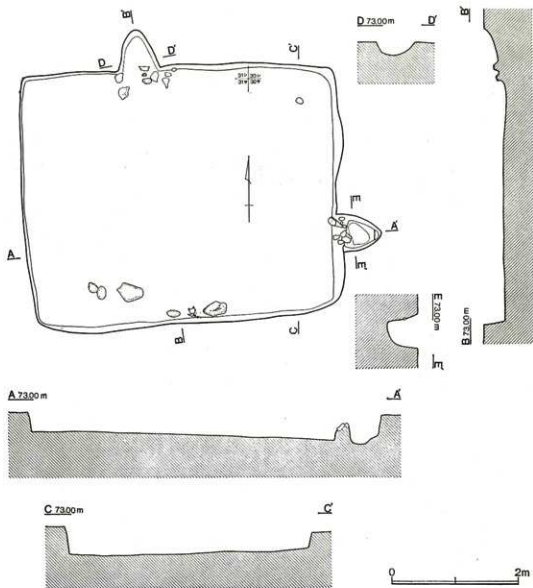
遺物は東竈から高台付塊(6)、甗(6)、土師器甕(6)が、北竈から坏(2)・(3)・(4)、土師器坏(5)・(6)、土師器甕(2)~(4)が出土する。床からは鉄滓付着の坏(1)が、また西壁脇には鉄滓が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が390g出土する。



第98図 第66号住居跡出土遺物(1)

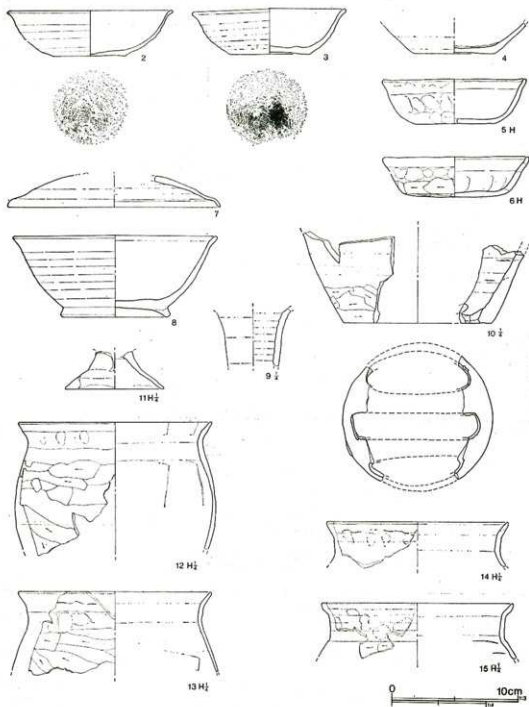
第66号住居跡出土遺物 (第98・100図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.2 底径 5.9 器高 4.1	内面に鉄滓が流れ付着する。割れ口にも流れ出しているが、鉄滓を入れた後に割れて流れ出したものである。坏はやや厚目であるが、増焼として使用したものか不明。	右回転撫で9周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：B+C+D 焼成：3 色調：10YR 6/6 明黄褐 残存：100% 床
2	坏 須恵器	口径(13.2) 底径 5.7 器高 3.6	平底から内彎する体部を経て、口唇にて外反する。薄手。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：0.6以下B・C・D・E多 焼成：3 色調：7.5Y4/1灰~5YR4/4に ぶい赤褐 残存：60% 北竈
3	坏 須恵器	口径 12.2 底径 6.4 器高 3.6	やや上げ底気味の底部から、脹らむ体部を経て外反する口縁に至る。	右回転撫で7周。底部右回転糸引き切り。末野産	胎土：0.3以下B+C+E+金H 焼成：3 色調：2.5YR5/1赤灰 残存：80% 北竈



第99図 第66号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	坏 須恵器	底径(6.3)	底部から直線的に外傾する 体部へ移る。多孔質。	右回転撫で。底部右回転離 し承切り。 末野産	胎土：0.8以下 B+C+D 焼成：1 色調：10Y R6/1 褐灰 残存：25% 北庵
5	坏 土師器	口径(11.4) 器高 3.5	平底から緩やかに体部に移 る。口唇内側には沈線を入 れる。体部には指頭痕あ り。	口縁横撫で。底部右→左へ の筥削り。	胎土：B+F多 焼成：3 色調：2.5Y R6/6橙 残存 ：40% 北庵



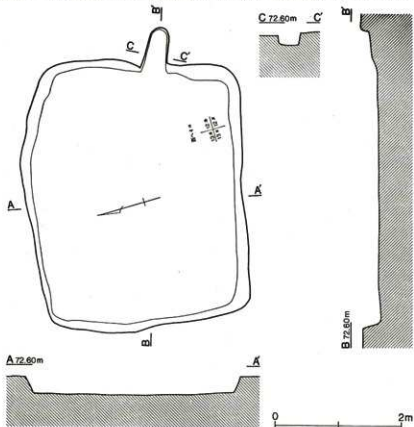
第100圖 第66号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	坏 土師器	口径(11.6) 器高 3.2	平底から緩やかに立ち上がり、内側に沈線を持つ口唇に至る。体部に指頭痕。	口縁横撫で。底部と体部下位は篋削り。	胎土：B+F多 焼成：3色調：5 Y R 6/6 橙 残存：50% 北甕
7	蓋 須恵器	口径(16.9)	口唇部はやや外方に向けて開き、全体に薄いつくりとなる。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.7以下B+C+D+E多 焼成：1色調：2.5 Y R 7/2明赤灰 残存：25% 覆土
8	高台付 碗 須恵器	口径(16.3) 高台径 (8.8) 器高 6.4	高台は短かく外に張り出す。口唇は外反する。	右回転撫で8周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.8以下B・C・D・E多 焼成：1色調：7.5 Y R 7/6橙 残存：45% 東甕
9	瓶 須恵器		口縁の一部であるが、緩やかに外反する。斑点状の釉が掛かる。	右回転撫で9+ $\alpha$ 周。 南北企産	胎土：微B・C+I(1 $\alpha$ -6) 焼成：5色調：7.5 Y 7/2灰白 残存：口25%
10	瓶 須恵器	底径(15.4)	孔部に2本の稜があったと考えられ、中央の1孔は細長く、端の2孔は半月状となる。体部は彎曲を持って立ち上がる。	粘土帯積み上げ、右回転撫で。孔部は底を作った後、内外から篋でカットされる。体部下位は右→左、最下位は左→右への手持ち篋削り。 末野産	胎土：0.6以下B 焼成：5色調：5 P B 3/1暗青灰 残存：底部30% 覆土・東甕
11	台付甕 土師器	脚径(10.3) 脚高 3.9	脚は大きく開くが、中位で屈曲し、より開く。	脚部横撫で。	胎土：微A多+B+E+F+G 焼成：3色調：2.5 Y 5/8明赤褐 残存：20% 覆土
12	甕 土師器	口径(20.1) 胴径(21.0)	あまり張りのない胴部から、緩やかに外反する口縁に至る。口縁はやや厚い。	外面は横撫での後、胴上位は右→左への、胴中位は上→下への削り。内面は胴部が右→左への篋撫での後、口縁横撫で。	胎土：微A多+B+F+G 焼成：3色調：2.5 Y R 4/8赤褐 残存：口縁30% 北甕
13	甕 土師器	口径(20.2)	体部から緩やかに外反する口縁に至る。	口縁横撫での後、胴部右→左への篋削り。内面は篋撫で。	胎土：B+E+F+金H多 焼成：1色調：5 Y R 6/6 橙 残存：20% 北甕
14	甕 土師器	口径(18.9)	コノ字状口縁。	口縁横撫で。	胎土：B+E+F+金H多 焼成：3色調：5 Y R 7/6 橙 残存：口縁20% 北甕
15	甕 土師器	口径(19.5)	コノ字状口縁。	口縁横撫で2段。胴部は右→左への篋削り。	胎土：B+E+F+G+金H多 焼成：3色調：2.5 Y R 5/6明赤褐 残存：20% 東甕

第67号住居跡 (第101図)

13-ネ区に位置する。規模は4.3×3.55m、深さは0.29mを測る。形態は長方形で、北壁がくの字に曲る。主軸はN-105°30'-Eで、床標高は72.11mである。

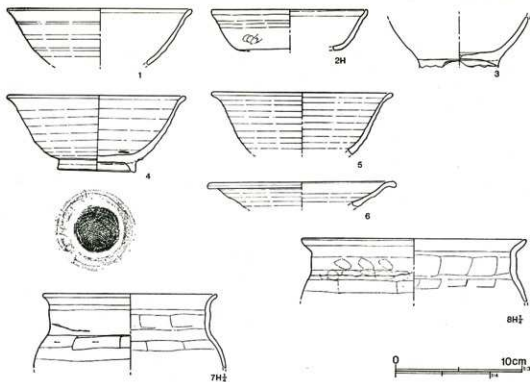
竈は短辺である東壁右寄りにあり、長さ0.7×幅0.4mで、煙道は水平の後、垂直に立つ。遺物は坏(1)、土師器坏(2)、皿(6)、高台付埴(3)・(4)・(5)、土師器甕(7)・(8)が出土する。



第101図 第67号住居跡

第67号住居跡出土遺物 (第102図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径(14.6)	丸い体部から外反する口縁に至る。	右回転撫で。末野産	胎土：B+C+D 焼成：2 色調：2.5Y7/2灰黄 残存：13%
2	土師器 坏	口径(12.3)	底部から緩やかに屈曲した後、外傾する体部を経て、内側に沈線を持つ口唇へ。	口縁横撫で。底部刮削り。	胎土：B+E+F 焼成：4 色調：5YR 6/6橙 残存：25%
3	須恵器 高台付埴	高台径 (6.3)	高台端部に口縁欠損。高台は三角形となる。	右回転撫で。末野産	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：1 色調：2.5Y7/2 灰黄 残存：30%



第102図 第67号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	高台付碗	口径 14.1 高台径 6.2 器高 6.0	高台はあまり開かず、端面は沈線を巡らせ内傾する。体部は狭らみ口唇は外反。	右回転撫で9周。底部右回転糸切り。高台付着後内外撫で。 末野産	胎土：0.3以下B+C 焼成：5 色調：N 3/0 灰 残存：50%
5	高台付碗	口径(14.4)	高台は欠損する。体部は丸く、口縁は大きく外反する。体部に轆轤目明脈。	右回転撫で10周。 末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：5 色調：2.5Y6/1黄 灰 残存：22%
6	皿 須恵器	口径(15.0)	下半部欠失する。口縁は玉縁をつくり、大きく外反する。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：20%
7	甕 土師器	口径(18.1) 胴径(20.0)	直立するコの字状口縁である。口縁はやや長い。	口縁は横撫で2段に施した後、胴部は右→左へ篋削り。内面横位の篋撫で。	胎土：微A+D+E+F+G 焼成：3 色調：5Y R 7/4にふい橙 残存：13%
8	甕 土師器	口径(23.3)	直立するコの字状口縁で大形である。口縁はやや厚目に作られる。	口縁は2段の横撫で。その後胴部を右→左へ篋削りする。内面は横位の篋撫で。	胎土：微A多+E+F+G +H 焼成：3 色調：7.5 Y R 7/4にふい橙 残存：22%



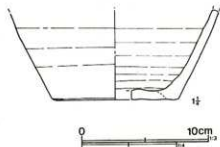
### 第68号住居跡 (第104図)

18—ヌ区に位置する。規模は5.2×4.9mで、深さは0.17mを測る。形態は僅かに隅の丸い正方形で、主軸はN—80°—E、床標高は72.15mである。

竈は東壁僅か右寄りにあり、長さ1.05×幅0.8mある。竈の天井に使われた石が落ち込んでいる。

床面には柱穴など、他の施設は見られないが、北東隅に小石が散乱する。

出土遺物は甕(1)が1点出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が245g出土する。



第103図 第68号住居跡出土遺物

### 第68号住居跡出土遺物 (第103図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	底径 13.0	平底から直線的に外傾する体部へ移る。	粘土帯積み上げ後、叩き成形。内面に一部青濤波文が見られる。その後回転撫で整形。底部は木口撫で。	胎土：0.7以下B+C+E 焼成：5 色調：2.5 Y R 5/1 福灰 残存：33% 末野産

### 第69号住居跡 (第108図)

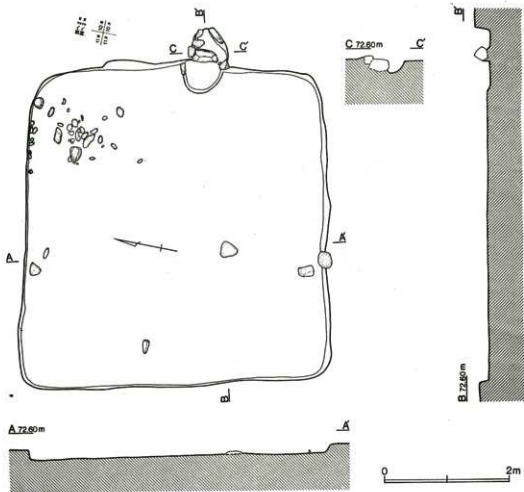
19—セ区に位置し、第70号住居跡に切られる。規模は3.67×5.28m、深さは0.38mを測る。形態は長方形で、主軸はN—7°—Wで、床標高は71.27mである。

竈は長辺である北壁中央にあり、長さ1.5×幅1.15mで、煙道は袋状となり、煙道の中に焼けた天井部が落ち込む。床面全体に20cm前後の石が散乱する。柱穴は4隅にそれぞれ存在する。

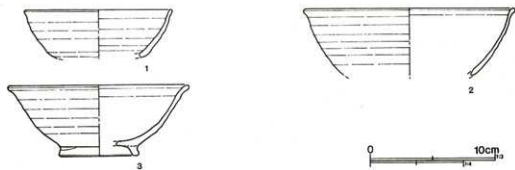
遺物は竈内から高台付塊(2)が出土する他、坏(1)と高台付塊(3)が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓が260g出土する。

### 第69号住居跡出土遺物 (第105図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(11.9)	丸味を持つ体部である。	右回転撫で6周。 南比全産	胎土：0.2以下B少+I(1 cd=12) 焼成：5 色調： 7.5 Y 6/1 R 残存：30%
2	高台付塊 須恵器	口径(17.0)	大振りで薄いつくりである。口唇は玉縁状につくられ外反する。	右回転撫で8周。 末野産	胎土：0.6以下B+E 焼成：2 色調：10 Y R 7/2 にふい黄澄 残存：12% 竈



第104図 第68号住居跡



第105図 第99号住居跡出土遺物

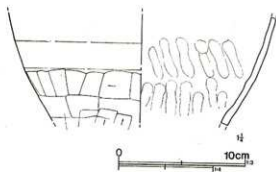
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付 碗 須恵器	口径(14.6) 高台径 (6.5) 器高 5.6	高台はやや外に張り、端面に沈線を入れる。口縁は大きく外反する。摩滅顯著。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り難し後、高台張りつけ。高台の内外を回転撫で。 末野産	胎土：0.4以下B+C+H 焼成：2 色調：10Y R7/3 にふい黄橙 残存：13% 覆土

### 第70号住居跡 (第108図)

18—セ区に位置し、第69号住居跡を切る。規模は5.66×4.6m、深さ0.4mを測る。形態は不整形で、長軸はN—0°で床標高は71.3mである。

竈はなく、床には他の施設はない。床には20cm前後の石が散乱する。

遺物は覆土から甕(1)が出土。他に第73号住居跡と接合する甕の破片がある。



第106図 第70号住居跡出土遺物

### 第70号住居跡出土遺物 (第106図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	現高 11.3	胴下半部。	粘土帯積み上げの指頭痕が内面に明瞭に見られる。その後、右回転撫でを施す。	胎土：0.5 以下B+C+G 焼成：5 色調：5PB4/1 暗青灰 残存：23% 覆土体部下位外面は鏡撫で。

### 第71号住居跡 (第109図)

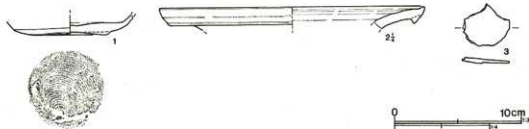
18—ス区に位置する。第72号住居跡を切断する。形態は方形で、主軸はN—164°—Eで、床標高は71.43mである。

竈は南壁左寄りにあり、長さ0.8×幅0.55mを測る。柱穴はなく、出土遺物もない。

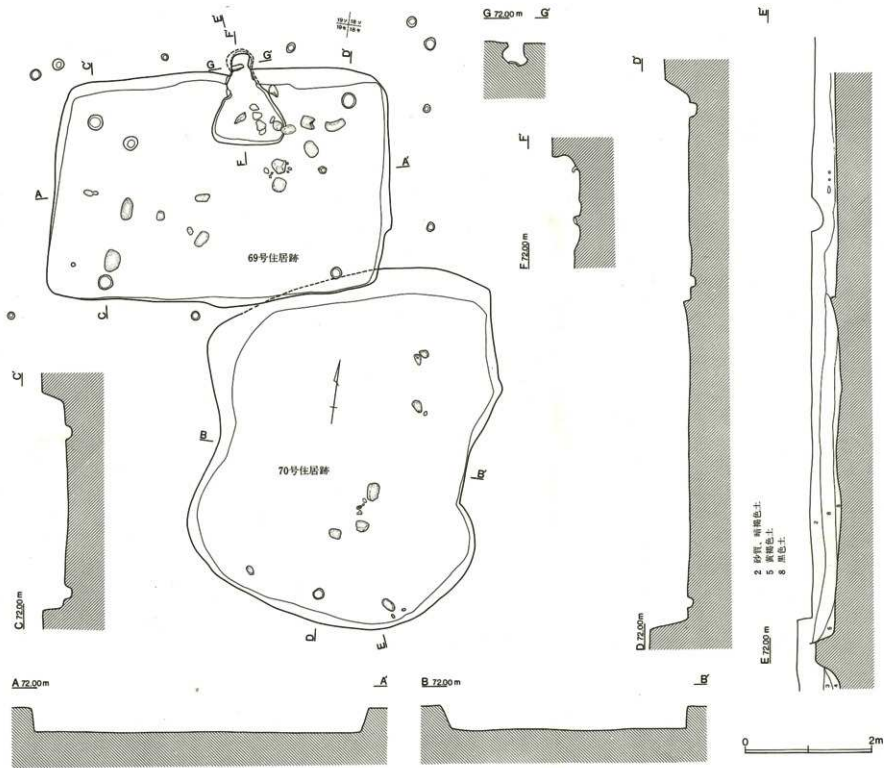
### 第72号住居跡 (第109図)

18—ス区に位置し、第71号住居跡によって切られる。規模は4.1×2.7+αm、深さ0.45mを測る。形態は不整形楕円形で、長軸はN—22°—W、床標高は71.08mである。竈および柱穴はない。東壁に接して1.15×0.6mの範囲で鉄滓と炭化物が分布し、上層にも鉄滓・焼土・炭化物を含む層が堆積する。

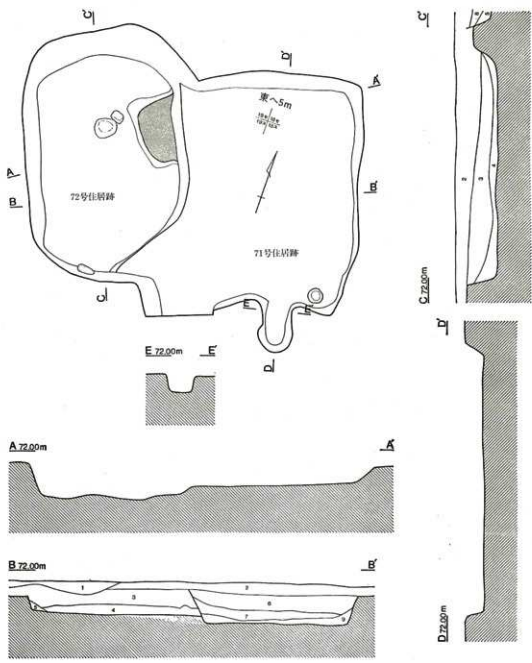
遺物は覆土中より坏(1)、甕(2)、鉄片(3)が出土し、製鉄関連として鉄滓7.73kgと炉壁片がある。



第107図 第72号住居跡出土遺物



第108図 第69・70号住居跡



- |             |                |
|-------------|----------------|
| 1. 鉄滓、焼土、炭含 | 6. 暗黒褐色土       |
| 2. 砂質、暗褐色土  | 7. 暗褐色土、砂質に富む  |
| 3. 黒褐色土     | 8. 黒色土         |
| 4. 暗褐色土     | 9. 4層に近似、やわらかい |
| 5. 黄褐色土     |                |

第109図 第71・72号住居跡

第72号住居跡出土遺物 (第107図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 6.0	底部から大きく開き、体部下位にて屈曲し立ち上がる。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.6以下B+C+D+E 焼成：2 色調：2.5 YR 6/8橙 残存：底部 覆土
2	甕 須恵器	口径(27.5)	口唇端部は上下に突出する。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：5 色調：N 4/0灰 残存：12% 覆土
3	板状鉄片	厚さ 0.35	割離し不整形。僅かに彎曲する。	鍛造。	重量：5.9g

第73号住居跡 (第110図)

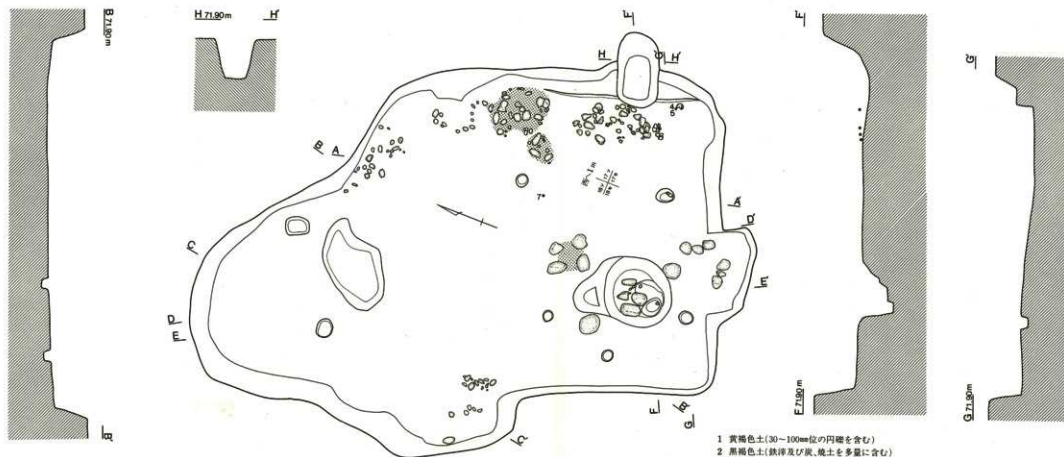
18—セ・ソ区に位置するが、規模は5.17×8.3m、深さは0.65mを測る。形態は南側が方形であるが、北壁は不安定で、不整形に張り出すが、土層からは切り合わない。主軸はN—60°30′—Eで床標高は70.96mである。竈は東壁右寄りにあり、長さ1.2×幅0.54mの大形である。床面上には23cm以下の多量の石が分布するが、竈左前方では一部、石の下に炭が広がる。中央南には径1.1m、深さ0.5mの落ち込みがある。柱穴は確認できなかった。

北壁側には、鉄滓・炭・焼土を多量に含む黒褐色土が流れ込む。

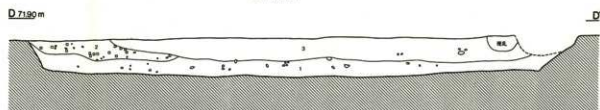
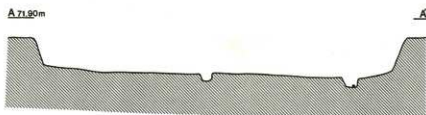
遺物は床面から高台付塊(7)、土器器坏(4)・(5)が、竈内から甕(9)が出土した。(7)と(8)は鉄滓が付着している。他に鉄滓が50g出土する。

第73号住居跡出土遺物 (第111・112図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 11.3 底径 6.3 器高 3.1	平底から直線的に外傾する体部に移行するが、内面の底部から体部へは強く屈曲する。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、周辺部鋭削り。その後、中央の糸の残る部分を擦り消すため、滑らか。 南比企産	胎土：微B+C+I(1m <sup>2</sup> —1) 焼成：5 色調：N5/0灰 残存：40% 覆土
2	杯 須恵器	口径 12.0 底径 6.9 器高 3.3	平底から屈曲して体部に移行する。口唇はやや薄くなる。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、周辺部鋭削り。 南比企産	胎土：0.2以下B+C 焼成：5 色調：2.5GY6/1 オリーブ灰 残存：90% 床
3	杯 須恵器	口径(13.3) 底径(8.1) 器高 3.4	平底から強く屈曲して外傾する体部に至る。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、周辺部鋭削り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+E 多 焼成：2 色調：5 Y 7/1 灰白 残存：30% 覆土

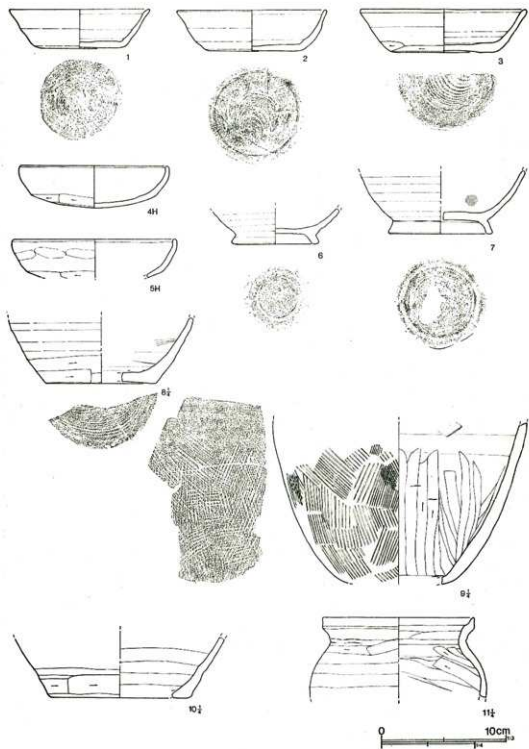


- 1 黄褐色土(30-100mm位の円礫を含む)
- 2 黒褐色土(鉄屑及び炭、焼土を多量に含む)
- 3 黒褐色土



第110区 第73号住居跡

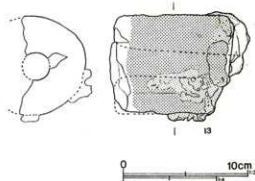
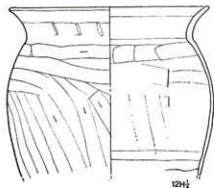
0 2m



第111图 第73号住居跡出土遺物(1)



番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯 土師器	口径 11.9 器高 3.3	丸底から内彎する体部を経て口唇に至る。	口縁部横撫で後、体部下半右→左への篋削り。	胎土：微A+E+G+H 焼成：4色調：2.5YR 5/8明赤褐 残存：55% 床
5	杯 土師器	口径 13.2	丸底から体部下位で屈曲し、内彎する体部に至る。口唇は僅かに内傾する。	口縁部横撫で後、体部下半右→左への篋削り。	胎土：微A+D+E+F+G 焼成：3色調：2.5YR 5/8明赤褐 残存：40% 二次加熱 床
6	高台付 埴	高台径 7.0	高台は八の部状に大きく開き、端面が外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台付着後、内外を右回転撫で。末野産	胎土：0.3以下B+C+E 焼成：2色調：2.5Y7/2 灰黄 残存：底部 覆土
7	高台付 埴 須恵器	高台径 8.4	高台は高くへの字状に開くが、厚さが一定し端部が水平につくられる内面に1cm大の鉄滓が付着する。	右回転撫で7周+α。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。末野産	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：5色調：2.5Y7/2 灰黄 残存：上半欠 床
8	甕 須恵器	底径(11.5)	平底から丸味を持って立ち上がる。鉄滓が僅かに付着する。	右回転撫で。胴最下位部は右→左への回転篋削り。底部は右回転糸切り。末野産	胎土：0.8以下B+C+D+E 焼成：5色調：2.5Y7/2灰黄 残存：40% 覆土
9	甕 須恵器	胴径 26.9 現高 16.8	底部付近で、体部から窄まり、平底風になる。	粘土帯積み上げ、平行叩き成形。内面は下→上への木口撫でが施される。	胎土：0.7以下B+C+E 焼成：5色調：N4/0 灰 残存：胴下半60% 甕
10	甕 須恵器	底径(15.1)	平底から直線的に外傾し立ち上がり体部に移行する。	粘土帯積み上げ。右回転撫で。外面体部最下位は左→右への篋削り。	胎土：0.6以下B+C+D+E 焼成：4色調：2.5YR 7/2明赤灰 残存：20% 覆土
11	甕 須恵器	口径(16.0) 胴径(18.7)	丸い胴から外反して口縁に至る。口唇は直立し、内側に段を外側に平坦面を持つ。	右回転撫で。体部は外面を木口撫で、内面を篋撫でする。口縁は内外横撫で。	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：5色調：5P B5/1 青灰 残存：13% 覆土
12	甕 土師器	口径(21.0) 胴径(21.8)	最大径を上位に持つ胴部から、大きく外反する口縁に至る。口縁はやや肥厚する。	口縁横撫で後、胴上位は右→左、中位以下は右上→左下へ篋削りする。内面は横位の篋撫で。	胎土：微A+B+C+E+F+G 焼成：4色調：2.5YR5/6明赤褐 残存：40% 覆土
13	羽	口全長 11.3 外径 7.9 孔径 2.2	先端が隔壁して黒色ガラス化するが、そのためか短かい羽口である。孔部は基部にて擦れたため太くなる。	棒に巻きつけ、表面を指頭痰で撫でる。口部周辺には溶けた鉄滓が垂れ下がる。	胎土：A少+スナ多 砂は他の羽口より少ない。 残存：60%



第112図 第73号住居跡出土遺物(2)

第74号住居跡 (第113図)

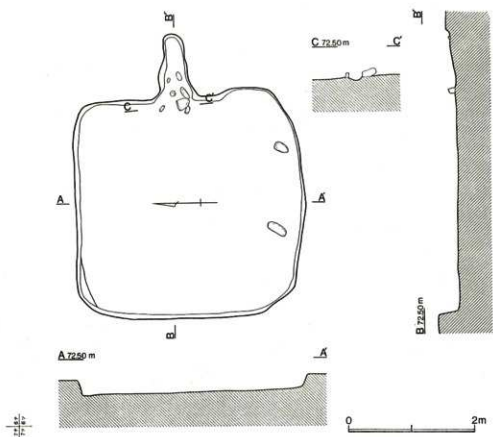
6一ツ区に位置し、規模は3.47×3.68m、深さは0.23mを測る。形態は不整形で、主軸はN—89°—E、床標高は71.97mである。

竈は東壁中央にあり、長さ1.1×幅0.55mで、煙道は狭く長い形態で緩やかに傾斜して立ち上がる。竈には支脚が置かれる。柱穴は未検出である。

遺物は竈から土師器小形甕(3)、支脚(4)が、覆土から土師器坏(1)、高台付埴(2)・(3)、土師器甕(8)・(9)の他、埴(5)、長頸瓶(6)、甕(1)、甕(4)、土師器甕(7)・(9)・(10)、釘(11)が出土する。製鉄関連遺物として鉄滓350g、羽口片、鉄滓付着土器がある。

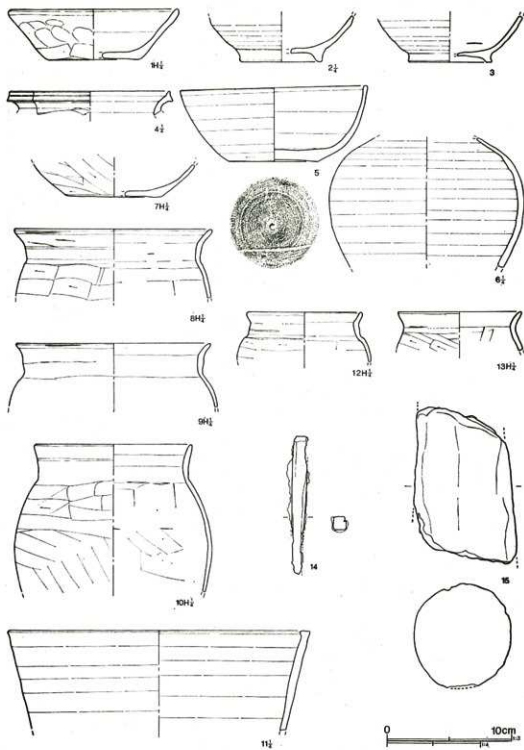
第74号住居跡出土遺物 (第114図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 土師器	口径(13.7) 底径(7.3) 器高 4.0	平底から外傾する体部へ移行するが、厚手である。外面には指痕が明瞭。	底部は篋削り。体部下位は篋撫で。二次加熱。	胎土：微A多+B+E+F+G 焼成：4 色調：7.5 YR 6/4にふい橙 残存：30% 覆土
2	高台付 埴 須恵器	高台径 (6.6)	高台は端部を丸くつくる。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。高台内外右回転撫で。末野産	胎土：微A+B+C+E 焼成：1 色調：10 YR 7/3にふい黄橙 残存：25% 覆土
3	高台付 埴 須恵器	高台径 6.7	高台は外に強く張り出し、端面に沈線を加える。高台は短かい。薄手。	右回転撫で7周+α。底面摩擦で不明瞭。末野産	胎土：微A+B+E 焼成：1 色調：7.5 YR 6/4にふい橙 残存：30% 覆土
4	甕 須恵器	口径 16.9	口縁は反り、口唇は上下に延びる。端面はやや窪む。	右回転撫で。末野産	胎土：微A+B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：口縁15%
5	埴	口径 15.1	平底から僅かに外反してか	右回転撫で。底部全面右回	胎土：微A少+I (1cm)



第113図 第74号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	須恵器	底径 7.1 器高 5.9	ら内彎する体部に至る。	転筥削り。また体部最下位も同様筥削り。 南比企産	10) 焼成: 3 色調: 2.5 Y 6/2 灰黄 残存: 40%
	長頸瓶 須恵器	胴径(20.6) 現高 13.6	最大径をやや上位に持つ胴部片である。	右回転撫で13周+α。	胎土: 0.5 以下B+C+E 焼成: 2 色調: 2.5 YR 6/2 灰赤 残存: 30%
7	甕 土師器	底径(10.0)		体部下位上→下への筥削り。	胎土: 微A+B+C+E+F+G+H 焼成: 4 色調: 2.5 YR 6/6 橙 残存: 40%
8	甕 土師器	口径(20.9)	やや外傾するコの字状口縁、口縁は肥厚する。	口縁二段横撫での後、胴外面右→左への筥削り。内面右→左への木口撫で。	胎土: 微A多+F+H 焼成: 4 色調: 5 YR 5/4 にふい赤褐 残存: 15% 覆土
9	甕	口径(20.5)	僅かに外傾するコの字状口	口縁横撫で2段の後、胴部	胎土: 微A多+E+F+G



第114图 第74号住居跡出土遺物

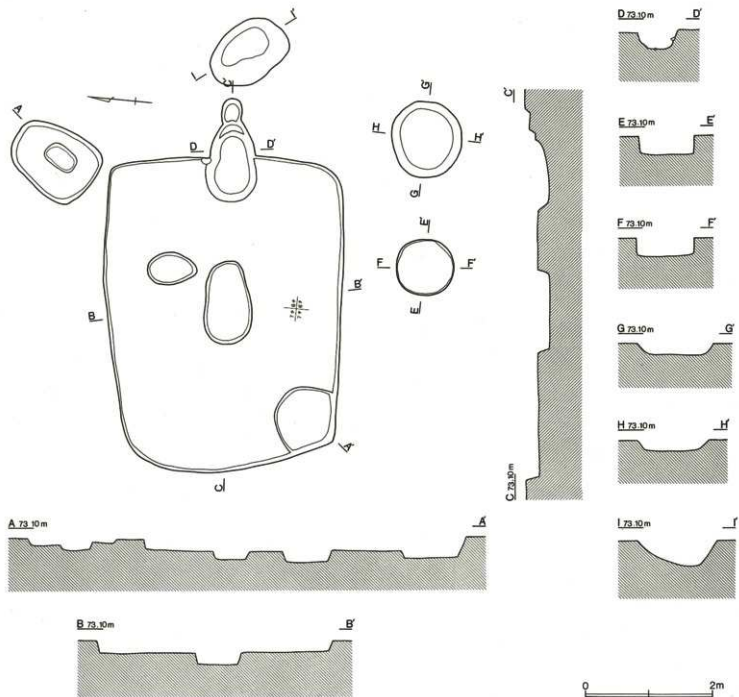
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	土師器		縁。口縁は肥厚する。口縁には粘土接合痕が見られる。	寛削り。内面篋撫で。二次加熱を受ける。	焼成：3 色調：5 Y R 6/8 橙 残存：12%
10	甕 土師器	口径(16.7) 胴径(20.9) 現高 15.5	張りの少ない胴から、僅かに外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	内面に粘土接合痕が明瞭。口縁横撫での後、胴部は上位が右→左、中位は左上→右下への篋削り。内面は右→左への篋撫で。	胎土：微A+E+F+G 焼成：4 色調：5 Y R 6/6 橙 残存：25% 覆土
11	甕 須恵器	口径(31.9)	直線的に外傾する体部片で、口唇は端面に中窪みの平坦面を持ち、内側へ延びる。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.4 以下B+C 焼成：4 色調：10 Y R 6/3 にぶい黄橙 残存：13%
12	小形甕 土師器	口径(12.1) 胴径(14.2)	小形甕で、口縁は内傾するコの字状口縁である。	口縁2段の横撫での後、胴部外面を右→左へ篋削り。内面は右→左へ篋撫で。	胎土：微A多+F+G 焼成：4 色調：7.5 Y R 6/4 にぶい橙 残存：23%
13	小形甕 土師器	口径(13.0)	胴部から口縁へは緩やかに移る。内面頸部には、弱い稜をつくる。二次加熱。	口縁横撫での後、胴部外面は右→左へ篋削り。内面は右→左へ篋撫で。	胎土：微A多+F+G 焼成：5 Y R 6/6 橙 残存：25% 藍
14	釘 鉄製品	現長 11.0	錆が著しく、旧態を保っていないが、断面一辺1.05 cmの正方形で、一端は細くなる。	鍛造。	重量：39.53g
15	支脚 土製品	現長 12.5 外径 7.7	頂部と基部を欠くが、頂部が細い截頭円錐状となるであろう。	粘土にスヤをかめながら固める。胎土は羽口と同様である。	胎土：1.0 以下A多+スヤ 焼成：二次加熱を受けもろい 色調：2.5 Y R 6/8橙 残存：70% 藍

#### 第75号住居跡 (第115図)

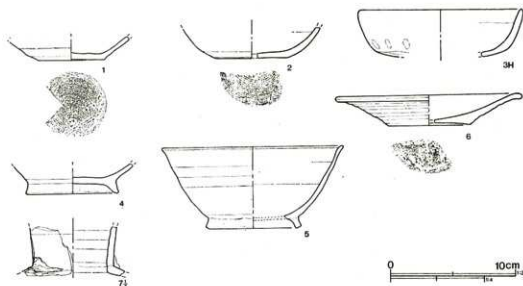
6・7一チ区に位置する。規模は4.95×3.75 mで、深さは0.37 mを測る。形態は長方形で、主軸はN-84°30'-E、床標高は72.55 mである。

竈は短辺の東壁中央にあり、長さ1.6×幅0.7 mを測る。焚口は深くなり、煙道へは段を持ちながら立ち上がる。竈の床は、焼土が明瞭に見られた。床は中央、南西隅に浅い土坑が存在するが、性格は不明である。これと同類の土坑が住居の周辺に4個見られるが、住居との関連は不明である。柱穴は検出できなかった。

遺物はいずれも覆土から出土しており、坏(1)・(2)、土師器坏(3)、高台付埴(4)・(5)、皿(6)、灰釉壺(7)が出土する。この他第76号住居跡出土の壺(8)と接合する破片がある。鉄滓が570 g、羽口片が6点出土する。



第115图 第75号住居跡



第116図 第75号住居跡出土遺物

第75号住居跡出土遺跡 (第116図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 5.3	平底から指差し込み部で外反し、立ち上がる。焼き重ねのため外面体部上位が酸化する。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。 南比金産	胎土：0.2以下A+I(1c <sub>d</sub> -3) 焼成：5 色調：7.5 GY 4/1 暗緑灰 残存：底部80% 覆土
2	杯 須恵器	底径(6.0)	平底から指差し込み部で外反し、丸い体部に移る。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+E 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：25% 覆土
3	杯 土師器	口径(13.1)	丸底から屈曲して外傾する体部に移行する。体部上位は厚手である。	口縁横撫で。底部露削り。	胎土：B・D・金H多+F 焼成：2 色調：5 YR 6/6 橙 残存：20% 覆土
4	高台付 碗 須恵器	高台径 7.5	高台はへの字状に張り出し、端部が薄くなる。	右回転撫で。底部糸切り後高台張りつけ。内外右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D+E 焼成：1 色調：5 YR 6/6 橙 残存：底部100% 覆土
5	高台付 碗 須恵器	口径(14.6) 高台径 (7.7) 器高 6.6	高台はへの字状に張り出し、端面は外傾する。口唇部は外反し、全体に薄い作りとなる。	右回転撫で。高台張りつけ後、内外を右回転撫でする。 末野産	胎土：0.2以下のB+C+D+H 焼成：2 色調：10 YR 7/1 灰白 残存：20% 覆土
6	皿 須恵器	口径(15.0) 底径(6.5)	やや上げ底の底部から、大きく外反する体部を経て、	右回転撫で7周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.7以下B・C・D 多 焼成：3 色調：10 Y

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	壺 灰釉	器高 2.45	反り返る口唇部に至る。口唇部は肥厚し、体部は轆轤目が著しい。	右回転撫で。丁寧な引き上げである。猿投産	R 6/1 褐灰 残存: 20% 覆土
		頸部径 (8.6)	頸部で屈折し、やや外反気味に開く。屈曲部に厚く釉が掛かる。口縁部の接合は胴部に乗せるだけである。		

#### 第76号住居跡 (第117図)

4一チ区に位置し、黒田第21号墳を切る。規模は6.42×4.87mで、深さ0.38mを測る。形態は不整形長方形で不明確である。主軸はN-57°30'-W、床面高は72.16mである。

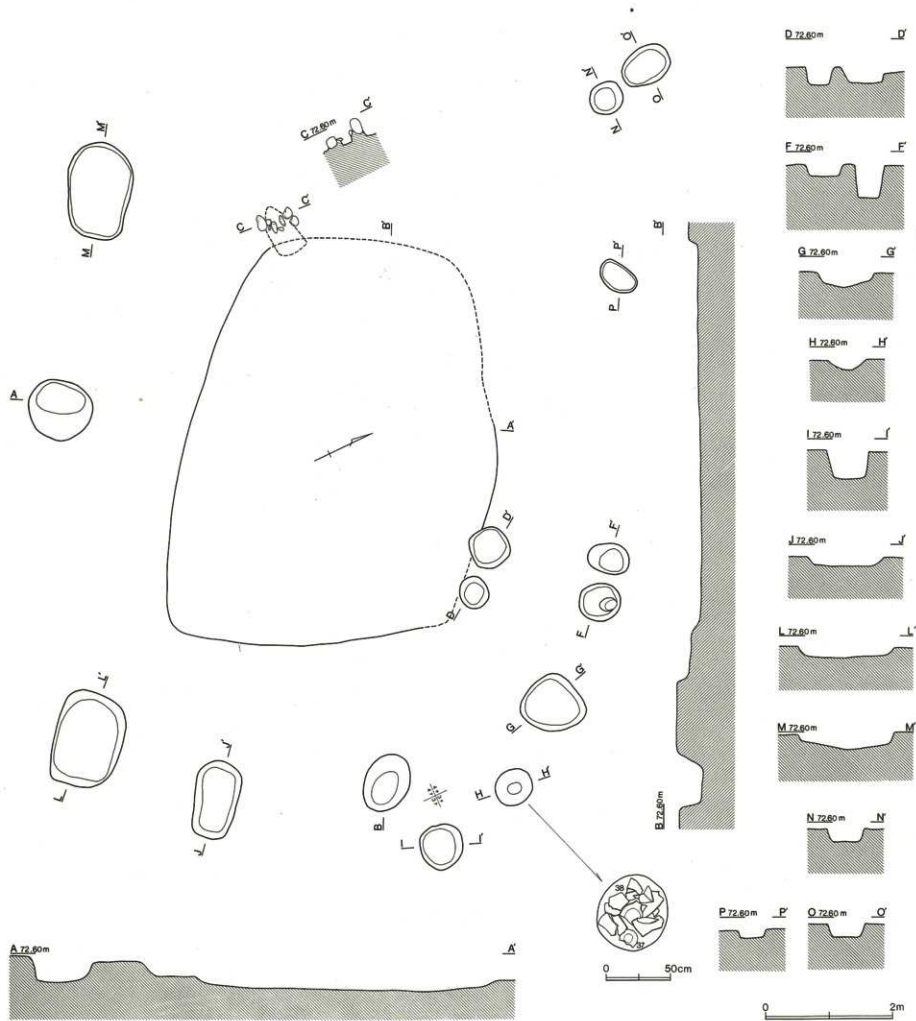
竈は南西隅に石に囲まれて存在するが、不明確である。壁も不明確である。周囲には15個の土坑が見られるが、住居との関連は不明である。北東の1土坑からは、底に大甕を敷きつめて、その上に皿が1個置かれた状態で検出されている。

出土物は、多く出土するが、竈から高台付埴(5)、土師器台付甕(6)が、他に鉄滓付着の坏(1)、土師切(2)、把手付壺(3)、灰釉瓶(4)、無底甕(7)、大甕(8)などがめだつ遺物である。接合関係は著しく、(6)が第75号住居跡と、(5)が第62号住居跡、(3)が第62・77住居跡、(4)が第77号住居跡、(7)が第77・78号住居跡、(8)が第77号住居跡、(9)・(10)・(11)が第62号住居跡と接合した。製鉄関連遺物として、鉄滓が2.38kgと羽片が出土した。

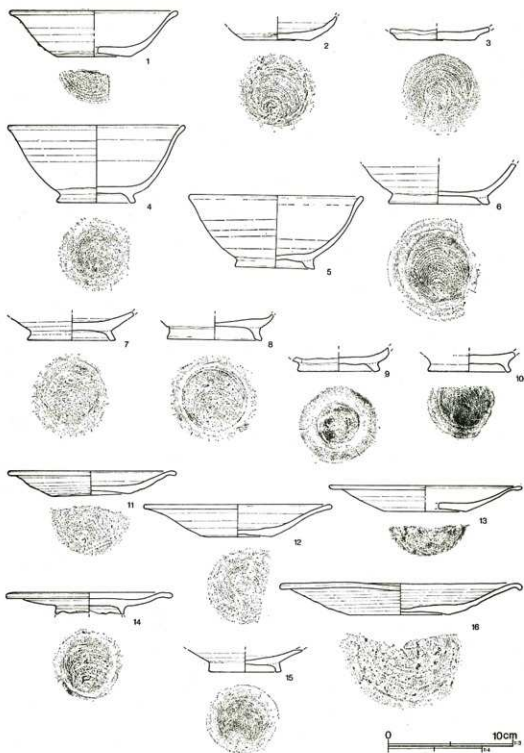
#### 第76号住居跡出土遺物 (第118~122図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径(13.5)	上げ底気味で、口縁部は肥厚し外反する。鉄滓付着。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。末野産	胎土: 0.3以下B+C 焼成: 5 色調: N 4/0 灰 残存: 20%
		底径(5.9)			
		器高 3.6			
2	坏 須恵器	底径 5.2	平底から内彎する体部に移る。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。南比企産?	胎土: 0.5以下B+C少 焼成: 5 色調: 5 Y 6/1 灰 残存: 底部100%
3	坏 須恵器	底径 6.3	平底から指差し込み部で外反する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土: 0.3以下B+C 焼成: 2 色調: 5 Y 6/1 灰 残存: 底部100%
4	高台付 須恵器	口径 14.2	高台はハの字状に開く。口縁は大きく外反し、玉縁状になる。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、高台張りつけ。高台の内外回転撫で。末野産	胎土: 粗B+C 焼成: 2 色調: 2.5 Y 7/1 灰白 残存: 40%
		高台径 6.3			
		器高 6.2			
5	高台付 須恵器	口径 14.1	高台はやや開き、端面に沈線を入れ、内傾する。口唇は肥厚し外反する。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外回転撫で。末野産	胎土: 0.4以下B+C+E 焼成: 3 色調: 7.5 Y R 6/6 橙 残存: 40% 竈
		高台径 6.4			
		器高 5.8			



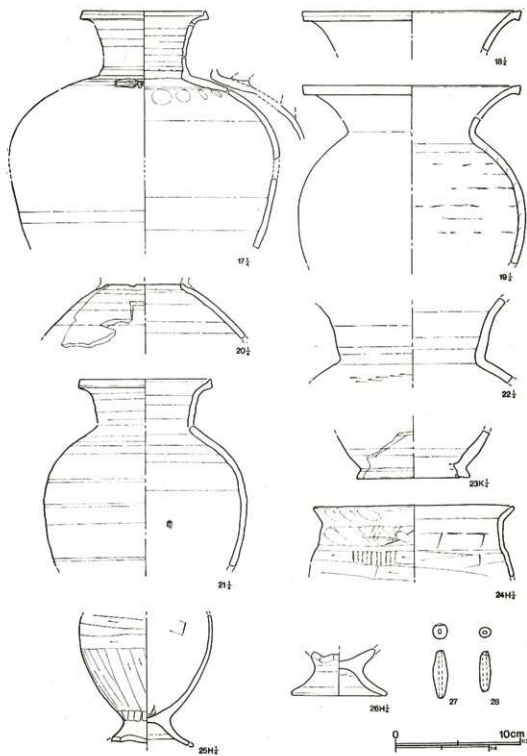


第117图 第76号住居跡



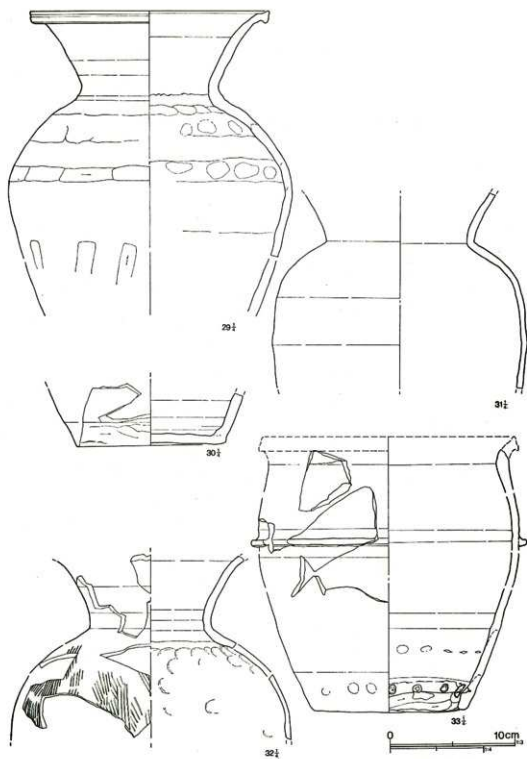
第118图 第76号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	高台付 碗 須恵器	高台径 8.2	高台はハの字状に開き、端面に沈線を入れる。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後内外回転撫で。末野産	胎土：0.3以下B+C+E 焼成：4 色調：10Y R6/2 灰黄褐 残存：底部80%
7	高台付 碗 須恵器	高台径 7.1	高台はハの字状に開き、端面が水平になる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：4 色調：5 Y 6/1 灰 残存：底部100%
8	高台付 碗 須恵器	高台径 7.6	高台はハの字状に開き、端面が窪み内傾する。	右回転撫で。右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。末野産	胎土：0.5以下B+C+D 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：底部100%
9	高台付 碗 須恵器	高台径 6.1	高台径は小さく、外へ大きく張り出す。	右回転撫で。右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。末野産	胎土：粗B+C+D+E+H 焼成：1 色調：7.5 Y R 7/4 に近い橙 残存：底部100%
10	高台付 碗 須恵器	高台径 6.7	高台はハの字状に開き、端面は外傾する。	右回転撫で。右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。末野産	胎土：0.3以下B+C 焼成：4 色調：N 5/0 灰 残存：底部60%
11	皿 須恵器	口径 13.6 底径 6.4 器高 2.0	上げ底から大きく外傾する体部を経て、反り返る口唇に至る。	右回転撫で7周。右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.3以下B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：50%
12	皿 須恵器	口径 15.2 底径 5.8 器高 2.6	上げ底から大きく外反する体部に至る。	右回転撫で4周。右回転まわし糸切り。末野産	胎土：0.7以下B+C+D 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：50%
13	皿 須恵器	口径(15.5) 底径(6.5) 器高 2.1	上げ底から外傾する体部を経て、大きく反り返る口唇に至る。口唇は肥厚する。	右回転撫で4周。右回転糸切り。末野産	胎土：B+C+E 焼成：2 色調：2.5 Y 7/2 灰黄 残存：30%
14	高台付 皿 須恵器	口径 13.5 高台径 5.6 器高 1.7	高台は細く、開きは少ない。皿部は口唇が大きく反り返る。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土：B+C+E 焼成：2 色調：5 Y 7/1 灰白 残存：60%
15	高台付 皿 須恵器	高台径 5.8	碗の高台と比べ小さい。高台端部は台形に近く、端面は水平になる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外面右回転撫で。末野産	胎土：0.3以下B+C+D +E+H 焼成：3 色調：7.5 Y R6/3 に近い褐 残存：底部100%
16	大皿 須恵器	口径 19.5 底径 8.0 器高 2.6	上げ底から外傾する体部を経て、大きく反り返る玉縁状になる口唇に至る。体部は轆轤目明瞭。焼け歪む。	右回転撫で9周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.7以下B+C+D 焼成：5 色調N 4/0 灰 残存：55%
17	把手付	口径(12.9)	肩に把手が付く壺である	右回転撫で。口縁の接合は	胎土：B・C少+I(1cal-



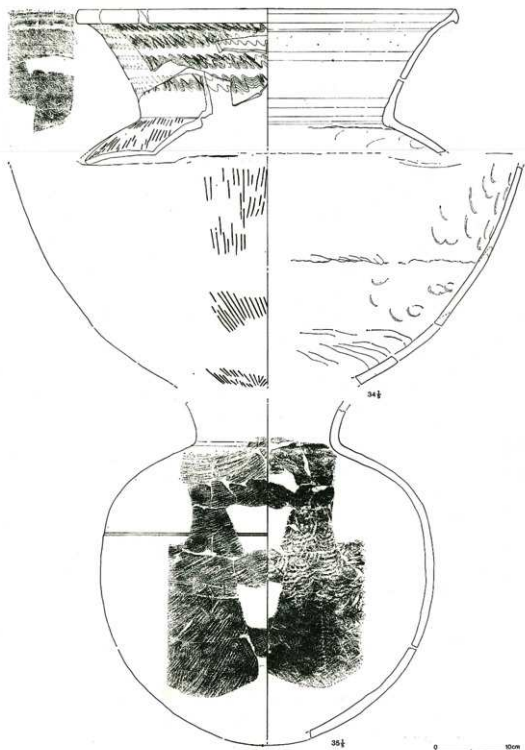
第119圖 第76号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	壺 須恵器	胴径(28.6) 現高(25.0)	が、肩部は張るであろう。口縁部は大きく外反し水平近くになった後、口唇は内傾するように立ち上がる。	胴部に乗せる。把手の接合は肩部を寛削りした後、棒状の粘土を張りつけ、指で撫でつける。 南比企産	10) 焼成：3 色調：N 5/0 灰 残存：20% 底部欠第62・77号住の破片と接合した。
		口径(23.0)	口縁は大きく外反し、口唇端面下位には窪みを巡らす。口唇上面は平坦をつくる。	右回転撫で。内面には緑色の釉が掛かる。ヤや多孔質。 南比企産	胎土：0.1以下B 焼成：5 色調：5 B 4/1 暗青灰 残存：口縁30%
19	壺 須恵器	口径(23.0) 胴径(24.0)	胴部は丸く、頸部で屈曲して大きく外反する。口唇は下方に延び端面をつくる。	幅1.5cm強の粘土帯接合痕がある。口縁内外には右回転撫で。胴部内面僅かな右回転撫で。 南比企産	胎土：白・黒A 焼成：5 色調：10 Y R 6/2 灰黄褐 残存：25% 第62号住居跡と接合。
		現高 6.6	胴上位は緩やかに窄まるが、口縁は上に乗せ僅かに粘土を巻く。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。丹彩であろうか、表面が赤色化する。 末野産	胎土：B+C+D+E 焼成：3 色調：2.5 Y 5/1 黄灰 残存：20% ビットと第75号住居跡覆土と接合。
21	壺 須恵器	口径(13.7) 胴径(21.5) 現高 19.6	最大径を中位に持つ胴部から、屈折して外傾する口縁部に至る。口縁部は上方に尖り端面は平坦部を作る。	粘土帯積み上げ、右回転撫で。胴部外面には沈線状の轆轤目明瞭。内面胴部中位に1cm=8×7本の布目痕あり。 末野産	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：30% 第62号住居跡と接合。
		頸部径15.2	頸部で強く屈曲して外反する口縁に至る。	粘土帯積み上げ、平行叩き成形。その後口縁部は左回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D 焼成：5 色調：5 P B 4/1 暗青灰 残存：頸部40%
23	瓶 灰釉?	高台径12.1	高台は台形となり、端面は内傾する。	右回転撫で。胴部下位は右回転寛削り後、高台張りつけ。内面は底部周縁に強い回転撫で。	胎土：白色微A 夾雑物ほとんどなし 焼成：5 色調：10 Y 4/1 灰 残存：高台20%
24	壺 土師器	口径 21.3	胴部からやや内傾するコの字状口縁に至る。口唇部は肥厚し、外傾する。	口縁部2段の横撫での後、胴部上位を右→左へ寛削りする。内面は右→左への横撫で。	胎土：微A+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 Y R 5/4 に近い赤褐 残存：胴上位90%
25	台付壺 土師器	胴径 14.0	脚台部は大きく開き、胴部は緩やかに内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ胴部に至る。	脚部は横撫で、胴部下位は左上→右下への寛削り、胴部中位は右→左への寛削りが行なわれ、内面は右→左への横撫で。	胎土：微A+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 Y R 6/6 橙 残存：50%
		脚径 4.9			
26	台付壺 土師器	脚径 10.2	脚は大きく開く。基部で緩やかに外反する。	脚部は横撫でを施す。	胎土：微A+E+F+G+H 焼成：4 色調：7.5



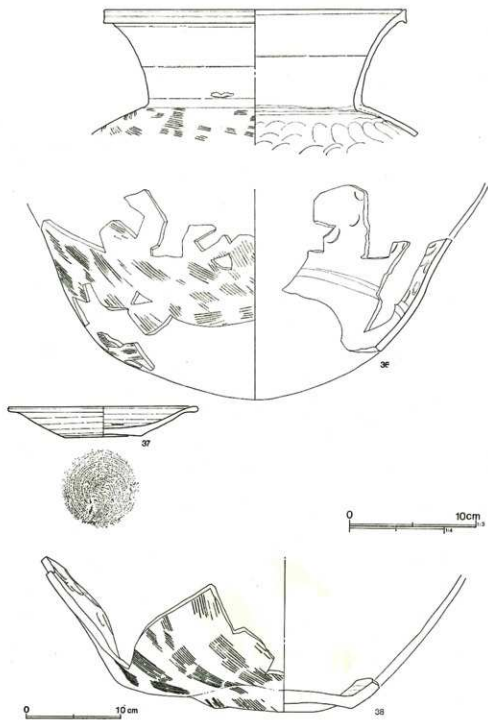
第120圖 第76号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
27	土 鉢	全長 3.75 外径 1.2 孔径 0.25	細形で、中央が最大径となる。	棒に巻きつけ抜く。 重量：4.37g	YR6/6橙 残存：台脚100% 窟西 胎土：微A+E+F+G+H 焼成：5 色調：10R 5/6 赤 残存：95%
28	土 鉢	全長 3.2 外径 0.9 孔径 0.3	細形で、長楕円形を呈する。	棒に巻きつけ抜く。 重量：2.14g	胎土：微A+E+F+G+H 焼成：5 色調：10R 5/6 赤 残存：100%
29	甕 須恵器	口径 25.2 胴径 30.0 現高 32.0	胴部は下位から外傾して立ち上がり、屈曲して内彎する。口縁部から大きく外反し口唇部は下へ延びる。端面は沈線を巡らせ、口唇上方には平坦部をつくる。	粘土帯積み上げ。胴上半部内面に接合痕著しい。口縁は右回転撫で。胴部最大径部分に左→右への篋削りが運る。 末野産	胎土：0.7以下B+C+D+E多 焼成：5 色調：N 3/0 暗灰 残存：底部欠50% 第77号住居跡出土品と接合。
30	甕 須恵器	底径(15.8)	平底から外傾する胴部に移行する。	粘土帯積み上げ。右回転撫で。底部内面は右回転撫で7周。外面胴最下位、左→右への篋削り。 末野産?	胎土：0.2以下B多 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：30%
31	壺 須恵器	頸部径 (15.7) 胴径(27.1)	やや長い胴から頸部にて強く屈折して、大きく外反する口縁に至る。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。肩に肩部のみ篋撫で行なう。 末野産	胎土：B+C+D 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：30%胴下位、口唇欠
32	壺 須恵器	頸部径 (12.9) 現高 19.2	丸い胴部から、大きく外反する口縁に移る。肩に斑点状の自然釉が損かる。	粘土帯積み上げ。胴部は平行叩き成形。内面に無文の当て具痕付着。口縁部は右回転撫で。器内はセピア色で土は精選され生産地不詳。	胎土：0.3以下B+C少 焼成：5 色調：10 G 3/1 暗緑灰 残存：上半部30% 第62号住居跡と接合。
33	甕 須恵器	頸部径 (25.4) 胴径(29.1) 底径(16.1) 孔径(14.5)	孔部は大きく、その周辺には篋状工具で開けられた、貫通しない穴がほぼ等間隔に開けられる。この穴は枝を渡す穴と考えられる。胴中位には短かい突帯が運る。頸部は外反する。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。孔部は左→右へ篋削りする。頸部は突帯を付着した後、上部を回転撫でで付着する。 末野産	胎土：B+C+D+F+H 焼成：4 色調：2.5 G Y 5/1 残存：25%
34	大 甕 須恵器	口径(52.2) 頸部径 (35.2)	底部は丸底で緩やかに立ち上がる。口縁部は頸部で屈折して大きく外反し、口唇は上と下へ突き出す。口縁部には4段の波状文が運る。底部に焼台に接した、	粘土帯積み上げ後、平行叩き成形を行なう。内面胴最下位には撫でが横走り、その上には無文の当て具痕が残る。口縁部の波状文は右回りである。 南比企産	胎土：0.9以下B+C+D+I (cal=6) 焼成：5 色調：10Y 6/1 灰 残存：口縁部30%、底部25% 第77号住居跡と接合。



第121图 第76号住居跡出土遺物(4)





第122図 第76号住居跡出土遺物(5)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
35	壺 須恵器	頸部径 (19.8) 胴径(46.4)	青灰色で円形の跡あり。 やや縦長の球胴を呈するが、胴中位上には沈線が巡る。口縁部は緩やかに屈曲し、外反する口縁に至る。	粘土帯積み上げ後、平行叩き成形。下方では垂直に近く、上方では水平に近い。内面の当て目は下方では青海波に近く、その上を平滑に仕上げている。上方はやや深い同心円当て目で、口縁は右回転撫で。末野産	胎土：B+C+D+E 焼成：4 色調：10Y 5/1 灰 残存：30% 第77・78号住居跡と接合する。
36	大甕 須恵器	口径(48.0) 頸部径 (34.0)	口縁は大きく外反し、口唇は上下に突出する。底部は丸底。	粘土帯積み上げ。平行叩き成形。口縁部は右回転撫で。末野産	胎土：B+C多 焼成：5 色調：10Y 6/1 灰 残存： 胴中位欠、口縁20%
37	皿 須恵器	口径 15.1 底径 6.0 器高 2.4	やや上げ底で、体部は外傾するが口唇は大きく外反し、肥厚する。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：B+C+D+H 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：80% 東土坑
38	大甕 須恵器	底径 14.5	挽け歪みが著しい。大甕では数少ない平底である。	粘土帯積み上げ。平行叩き成形。内面は無文の当て目痕あり。	胎土：0.8以下B+C 焼成：5 色調：5PB 4/1 暗青灰 残存：胴下半40%

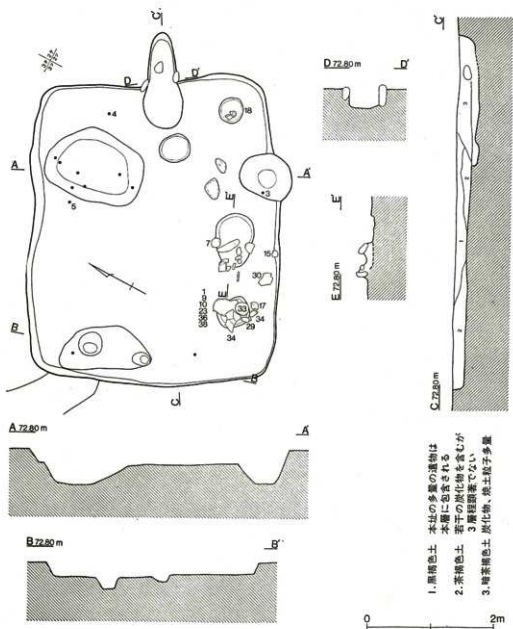
### 第77号住居跡(第123図)

3—ツ区に位置する。規模は4.69×3.93m、深さは0.57mを測る。形態は長方形で、主軸はN—63°30′—E、床標高は71.82mである。

竈は東壁中央にあり長さ1.5×幅0.65mで、壁には河原石が使われるやや煙道の長い竈である。床にはいくつかの土坑が見られるが、竈手前のは1.55×1.18m、深さ0.3mと深い。他は南壁沿いに見られるのが小形であり、それぞれ遺物が出土している。北西隅と南東隅に柱穴らしきものがあるが、他は不明である。

土層は1層が遺物を多量に含む黒褐色、2層が茶褐色、3層が竈付近で、炭化物・焼土を多量に含む暗茶褐色である。

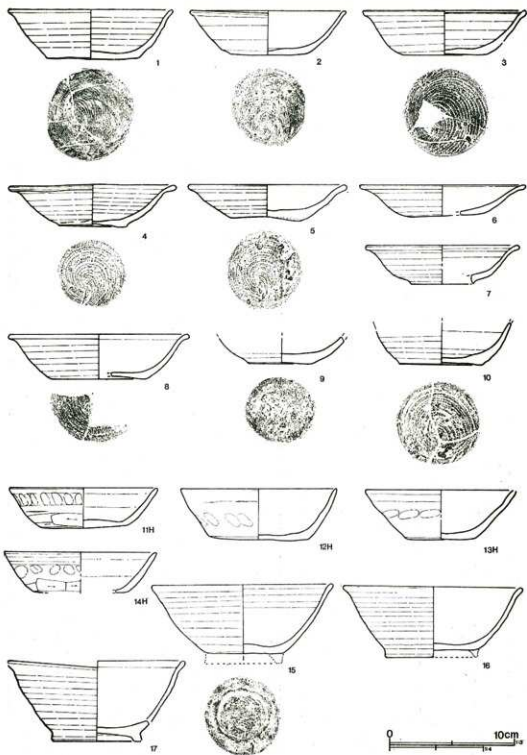
遺物は竈中から坏(8)・(8)、土師器坏(3)・(4)、皿(5)が、竈西方から坏(4)、皿(5)が、南西ビットから坏(1)・(9)・(9)・(2)、高坏(1)、灰釉瓶(2)、土師器甕(4)・(4)・(9)など多くが出土する。他に南壁沿いから坏(3)・(5)、灰釉瓶(2)が出土する。(1)・(9)・(8)・(2)には鉄滓が付着する。いくつかの甕の破片は第76号住居跡の(2)・(4)・(9)と接合する。鉄滓は585g、羽片が多く出土する。



第123図 第77号住居跡

第77号住居跡出土遺物 (第124~126図)

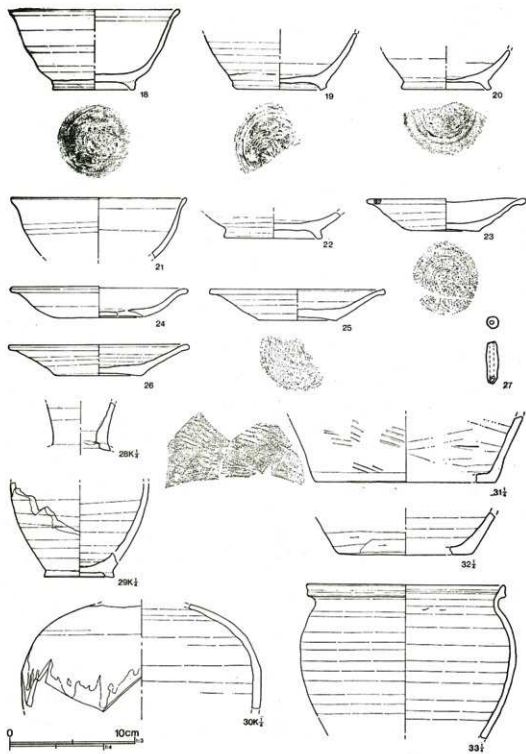
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 13.3 底径 7.4 器高 3.9	平底から輪縁目の著しい体部を経て、外反する口唇に至る。鉄滓付着。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：5色調：2.5Y7/1灰白 残存：90% 床
2	杯	口径 12.6	平底で、口唇はやや外反す	右回転撫で4周。底部右回	胎土：0.3以下B・C・D



第124図 第77号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
3	須恵器 杯	底径 6.0	る。	転まわし糸切り。末野産	多+E 焼成: 3 色調: 2.5Y6/1黄灰 残存: 80% 胎土分析№17 床
		器高 3.5			
4	須恵器 杯	口径 13.2	体部下半が丸く、口唇は大きく外反し、肥厚する。	右回転撫で7周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土: 0.5以下B+C 焼成: 5 色調: 7.5Y4/1灰 残存: 70% 床
		底径 6.7			
5	須恵器 杯	口径 13.5	僅かに上げ底となり、口唇が肥厚し外反する。器高が低く、指差し込み部が明瞭。	右回転撫で7周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土: 0.7以下B+C+D 焼成: 5 色調: N 5/0灰 残存: 70% 床
		底径 5.5			
6	須恵器 杯	口径 12.8	焼け歪み上げ底となり、口唇は外反する、厚手の杯。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土: 0.3以下B+C 焼成: 5 色調: 7.5YR6/1 黄灰 残存: 100% 床
		底径 5.6			
7	須恵器 杯	口径 13.4	浅い形態で、体部は大きく開き、玉縁となる口唇が肥厚する。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。末野産	胎土: A+B+H 焼成: 2 色調: 7.5YR7/3にぶい橙 残存: 50%
		底径 5.3			
8	須恵器 杯	口径(12.4)	底部から指差し込み部で外反し、丸い体部を経て、大きく反る玉縁の口唇に至る。	右回転撫で8周。末野産?	胎土: B+C 焼成: 5 色調: 10YR 7/2 にぶい黄橙 残存: 25%
		底径(5.0)			
9	須恵器 杯	口径(14.6)	底部は上げ底気味で、口唇は大きく外反する。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。末野産	胎土: B+C+D+H 焼成: 4 色調: 2.5Y5/1黄灰 残存: 25% 電
		底径(7.6)			
10	須恵器 杯	口径 5.0	指差し込み部で強く外反し、内彎する体部へ移る。鉄滓付着。	右回転撫で。底部二次加熱により荒れて不明瞭。末野産	胎土: 0.5以下B+C+H 焼成: 2 色調: 5Y 7/3 浅黄 残存: 底部 100% 床
		底径 5.0			
11	須恵器 杯	口径 6.7	底部はやや上げ底で、指差し込み部で外反する。体部は丸く立ち上がる。	右回転撫で6周+α。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土: B+C+E 焼成: 2 色調: 7.5Y7/1灰白 残存: 底部 100% 床
		底径 6.7			
12	土師器 杯	口径 11.9	平底気味の底部から外傾する体部に至る。体部中位には指頭真明瞭。	口縁横撫で。底部と体部下位は筧削り。体位下部は右→左へ。内面木口撫で。	胎土: 微A+B+E+F+G 焼成: 3 色調: 2.5YR 7/3 淡赤橙 残存: 60%
		底径 6.8			
13	土師器 杯	口径 12.6	平底から外傾して立ち上がる体部を経て、やや尖る口唇部へ。体部中位指頭真。	口縁横撫で。底部は筧削り。内外摩減顯著。体部～底部に黒斑がある。	胎土: 微A多+E+E+G+H 焼成: 3 色調: 5YR 7/4 にぶい橙 残存: 70%
		底径 8.0			
		器高 4.0			

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	坏 土師器	口径(12.1) 底径 5.7 器高 4.0	平底から外傾する体部に至る。体部には指頭痕明瞭。	口縁横撫で。底部筥削り。内面は底部中央を除いて横撫で。	胎土：敷A多+E+F+G 焼成：4 色調：2.5 YR 6/6 橙 残存：40% 甕
14	坏 土師器	口径(12.2) 底径(7.5) 現高 3.2	平底からやや膨らみ外傾する体部に至る。体部中位に指頭痕。	口縁横撫で、底部は筥削りし、体部下位も左→右へ筥削りする。	胎土：敷A多+E+F+G +H 焼成：4 色調：2.5 YR 6/4 にぶい橙 残存：30% 甕
15	高台付 埴 須恵器	口径 14.7 現高 5.5	高台がはがれる。口唇は外反する。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.6 以下B+C+D +E 焼成：3 色調：5 YR 5/6 明赤褐 残存：60% 床
16	高台付 埴 須恵器	口径 14.5 高台径 7.4 器高 5.6	高台が一部はがれる。高台は先の丸い逆三角形となる。口唇は外反する。	右回転撫で12周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、回転撫で。 末野産	胎土：0.4 以下B+C+D +E多 焼成：1 色調：10 YR 7/3 にぶい黄橙 残存：90% 胎土分析No.9
17	高台付 埴 須恵器	口径 14.4 高台径 7.3 器高 6.4	高台は短かく幅広で、端面に窪みを入れ水平となる。口唇は外反し、玉縁となる。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、回転撫で。 末野産	胎土：白色微砂粒微量含有 多孔質 焼成：3 色調：10 YR 7/1 灰白 残存：50% 胎土分析No.10 床
18	高台付 埴 須恵器	口径 13.8 底部 6.6 器高 6.3	高台は短かく下方に延び、体部中位が窪む。口唇は外反し玉縁状口縁をつくる。	右回転撫で6周。底部右回転糸切りであるが不明瞭。高台内外回転撫で。末野産	胎土：0.5 以下B+C 焼成：5 色調：7.5 Y 5/1 灰 残存：40% 甕
19	高台付 埴 須恵器	高台径 (7.6)	高台は短かく外に張り、端面が外傾する。	右回転撫で6周+α。底部右回転糸切り。高台内外回転撫で。 末野産	胎土：B+C+D+E 焼成：5 色調：7.5 Y 7/1 灰白 残存：30%
20	高台付 埴 須恵器	高台径 (7.2)	高台はへの字状に張り出し、端面は丸くつくられる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外右回転撫で。 末野産	胎土：B+C+E+H 焼成：2 色調：10 YR 6/3 にぶい黄橙 残存：40%
21	高台付 埴 須恵器	口径 14.2	体部は張り、口唇は大きく外反して玉縁をつくる。	右回転撫で。 末野産	胎土：B+C+E多 焼成：4 色調：7.5 G Y 8/1 明緑灰 残存：口縁70%
22	高台付 埴 須恵器	高台径 7.9	高台はへの字状に張り、端面は平坦部をつくる。	右回転撫で。摩滅著しく切り離し不明瞭。 末野産	胎土：B+C+D+E 焼成：1 色調：5 YR 6/4 にぶい橙 残存：高台70%
23	皿 須恵器	口径 12.8 底部 5.5 器高 2.5	挽け歪む。体部は轆轤目痕が著しく、口唇は肥厚し外反する。口縁に鉄滓付着。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.5 以下B+C+D +E多 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：70% 床

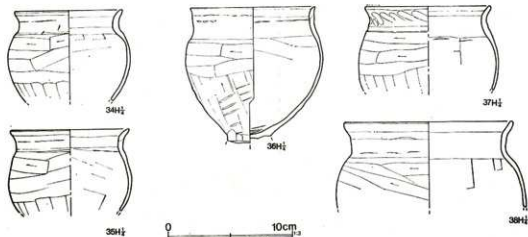


第125図 第77号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
24	皿 須恵器	口径 14.3 底径 6.6 器高 2.5	底部から内傾する体部に移 行し、口唇で外反する。	右回転撫で。底部右回転糸 切り。摩滅著しく、整形不 明瞭。 胎土分析№11	胎土：0.2以下B+C+D +E多 焼成：1 色調： 2.5 Y 7/2 灰黄 残存：60%
25	皿 須恵器	口径(14.1) 底径(6.2) 器高 2.5	底部は上げ底で、体部は外 反し、口唇は肥厚するが端 面をつくり、蓋であろう か。	右回転撫で4周。底部右回 転糸切り。 末野産	胎土：0.8以下B+C+D 焼成：5 色調：2.5 Y R 5/2 灰赤 残存：30% 甍
26	皿 須恵器	口径(14.6) 底径(7.0) 器高 2.5	底部は上げ底で、体部は外 反する。口唇は玉縁とな る。	右回転撫で5周。底部右回 転糸切り。 末野産	胎土：B+C+H 焼成： 2 色調：2.5 Y R 6/4に ぶい橙 残存：20%
27	土 鉢	現長 3.4 外径 1.0 孔径 0.3	細形であるが、つくりが悪 い。一端を欠失する。	棒に巻きつけ成形。	胎土：微A+C+E+F+ G 焼成：2.5 Y R 6/4に ぶい黄 残存：7.5 Y R 5/4にぶい濁
28	瓶 灰 釉	頸部径 (5.8)	肩部から屈折して頸部へ移 行する。表に濃緑色の釉が かかる。	右回転撫で。口頸部の接合 は、肩部の上に架せるが、 内側に粘土を巻き込んでい ない。 東濃産?	胎土：ほとんど夾雑物含ま ず 焼成：5 色調：5 Y 6/2 灰黄 残存：口縁15%
29	瓶 灰 釉	胴径 14.8 高台径 7.5	高台は低く、端面は僅かに 内傾する。胴部は緩やかな 丸味を持って立ち上がる。 内面は轆轤目が明瞭であ る。底部と胴下位に斑点状 の釉が掛かり、倒置して焼 いている。	右回転撫でが基本となる が、胴部中位付近から上へ は左回転撫で。胴下位外面 は右回転篋削りが施された 後、高台が張り付けられ る。高台の内側は強く撫で られるが、外側には接合痕 が見られる。 猿投産	胎土：白色微砂粒含有 焼成：5 堅緻 色調：2.5 Y 5/3 灰黄 残存：下半部30% 床
30	壺 灰 釉	胴径(25.5)	肩のやや張る胴上半部の破 片。肩には濃緑色の釉が掛 かるが、はげ落ちた部分も ある。	右回転撫で。内面は胴最大 径付近を境に上下で違 う。上は引き上げによって付 いた轆轤目である。猿投産?	胎土：0.3~0.5の小石備 か。B+C+黒色微砂粒 焼成：5 色調：5 Y 6/1 灰 残存：胴上半30% 床
31	甕 須恵器	底径(19.0)	平底から僅かに外反して立 ち上がる。	粘土帯積み上げ、平行叩き 成形。体部最下位左→右へ の篋削り。内面撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：5 色調：10 Y R 5/1 褐灰 残存：底部25%
32	甕 須恵器	底径(14.1)	平底から外傾する胴部へ至 る。	粘土帯積み上げ後、右回転 撫で。体部最下位左→右へ の篋削り。 末野産	胎土：0.6以下A+B+C +D 焼成：5 色調：10 R 2/1 赤黒 残存：底25%
33	鉢 須恵器	口径 20.7 胴径 22.7 現高 16.2	丸い胴部から大きく外反す る短かい口縁に至る。口縁 端部は窪みが巡る。	粘土帯積み上げ後、右回転 撫で。 末野産	胎土：0.8以下A+B+C +D 焼成：5 色調：5 PB 3/1 暗青灰 残存：上



番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
34	台付甕 土師器	口径(11.4) 胴径(12.9) 現高 9.5	丸い胴部から外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	口縁横撫で後、外面胴上半右→左への、胴下位上→下への筥削り。内面筥撫で。	位80% 床 胎土：微A多+E+F+G 焼成：4色調：2.5YR 3/6暗赤褐 残存：30%
35	台付甕 土師器	口径(12.5) 胴径(12.9)	丸い胴部からコの字状口縁へ移る。口縁は肥厚する。煤付着する。	口縁2段の横撫での後、胴部上位右→左へ、下位上→下へ筥削り。内面筥撫で。	胎土：微A+E+F+G 焼成：4色調：2.5YR 6/4にぶい橙 残存：20%
36	台付甕 土師器	口径 13.1 胴部 14.4 現高 14.2	胴は脚部へ窄まるとともにコの字状口縁に移る。口唇部は短かいつくりである。	口縁には粘土接合痕が見られる。口縁部2段の横撫で後、胴部上位右→左へ、下位は下→上の筥削り。	胎土：微A多+E+F 焼成：4色調：2.5YR6/2 灰赤 残存：60%
37	甕 土師器	口径(13.3) 胴径(14.8)	丸い胴からくの字状に屈曲する肥厚する口縁に至る。二次加熱のため表面荒れる。	口縁横撫での後、胴上位右→左への筥削り。胴中位以下は下→上への筥削り。内面は右→左へ筥撫で。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：2色調：5YR6/6橙 残存：49%
38	甕 土師器	口径 18.0 胴径 20.2	丸い胴から口唇の長いコの字状口縁に至る。	口縁横撫での後、胴上位右→左へ筥削り。内面右→左へ筥撫で。	胎土：微A多+F+F+G 焼成：3色調：2.5YR 6/2灰赤 残存：50%



第126図 第77号住居跡出土遺物(3)

第78号住居跡 (第127図)

2-ナ区に位置し、土坑群に近接する。規模は3.43×3.3m、深さは0.24mを測る。形態は正方形で、主軸はN-22°30'-W、床標高は71.33mである。

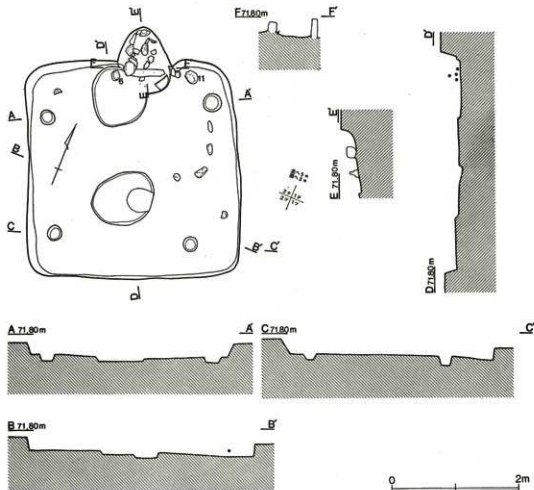
竈は北壁僅か右寄りにあり、長さ1.05×幅0.7mで、側壁には石が使われ、天井石に使われた横長の石が落下している。柱穴は各隅に見られるが、南東隅だけは西側へ寄り、いずれも浅い。

住居跡の覆土の主体は砂質の灰褐色土で、壁際では砂質の黒褐色土である。

遺物は竈内から坏(1)が、竈左脇から高台付坏(6)が、左から甕(4)が出土する。他にピット中から坏(2)・(5)が、覆土から高台付坏(3)・(4)、土師器甕(8)・(9)が出土する。甕が第75号住居跡(4)と接合する。

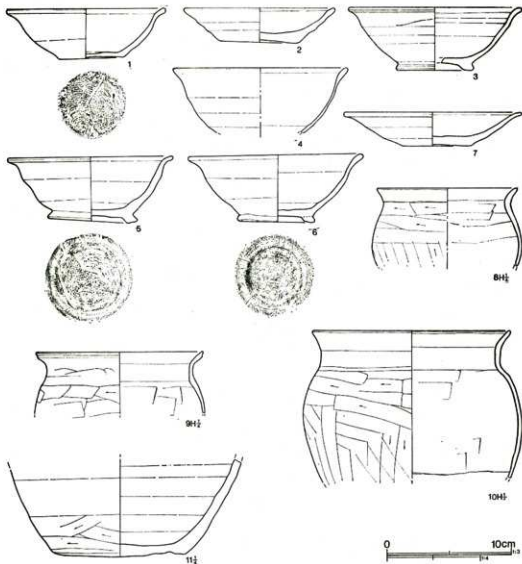
第78号住居跡出土遺物 (第128図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 12.9 底径 5.2 器高 4.0	小さな底部から外反し、体部中位で内彎して再び口縁で大きく外反する。口唇は玉縁状となる。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。末野産 3・5・6は同一形態で、胎土も同じ。	胎土：B+C少 焼成：5 色調：5B 4/1 暗青灰 残 存：100% 竈



第127図 第78号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯 須恵器	口径 12.2 底径 6.3 器高 2.8	平底から外傾する体部へ移行する。器高の低い厚手の杯である。	右回転撫で3周。底部右回転まわし糸切り。二次加熱のためか荒れる。末野産	胎土：0.6以下 B+C+D 多 焼成：2 色調：5 Y R 5/6 明赤褐 残存：90%
3	高台付 杯 須恵器	口径(14.0) 高台径 (6.3) 器高 5.0	高台は低くへの字状に開く。口唇部は大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外を回転撫で。末野産	胎土：0.5以下 B+C+D +E 焼成：5 色調：10 Y R 6/1 褐灰 残存：30% 覆土



第128図 第78号住居跡出土遺物

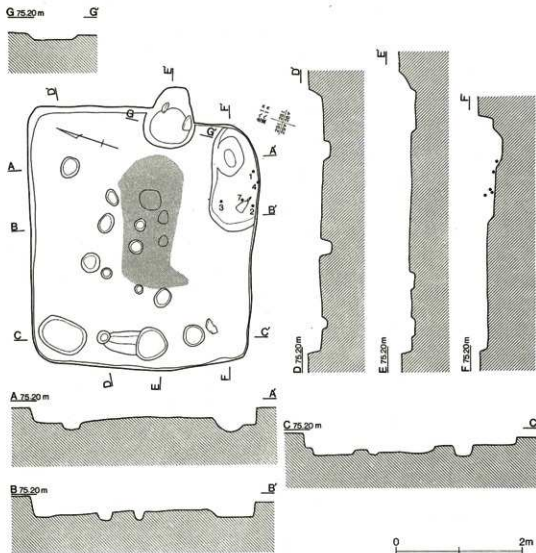
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	高台付 須恵器	口径(14.1)	丸い体部から、大きく外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	右回転撫で。摩滅著しい。口縁に黒色で光沢を持つものが付着する。末野産	胎土：0.2以下B+C+E 焼成：2色調：7.5 YR 7/4にぶい橙 残存：20% 覆土
5	高台付 須恵器	口径 13.4 高台径 7.3 器高 5.3	高台はへの字状に開き、太い。端部は窪み、外傾する。	右回転撫で4周。底部右回転糸切り。中央が焼け歪み亀裂が入る。末野産	胎土：B+C少 焼成：4 色調：5 Y 7/1 灰白 残存 ：95%
6	高台付 須恵器	口径 14.1 高台径 6.2 器高 5.4	高台は低く端面は内傾する。口縁は反り返る。	右回転撫で3周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：B+C少 焼成：3 色調：2.5 Y 6/1 黄灰 残存 90% 胎土分析№12 床
7	皿 須恵器	口径 14.4 底径 5.1 器高 2.7	平底から外傾して口縁は大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。摩滅顯著。末野産	胎土：B+C少 焼成：2 色調：5 Y 7/1 灰白 残存 ：100% 覆土
8	甕 土師器	口径(14.9) 胴径(15.8)	丸い胴部から、外反する口縁に至る。口縁は肥厚する。	口縁横撫での後、胴上位右→左への篋削り。胴下位は下→上へ篋削りする。内面は右→左への篋撫で。	胎土：微A多+E+F+G +H 焼成：3色調：5 Y R 6/6 橙 残存：25% 覆土
9	甕 土師器	口径(17.8)	コの字状口縁で、口縁が外傾する。	口縁横撫で2段の後、胴上位は右→左への篋削り。内面は右→左への篋撫で。	胎土：微A多+E+F 焼 成：4色調：5 Y R 6/8 橙 残存：25% 覆土
10	甕 土師器	口径 20.2 胴径 23.0	コの字状口縁で、口縁は外傾する。	口縁横撫で2段の後、胴上位は右→左へ篋削りする。下位は上→下へ篋削りする。内面は篋撫で。	胎土：微A多+E+F+G +H 焼成：4色調：7.5 Y R 7/4にぶい橙 残存： 80%
11	甕 須恵器	底径 13.9	平底から内凹気味に立ち上がる体部へ至る。	右回転撫で。体部最下位右→左へ篋削り。末野産	胎土：0.8以下B+C+D +E 焼成：5色調：N 4/0 灰 残存：底部 床

#### 第79号住居跡 (第129図)

29-ミ区に位置する。規模は4.11×3.56mで、深さは0.38mを測る。形態は僅かに隅丸の長方形である。主軸はN-73°-Eで、床標高は74.67mである。

竈は東壁右寄りであり、焚口は浅い窪みとなる。長さ1.0×幅0.8mで焚口は浅い窪みとなる。中央には多量の鉄滓が堆積し、中でも3ヶ所特に赤錆の出た範囲があった。床には多くの掘り込みがあるが、いずれも浅い。特に竈の右側南東隅からは、多くの遺物が出土する。

竈から土師器甕(8)が、南東隅掘り込みから坏(1)・(2)・(4)、鉄滓付着坏(3)、高台付埴(7)の他、床から坏(5)、土師器甕(9)～(11)が出土する。鉄滓は950gある。

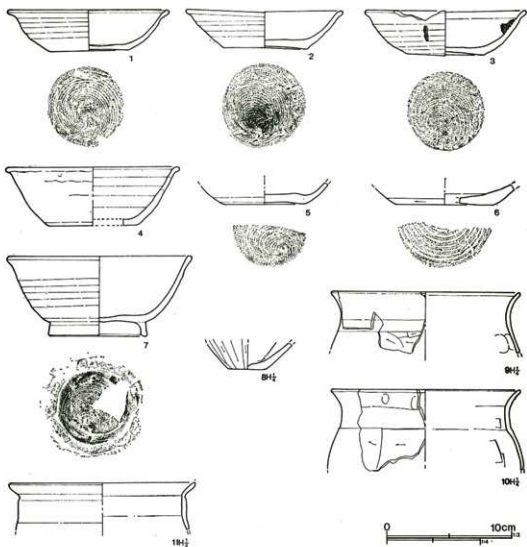


第129図 第79号住居跡

第79号住居跡出土遺物 (第130図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 13.0	平底から丸味を持つ体部に 移り、口唇は外反する。口 唇内側に浅い沈線を持つ。	右回転撫で8周。底部右回 転履し糸切り。 末野産	胎土：0.6以下 B+C+D +E多 焼成：5 色調： 5 Y 5/1 灰 残存：60%
		底径 6.1			
		器高 3.3			
2	杯 須恵器	口径 12.6	口唇部は外反し、丸い。	右回転撫で6周。底部右回 転履し糸切り。 末野産	胎土：0.5以下 B+C+D +E多 焼成：3 色調： 5 Y 5/1 灰 残存：95%
		底径 6.7			
		器高 3.0			

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	杯 須恵器	口径 13.0 底径 6.1 器高 3.5	体部は丸く、口唇は外反する。内外面に鉄滓付着。	右回転撫で8周。底部右回転糸引き切り。末野産	胎土：0.6以下 B+C+D 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：90%
4	杯 須恵器	口径(14.0) 底径(7.0) 器高(4.7)	体部は深くやや丸味を持ち、口唇で短かく外反する。	右回転撫で6周。底部右回転糸引き切り。末野産	胎土：0.2以下のB+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：20% 床
5	杯 須恵器	底径 6.5	底部と比べ体部は薄作り。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：B+E+H 焼成： 2 色調：10YR 7/2 に ぶい黄橙 残存：50% 床



第130図 第79号住居跡出土遺物

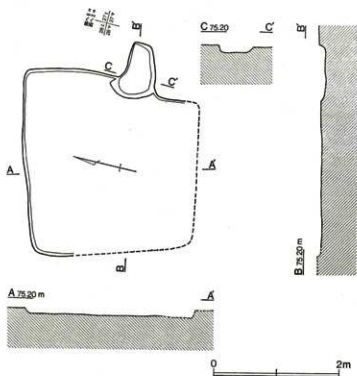
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	坏 須恵器	底径(7.8)	やや大き目の底部である。 糸目が太い。	右回転撫で。底部右回転糸 切り後、周辺笕削り。 末野産	胎土：B+E多 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：底 部20% 床
7	高台付 埴 須恵器	口径 14.9 高台径 8.0 器高 6.4	高台は高く、同一の厚さで 作られる。体部は深く、口 唇は僅かに外反する。	右回転撫で7周。底部右回 転離し糸切り。高台内外回 転撫で。 末野産	胎土：1.0以下B+C+D +E+金H 焼成：5 色 調：N 4/0 灰 残存：80% 床
8	甕 土師器	底径 4.0	胴最下位は丸味を持ち立ち 上がる。	胴外面上→下笕削り。底部 は一方笕削り。内面は 右→左への笕撫で。	胎土：微A多+B+C+F +G+H 焼成：4 色調： 5 Y R 6/4 にふい橙 残 存：底部のみ 電
9	甕 土師器	口径(19.9)	口縁は大きく外反して作ら れるが薄い。	口縁部横撫で後、胴部右→ 左へ削る。	胎土：微A多+E+F+G +H 焼成：2 色調：5 Y R 7/4 にふい橙 残存： 口縁25% 床
10	甕 土師器	口径(19.9)	口縁はコの字状口縁で、口 唇は大きく外反する。	口縁部横撫での後、胴部を 右→左へ笕削り。内面は右 →左への笕撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：2 色調：2.5 Y R 6/6 橙 残存：口縁15% 床
11	甕 土師器	口径(19.6)	口縁はコの字状口縁で、口 唇部は外傾する。	口縁2段の横撫での後、胴 部笕削り。	胎土：微A多+D+E+F 焼成：1 色調：5 Y R 7/6 橙 残存：口縁20% 床

#### 第80号住居跡 (第131図)

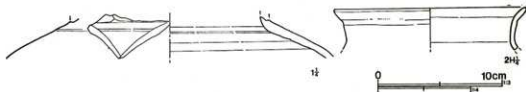
28—マ区に位置する。規模は2.99×2.81mで、深さは0.12mを測る。形態は正方形で、主軸はN—77°—E、床標高は74.91mである。竈は東壁右寄りにあり、長さ0.8×幅0.65mを測る。南壁と東壁の大部分が破壊される。遺物は竈から土師器の甕(2)が出土する。

#### 第80号住居跡出土遺物 (第132図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕 須恵器	頸部径 (21.0)	肩部から屈曲して口縁に移 行する。	右回転撫で。 末野産	胎土：B+C 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：13 % 土坑
2	甕 土師器	口径(20.3)	コの字状口縁。	口縁は横撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：3 色調：2.5 Y 6/6 明黄褐 残存：8% 電



第131図 第80号住居跡



第132図 第80号住居跡出土遺物

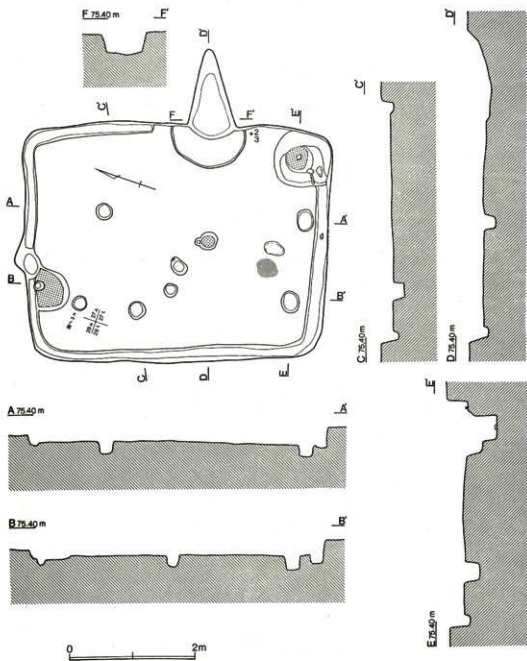
第81号住居跡（第133図）

27—ミ区に位置し、規模は3.83×4.87m、深さ0.23mを測る。形態は長方形で主軸はN-71°-Eで、床標高74.70mを測る。

竈は東壁右寄りにあり、長さ1.9×幅0.8mの大形竈で、煙道は緩やかに立ち上がる。床はほぼ全周に幅0.2mの壁溝が巡り、壁は垂直に立ち上がる。南東隅に径0.9m、深さ0.5mの貯蔵穴が見られる。この中には焼土が入っていた。また焼土が中央と北西隅に見られ、鉄滓が中央南西に散布していた。いくつかのビットが見られるが、柱穴と認定できるものはない。

遺物は、竈から環(1)と甕(2)、土師器甕(3)・(4)が、覆土から環(5)、蓋(4)、高台付碗(6)、甕(7)・(9)、土師器甕(8)、鉄釘(4)が出土する。鉄滓は560gである。



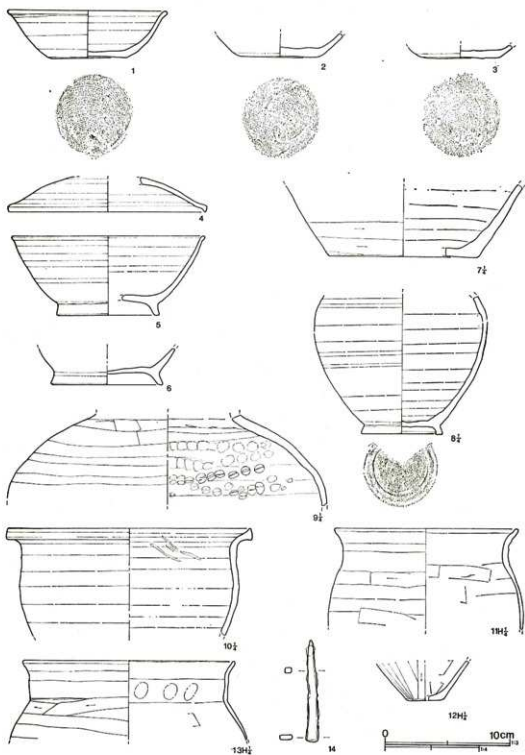


第133図 第81号住居跡

第81号住居跡出土遺物 (第134図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 12.8 底径 6.5 器高 3.8	平底から丸い体部を経て外反する口縁に至る。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土: 0.9 以下B+C+E 焼成: 5 色調: 7.5Y5/1 灰 残存: 70% 電

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯 須恵器	底径 6.0	平底から外傾する体部へ移る。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：5 色調：2.5YR/1 明赤灰 残存：底部のみ
3	杯 須恵器	底径 6.0	体部へは丸味を持って移行する。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.3以下B+C 焼成：2 色調：5Y7/1 灰白 残存：底部のみ 覆土
4	蓋 須恵器	口径 15.8	口唇部は垂直に垂れ、三角形となる。	右回転撫で6周。内外面摩擦する。末野産	胎土：B+C+E+H 焼成：1 色調：2.5Y7/2 灰黄 残存：12% 覆土
5	高台付 碗	口径(15.5) 高台径 (8.3) 器高 6.3	高台はへの字状に開き、端面は水平になる。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。高台内外回転撫で。末野産	胎土：B+C+D+E+H 焼成：2 色調：7.5YR 6/4にぶい橙 残存：20% 覆土
6	高台付 碗	高台径 (9.0)	高台はへの字状に大きく開き、端部が薄くなる。	右回転撫で。末野産	胎土：B+C+D+E+H 焼成：1 色調：5YR5/8 明赤褐 残存：45% 覆土
7	甕 須恵器	底径(15.0)	平底から外傾する体部に至る。	右回転撫で。底部篋削り。内外面木口撫で。末野産	胎土：0.9以下B+C 焼成：5 色調：N4/0 灰 残存：27% 覆土
8	壺 須恵器	胴径 18.2 高台径 8.6	高台は外に開き、端面内側は中央に向い突き出す。胴部は倒卵形になる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。胴部下位は回転篋削り。高台付着後回転撫で。末野産	胎土：0.5以下B+C多 焼成：5 色調：7.5YR 2/1 黒 残存：50% 覆土
9	甕 須恵器	頸部径15.4	肩部は緩やかに窄まり頸部へ至る。	右回転撫で。内面に指頭痕明瞭。末野産	胎土：0.7以下B+C 焼成：5 色調：5PB4/1 暗青灰 残存：25% 覆土
10	鉢 須恵器	口径(25.5) 胴部(23.2)	口縁は強く外反し、口唇は上方に延びる。内側は摩擦する。	粘土帯積み上げ右回転撫で。内面に火禰痕あり。末野産	胎土：1.0以下B+C+E 焼成：5 色調：5Y6/1 灰 残存：20% 底
11	甕 土師器	口径 19.5 胴径 20.7	口縁はコの字状口縁に近く、口唇内側には窪みを巡らす。二次加熱で覚れる。	口縁は2段の横撫での後、胴部上位を右→左へ篋削りする。内面は右→左への篋撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：3 色調：2.5YR 5/8 明赤褐 残存：70% 底
12	甕 土師器	底径 3.7	平底から外傾する胴部へ移行する。	外面底部上→下への篋削り。底部も同じく篋削り。内面右→左への篋撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：2.5YR 5/8 明赤褐 残存：底 覆土



第134图 第81号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	甕 土師器	口径(22.4)	直立するコの字状口縁で、大形である。薄手。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左へ荒削り。内面右→左へ荒撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4色調：5YR6/8 橙 残存：23% 甕
14	棒状鉄製品	全長 8.1 幅 1.0	一端が細くなり尖るが断面やや長方形。他方は平らなつくりである。	鍛造。	重量：8.49g 覆土

### 第82号住居跡（第135図）

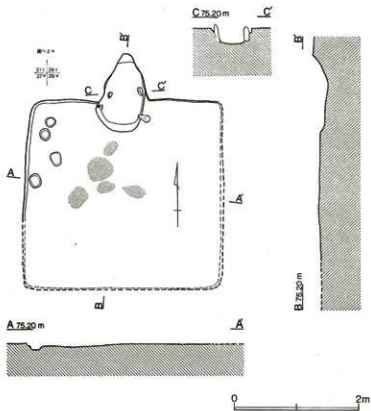
26一マ区に位置する。

規模は3.05m×3.22mで、深さは0.11mである。形態は正方形で、主軸はN-1°-E、床標高は74.87mである。

竈は北壁中央にあり、長さ1.25×幅0.75m、袖には河原石が使われている。

床面の竈前方には5ヶ所に鉄滓の分布が見られる。壁は東と南が破壊され、柱穴は未確認。

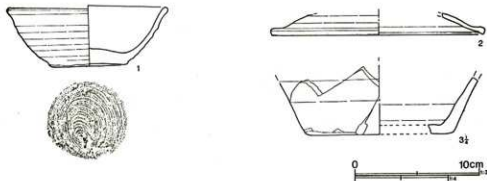
遺物は竈脇から坏(1)、土坑の底から蓋(2)、覆土から甕(3)が出土した。



第135図 第82号住居跡

第82号住居跡出土遺物 (第136図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 13.0 底径 6.3 器高 4.9	焼け歪み、やや上げ底で、口唇は外反する。底部中央は、1.3cmと厚い。	右回転撫で9周。底部右回転まわし糸切り。多孔質。南比企産	胎土：白A少 焼成：4 色調：5 B 3/1 暗青灰 残存：90% 甌胎
2	蓋 須恵器	口径(17.0)	口唇は屈曲し下方へ垂れ下がる。口唇内側には沈線が通る。	右回転撫で。二次加熱のため表面が荒れる。末野産	胎土：0.5以下 B+C+D+E 焼成：1 色調：7.5 Y R 7/4 にふい橙 残存：15% 土坑床面
3	甕 須恵器	底径(15.6)	平底から外傾する胴部へ移行する。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。底部外面は一方向篋削り。末野産	胎土：0.6以下 B+D+E 焼成：5 色調：5 B 3/1 暗青灰 残存：20% 覆土



第136図 第82号住居跡出土遺物

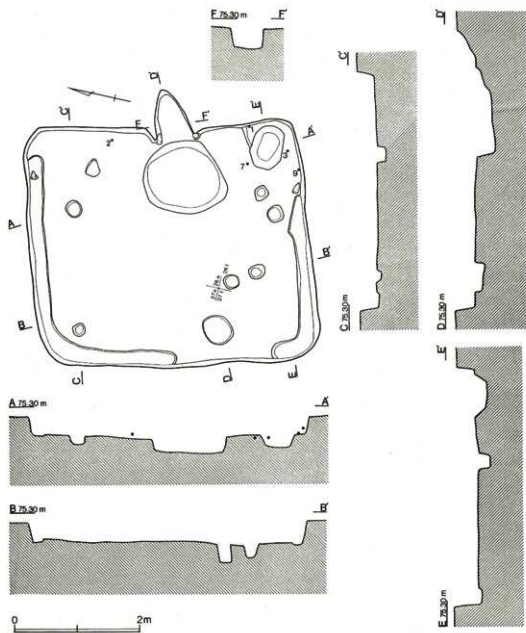
第83号住居跡 (第137図)

26-A区に位置する。規模は3.82×4.51m、深さは0.3mを測る。形態は長方形で、主軸はN-74°-Eで、床標高は74.55mである。

竈は東壁中央にあり、長さ0.9×幅0.6mを測る。焚口袖に河原石が使われ、煙道は傾斜を持って直線的に立ち上がる。

床の竈前方に径1.3m、深さ0.25mの掘り込みがあるが、付属施設が不明である。南東隅には貯蔵穴と考えられる楕円形の落ち込みがある。北壁、西壁、南壁の一部に、幅0.2mの壁溝が通る。床にはいくつかのピットが見られるが、柱穴と認定できるものはない。

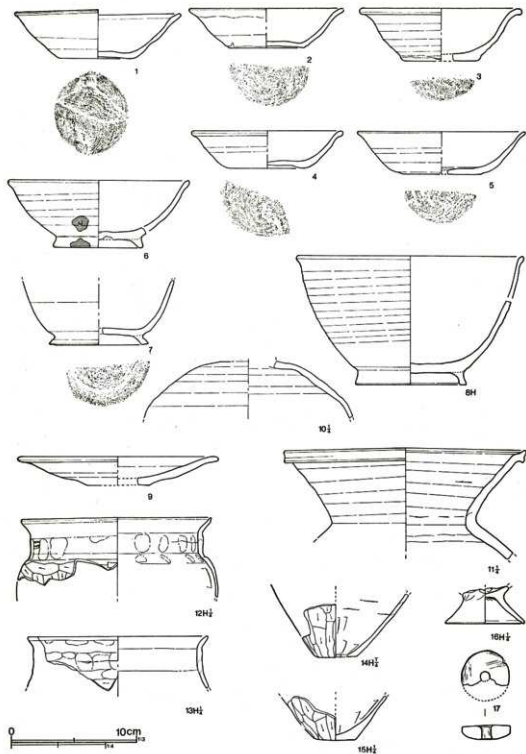
遺物は竈内から土器器甕③・④が、南東ピット周辺から杯①、高台付埴⑧、甕①、土器器甕②、土器器付甕⑥が、ピット内から灰釉瓶⑩が、床面から紡錘車⑦などが出土している。覆土からは鉄滓付着の高台付埴⑥が出土する。鉄滓は845gと羽口片も出土する。



第137図 第83号住居跡

第83号住居跡出土遺物 (第138図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 13.3 底径 6.0 器高 3.9	口唇は肥厚する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：白微A+B+E多 焼成：1 色調：2.5 YR 7/2 明赤灰 残存：80% 床



第138图 第83号住居跡出土遺物

番号	器種	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
2	杯 須恵器	口径(12.4) 底径(6.1) 器高 3.2	底部はやや上げ底で、口唇部は大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+D+E 焼成：2 色調：N 3/0 暗灰 残存：40%
3	杯 須恵器	口径(13.0) 底径(6.4) 器高 4.2	底部周辺に粘土のまくれがある。口唇部は大きく外反する。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：B+C+E 焼成：5 色調：N 3/0 暗灰 残存：40%
4	杯 須恵器	口径(12.2) 底径(6.0) 器高 3.0	底部は上げ底で、口唇は外反する。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.2以下B+C+D+E多 焼成：2 色調：7.5Y4/2灰オリーブ 残存：30% 覆土
5	杯 須恵器	口径(13.5) 底径(6.3) 器高 3.4	底部から指差し込み部で外反して、口縁でも外反する。	右回転撫で4周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：B+D+E多 焼成：3 色調：7.5Y5/2灰オリーブ 残存：25% 覆土
6	高台付 埴 須恵器	口径(14.6) 高台径 7.2 器高 5.4	高台はハの字状に開き、端部は丸くなる。口唇は大きく外反する扁平な埴。器面に鉄滓が付着する。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+E多 焼成：3 色調：7.5YR 5/1 褐灰 残存：35% 覆土
7	高台付 埴 須恵器	高台径 (8.0) 現高 5.2	高台はハの字状に大きく開き、端面に窪みが入る精緻なつくりである。体部は腰があり内彎して立ち上がる。	右回転撫で10周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後特に外側を強く回転撫でを行なう。	胎土：B+E多 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：40%
8	高台付 埴 須恵器	口径 18.3 高台径 8.9 器高 10.3	高台は薄く、端部は水平で、体部は深く、口唇は外反する。体部は薄く、軌跡目が横走する。	右回転撫で12周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外を撫でる。 末野産	胎土：0.2以下A+D+E多 焼成：1 色調：10YR 8/3 浅黄橙 残存：50% 胎土分析№6 床
9	皿 須恵器	口径(16.2) 底径(4.9) 器高 2.3	底径は小さく、口唇は反り返える、やや厚手のつくりである。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+C+D+E 焼成：3 色調：5 Y 5/2 灰オリーブ 残存：20%
10	瓶 灰 釉	頸部径 (6.0)	肩が張り頸部付近で水平になる。	右回転撫で。肩に緑色釉が掛かる。 猿投産	胎土：黒敷A+B+C均質 焼成：5 色調：10YR 5/3 にぶい黄褐 残存：肩部25% ピット
11	甕 須恵器	口径 25.3	口縁はくの字状に延び、口唇部で上下に突き出す。端面と上面に窪みをつくる。	粘土帯積み上げ。右回転撫で口縁部7周。 末野産	胎土：0.8以下B+C+E多 焼成：5 色調：N3/0 暗灰 残存：口縁90% 床



番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	甕 土師器	口径 20.1 胴部 21.3	直立するコの字状口縁で、口唇部は外反し、端部がつまみ出され薄くなる。	口縁2段の横撫での後、口唇部横撫で。胴部は右→左への削りが主体。内面は右→左への筧撫で後、口縁横撫で。	胎土：微A多+B+F+H 焼成：3色調：5Y 6/4 にふい橙 残存：口縁90% 床
13	甕 土師器	口径(19.0)	直立するコの字状口縁で、口唇は外反するがやや短かい。	口縁2段の横撫での後、口唇部に横撫です。胴部は右→左への筧削り。	胎土：微A多+E+F+G 多 焼成：4色調：7.5 Y R 6/4にふい橙 残存： 口縁20% 甕
14	甕 土師器	底径 4.5	平底から僅かな丸味を持って外傾する胴部に至る。	胴部外面は上→下の筧削り。内面は右→左への筧撫で。	胎土：微A多+F+金H 焼成：3色調：5Y R 5/6 明赤褐 残存：胴下位60% 床・甕・覆土
15	甕 土師器	底径 4.3	平底から外傾する胴部へ移行する。	胴部外面は上→下の筧削り。内面は右→下への筧撫で。	胎土：微A多+F+H 焼成：3色調：2.5Y R 5/8 明赤褐 残存：底部のみ 床
16	台付甕	脚径 8.4	脚台部はハの字状に大きく開く。脚端部内側は、僅かに窪む。	底部内面と脚部天井部は右回りの筧撫でを行なう。脚裾部は横撫で。	胎土：微A多+F+G+H 焼成：3色調：2.5Y R 6/6橙 残存：脚のみ 床
17	紡錘車 石製品	外径 3.85 厚さ 1.1 孔径 0.7	上面は僅かな丸味を持ち、側面は垂直である。下面は弧を描くように丸くつくられる。孔部は両側面がやや太くなり、上面は受口状になる。	上面は不定方向、下面は周縁に沿って、側面は横位の擦りが施される。孔部に斜行する擦れが見られる。	重量：13.81g 炭灰質砂岩 残存：70% 床

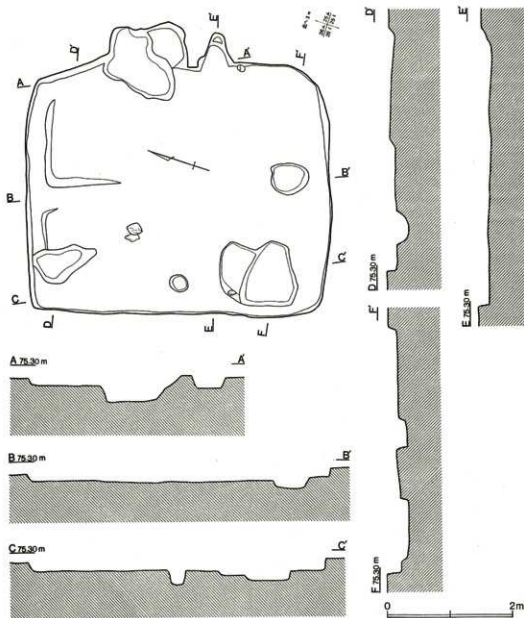
#### 第84号住居跡（第139図）

26—ム区に位置し、規模は4.05×4.89mで、深さは0.38mである。形態は長方形で、主軸はN—78°—E、床標高は74.72mである。

竈は東壁右寄り、長さ0.5×幅0.5mを測る。煙道は傾斜を持って立ち上がる。

床は竈の左側の東壁を不整形ピットが切る。西壁付近に深さ0.2mのピットが存在するが、柱穴はない。

出土遺物は床面から坏(1)・(2)、皿(6)、高台付埴(3)・(5)、土師器甕(8)・(9)・(10)の他、甕左ピットから中世的な鉢(1)と釘(1)が出土する。鉄付着土器は4点で、鉄滓は270g、羽口片3点が出土する。



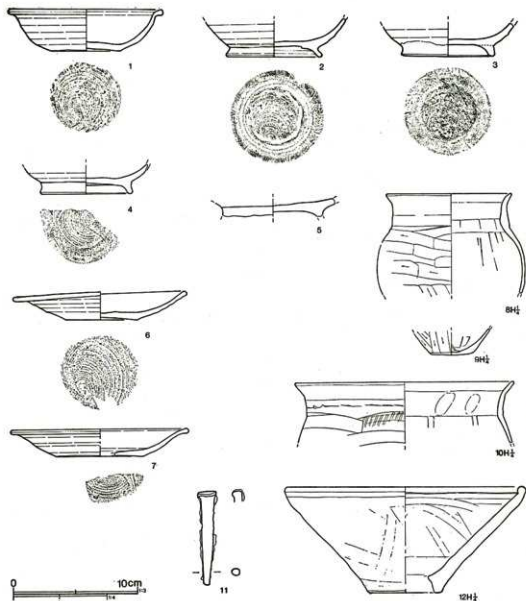
第139図 第84号住居跡

第84号住居跡出土遺物 (第140図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径(12.4) 底径 6.1 器高 3.3	体部は丸く。口唇は折れ曲るように反り、玉縁状になる。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：0.8以下B+C 焼成：5 色調：5PB4/1 暗青灰 残存：40% 床
2	高台付 埴	高台径 7.7	高台は大きく外に張る薄いつくりで、端面が外傾す	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内	胎土：0.8以下B+C+E 焼成：4 色調：10YR6/1

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	須恵器 高台付 碗 須恵器	高台径 7.5	高台はあまり開かず、端面は内傾する。内面荒れて整形不明瞭。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	褐灰 残存：底部完 床 胎土：0.9以下B+C+E+黒H 焼成：2 色調：10R 6/4にふい黄橙 残存：高台100% 床
4	高台付 碗 須恵器	高台径 7.5	高台はあまり開かず、端面は僅かに外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土：0.4以下B+C+E+H 焼成：2 色調：10R 7/3にふい黄橙 残存：45% 床
5	高台付 碗 須恵器		高台はやや大きく8cm近い。	右回転撫で。末野産	胎土：B+C+D+E 焼成：1 色調：2.5Y7/3浅黄 残存：底部80% 床
6	皿 須恵器	口径 14.0 底径 5.9 器高 2.2	やや上げ底で、口唇は反り反えり、玉縁となる。焼け歪む。轆轤目明瞭。	右回転撫で6周。底部右回転まわし糸切り。末野産	胎土：0.3以下B+C 焼成：5 色調：N 3/0暗灰 残存：70% 床
7	皿 須恵器	口径(14.3) 底径( 7.0) 器高 2.2	口唇は大きく外反し、玉縁状となる。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：5 色調：2.5Y6/2灰黄 残存：20% 床
8	甕 土師器	口径(13.2) 胴径(15.6)	口縁は直立するコの字状口縁で、口縁下部が肥厚する。	口縁2段の横撫での後、胴上位右→左への笊削り、下位上→下への笊削り。内面は右→左への笊撫で。	胎土：微A多+E+F+H 焼成：3 色調：5YR6/6橙 残存：70% 床
9	甕 土師器	底径 4.6	底部は僅かに丸味を持つ。	胴部外面は上→下への笊削り。内面は笊撫で。底部外面は一方方向の笊削り。	胎土：微A多+D+E+F+G 焼成：4 色調：5YR 6/4にふい橙 残存：底部100% 床
10	甕 土師器	口径(23.1)	やや外傾するコの字状口縁。	口縁外面に粘土接合痕あり。口縁上下2段の横撫での後、胴部外面右→左への笊削り。内面右→左への笊撫で。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：4 色調：5YR6/6橙 残存：40% 床
11	釘 鉄製品	現長 7.5 頭幅 1.45	頭部は折り反えされる角釘で、扁平である。先端は角がとれて丸くなるが、旧態を呈するか不明である。	鍛造。	重量：14.79g 電脳ビット
12	鉢 須恵器	口径(25.6) 底径( 8.0) 器高 11.1	平底から外反気味に立ち上がり外傾する体部を経て、玉縁状となる口唇に至る。	外面には指頭痕が明瞭。下位は木口撫でを行なう。口縁は横撫でし、内面は指頭	胎土：0.6以下B+C+D+E 焼成：3 色調：表面5Y4/1灰、器内2.5YR

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			口唇は内側に折り返す。内面中央は使用により擦り減って器肉の色が出る。	で撫でられる。形態は中世的であるが、土は羽釜に類似している。末野産	5/6 明赤褐 残存：20% 電鍍ビット



第140図 第84号住居跡出土遺物

第85号住居跡 (第141図)

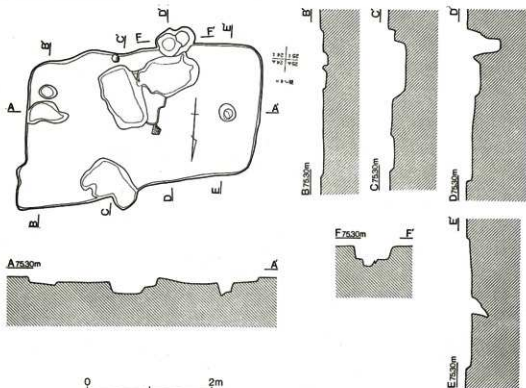
25—A区に位置する。第86号住居跡に近接する。規模は2.43×3.76m、深さ0.28mを測る。形態は不整形長方形で、主軸はN—87°—E、床標高は74.89mである。

床はいくつかのピットによって破壊される。南壁中央には深さ0.45mのピットが壁を切る。中央西壁寄りに柱穴らしきものがあるが不明である。

遺物は床面から坏(3)・(4)、甕(1)・(4)が、東ピットから坏(2)、土器(6)が出土する。他に鉄滓付着土器坏(5)もある。鉄滓は130gで、羽口片も出土する。

第85号住居跡出土遺物 (第142図)

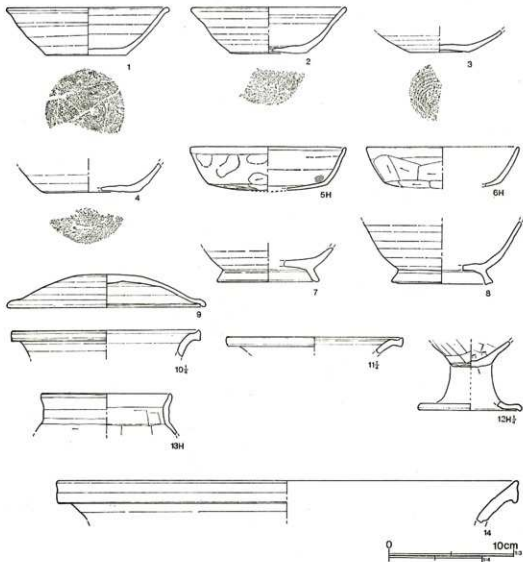
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	口径 13.1 底径 6.5 器高 3.8	体部は外傾し、口唇はあまり外反せず玉縁をつくる。底部擦り減る。	右回転撫で4周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.8以下B+C+D 焼成：5 色調：10Y R7/1 灰白 残存：70% 覆土
2	坏 須恵器	口径(12.5) 底径(6.2) 器高 3.7	体部上位で外方へ屈曲する。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.5以下B+C 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：30% 東ピット
3	坏 須恵器	底径(4.6)	小さな底部から丸い体部へ移行する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.3以下B+C 焼成：5 色調：N 4/0 灰



第141図 第85号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	杯 須恵器	底径(7.6)	体部は外傾し、轆轤目明瞭。	右回転撫で。底部右回転離し切り。末野産	残存:40% 床 胎土:0.4以下B+C+D +E 焼成:4 色調:2.5 Y 5/1 青灰 残存:30%
5	杯 土師器	口径(12.5) 現高 3.5	浅い丸底から屈曲して外傾する体部を経て、内側に窪みを入れる口唇に至る。内面に鉄滓が付着する。	口唇部と内面屈曲部に横撫で。外面底部は不定方向笕削り。削りは一部体部まで至る。	胎土:微A多+F+G 焼成:3 色調:5 Y R 7/4 にぶい橙 残存:35%
6	杯 土師器	口径(12.3) 現高 3.2	5とはほぼ同形態であるが、口唇には沈線がない。	口縁と内面は横撫で。底部は笕削りで、体部は右→左への木口撫で。	胎土:微A多+F+G 焼成:4 色調:5 Y R 6/6 橙 残存:18% 東ビット
7	高台付 碗 須恵器	高台径 (8.2)	高台は外方にへの字状に張り内し、端部は内傾する。	右回転撫で。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土:0.5以下B+C+D +E 焼成:1 色調:2.5 Y 7/3 浅黄 残存:27% 覆土
8	高台付 碗 須恵器	高台径 (8.1)	高台はへの字状に大きく張り、端部が厚く端面は沈線を巡らせ外傾する。	右回転撫で。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土:0.8以下B+C+D 焼成:5 色調:N 4/0 灰 残存:25%
9	蓋 須恵器	口径 16.0 器高 2.6	天井部は丸く、口縁部は丸く折り返えされ、内側に沈線を巡らす。	右回転撫で4周。摩滅によって整形痕不明瞭。末野産	胎土:0.9以下B+C+D +E 焼成:1 色調:7.5 Y R 6/6 橙 残存:60% 覆土
10	壺 須恵器	口径(19.8)	口縁部は外反し、口唇部は上方に尖り、内側に窪みを持つ。端面には沈線が巡る。	右回転撫で。末野産	胎土:0.3以下B+C+H 焼成:5 色調:N 4/0 灰 残存:13% 床
11	壺 須恵器	口径(18.6)	10に類似するが薄い。端面には沈線がない。	右回転撫で。末野産	胎土:0.5以下B+C多 焼成:5 色調:5 B 5/1 青灰 残存:11% 床
12	台付 土師器	脚径(10.9)	脚端部は下方に垂れ下がる。	脚端部横撫で。底部外面上→下へ笕削り。内面笕撫で。	胎土:微A多+E+F+G 焼成:4 色調:5 Y R 6/6 橙 残存:底80% 覆土
13	甕 土師器	口径(13.7)	直立するコの字状口縁で、口唇は僅かに内彎する。厚手。	口縁部は3段の横撫でを、胴部は右→左への笕削り。内面は右→左への笕撫で。	胎土:微A多+E+F+G +H 焼成:4 色調:2.5 Y R 6/6 橙 残存:30%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
14	甕 須恵器	口径(27.0)	大きく外反する口縁で、口 唇は上下に丸く突き出す。 端面には窪みを巡らす。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.3以下B+C 焼 成：5 色調：5PB6/1 青灰 残存：8% 床



第142図 第85号住居跡出土遺物

第86号住居跡 (第143図)

25-△区に位置し、第85号住居跡に近接する。規模は4.0×3.3m、深さ0.26mを測る。形態は不  
整長方形で、主軸はN-81°30'-E、床高は74.64mである。

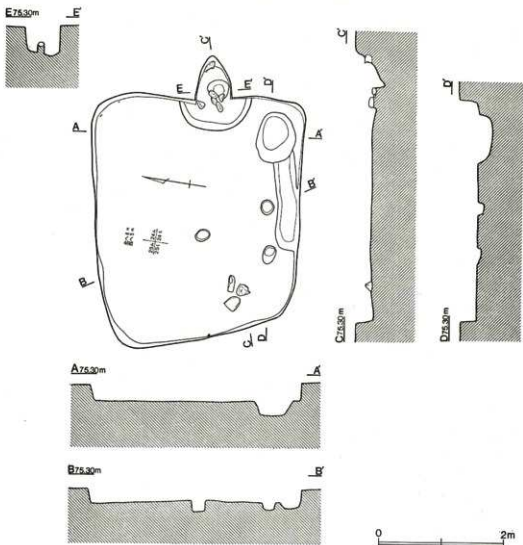
竈は東壁中央にあり長さ1.2×幅0.55mで、焚口は深く、煙道へ急傾斜で立ち上がる。床には15  
cm大の石が数個見られる。床面南東隅に楕円形の貯蔵穴がある。貯蔵穴から西へ、壁に沿って溝が

走る。柱穴は確認できなかった。

遺物は甕内から坏(1)、土師器甕(5)が、甕脇床面から高台付碗(2)、甕(4)が、床面から高台付碗(3)が出土した。

第86号住居跡出土遺物 (第144図)

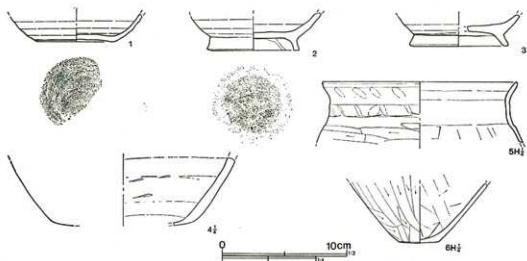
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	底径 6.2	やや上げ底で、体部は丸い。	右回転撫で。底部右回転糸切り。	胎土：B+C+E 焼成：4 色調：10YR 6/1 福灰 残存：55% 甕
2	高台付碗	高台径 7.5	高台は端正で薄く、端部で広がり端面が水平になる。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台内面に火罨あり。	胎土：0.4以下B+C 焼成：3 色調：10 YR 6/1



第143図 第86号住居跡



番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付 埴	高台径 (8.0)	高台はへの字状に広がり、 端面が摩滅のため丸くな る。	右回転撫で。摩滅のため整 形不明。	末野産 褐灰 残存：底完 電脇床 胎土：0.6 以下B+C+D +H 焼成：1 色調：2.5 Y 7/2 灰黄 残存：27% 床
4	甕 須恵器	底径(15.0)	体部の厚さに比べ底部は薄 い。	右回転撫で。	末野産 胎土：0.8 以下B+C+D +E+H 焼成：1 色調 ：5 Y 7/1 灰白 残存：25 % 電脇床
5	甕 土師器	口径(20.6) 底径 4.2	接合しないが竈出土で、同 一個体と考えられる。口縁 は直立するコの字状口縁 で、口唇は肥厚し外反す る。	口縁2段の横撫での後、胴 部右→左へ、下位は上→下 への筥削り。内面は右→左 への筥撫で。	胎土：微A多+E+F 焼 成：4 色調：2.5 Y R5/6 明赤褐 残存：30% 電



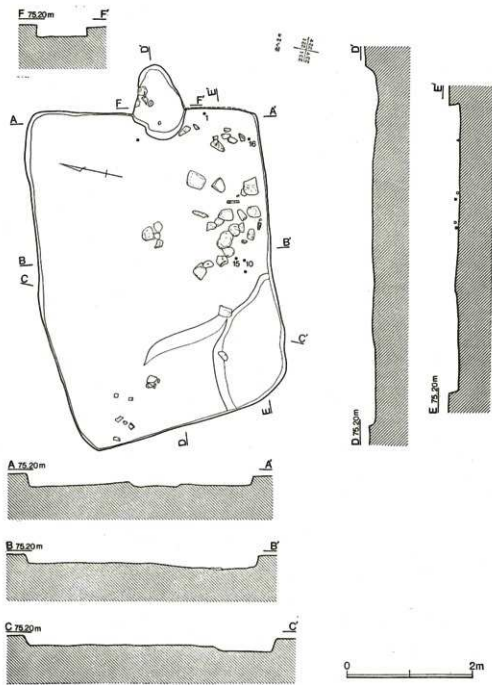
第144図 第86号住居跡出土遺物

### 第87号住居跡 (第145図)

23—ミ区に位置し、第93住居跡の上方につくられる。規模は5.26×3.74mで、深さは0.18mである。形態は不整正方形で、主軸はN-75°30'-E、床標高は74.93mである。

竈は東壁中央にあり、長さ1.2×幅0.85mである。床面の南東隅には浅い落ち込みがあり、南半部には多量の石が分布する。柱穴はない。

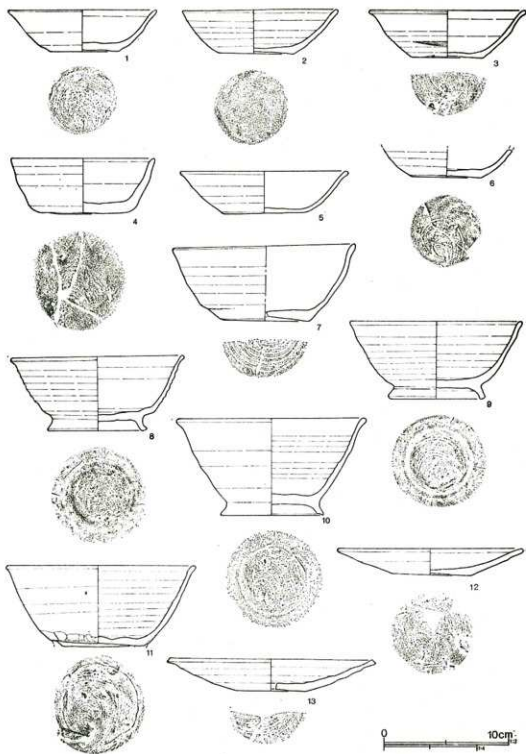
遺物は竈内から甕05が、床面から埴(1)・(2)・(3)・(4)・(6)、埴(7)、高台付埴(8)・(9)・00・01、皿02・03、鉢04、土師器甕05、鎌(7)、不明鉄器08が出土する。00・04・05は鉄滓が付着するが、01は内面に砂鉄が見られるため、砂鉄容器と考えられる。鉄滓は4.24kgと羽口が4片出土する。



第145图 第87号住居跡

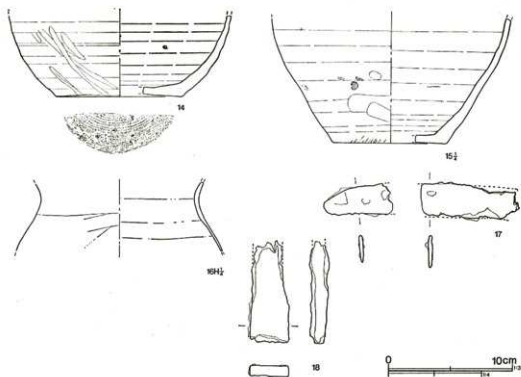
第87号住居跡出土遺物 (第146・147図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	須恵器	口径 11.9	体部中位から外反が始まる。指差し入れ痕明瞭である。体部上位まで離した糸が走り、糸目を残す。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土: 0.3以下B+C+E 多焼成: 3色調: N6/0 灰 残存: 80 床
		底径 5.8			
		器高 3.3			
2	須恵器	口径 12.5	体部は緩やかに丸味を持って立ち上がる。器内の厚さが不均一。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。末野産	胎土: 0.7以下B+C+D +E 焼成: 1色調: 5 Y6/2灰オリブ 残存: 90% 床
		底径 6.0			
		器高 3.5			
3	須恵器	口径 12.6	体部中位で屈曲し外反する。1と同様体部に糸切りの際の糸目が残る。	右回転撫で8周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土: 0.5以下B+C+E 焼成: 3色調: 2.5Y6/1 黄灰 残存: 50% 床
		底径 5.9			
		器高 3.8			
4	須恵器	口径 11.6	厚手で底部が広く、体部はあまり開かない。口唇部は薄くなる。摩滅顕著。	右回転撫で3周。底部右回転糸切り後、周辺手持ち筥削り。整形不明瞭。末野産	胎土: 0.5以下B+C+D +H 焼成: 1色調: 10 Y R 7/4にぶい黄橙 残存: 50%
		底径 7.1			
		器高 4.4			
5	須恵器	口径(13.6)	平たくやや大振りである。口縁は外反する。	右回転撫で4周。底部右回転糸切り。焼成悪く器面剥離が著しい。末野産	胎土: B+C+E 焼成: 2色調: 5Y6/1灰 残存: 60% 覆土
		底径 6.5			
		器高 3.4			
6	須恵器	底径 6.7	体部は丸味を持つ。	右回転撫で。底部右回転糸前引き切り。末野産	胎土: B+C+D+E 焼成: 4色調: 5Y5/1灰 残存: 底部100% 床
7	須恵器	口径(14.8)	台耕地では碗は高台が付くが、高台のない例。口唇は外反し玉縁状に肥厚する。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。焼け歪み、作りが悪い。南比企産	胎土: 0.4以下B+C多+ I(1cl=2) 焼成: 4色 調: 10Y5/1灰 残存: 40% 床
		底径(7.2)			
		器高 6.1			
8	高台付碗 須恵器	口径 14.0	高台はへの字状に大きく開き、端面は外傾する。体部は直線的に外傾し、口唇で外反する。轆轤目顕著。内面使用により平滑となる。	右回転撫で8周。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土: 0.8以下B+C+D +E多 焼成: 5色調: N5/0灰 残存: 80% 床
		高台径 7.8			
		器高 6.0			
9	高台付碗 須恵器	口径 14.0	8と同類似する作りである。	右回転撫で9周。底部右回転離し糸切り。高台張りつけ後、内外回転撫で。末野産	胎土: 0.6以下B+C+E 焼成: 5色調: 2.5Y5/2 暗灰黄 残存: 50% 床
		高台径 7.8			
		器高 6.2			
10	高台付碗 須恵器	口径(15.5)	高台はへの字状に開き、端面に沈線を通らし内傾する。体部は直線的に立ち上	右回転撫で12周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外回転撫で。末野産	胎土: 0.6以下B+C+E 多色調: N5/0灰 残存: 40%
		高台径 8.3			
		器高 7.8			



第146图 第37号住居跡出土物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	高台付 碗 須恵器	口径(15.3) 底径 7.8 現高 6.5	がら大振りの碗である。高台内側に鉄滓付着する。	右回転撫で11周。底部右回転まわし余切り。高台張りつけ後内外回転撫で。 末野産	胎土：0.6以下B+C+E 焼成：5 色調：5Y 6/1 灰 残存：高台欠60% 床
12	皿 須恵器	口径 15.1 底径 6.6 器高 2.1	体部は直線的に開く。	右回転撫で14周。底部右回転離し余切り。 末野産	胎土：0.2以下B+C+E 焼成：5 色調：2.5GY 6/1 灰オリブ 残存：65% 床
13	皿 須恵器	口径(16.3) 底径 (5.5) 器高 2.6	第60号住居跡に類似形態の蓋が見られ、比較するに13は口唇端部に窪みをつくるが、口唇内側には身と合わせる段がないため皿とした。しかし蓋の可能性も残る。	右回転撫で5周。底部右回転余切り後、天井部最上位を削る。 末野産	胎土：0.4以下B+C+D 焼成：3 色調：2.5Y7/2 灰黄 残存：30% 覆土
14	鉢 須恵器	底径(10.1)	体部は丸く内彎して立ち上がる。内面に鉄滓付着。	右回転撫で7周+α。底部右回転余切り。外面に火傷痕明瞭。 末野産?	胎土：1.1以下B+C+D 焼成：5 色調：7.5YR 5/1 褐灰 残存：30% 床
15	甕 須恵器	底径(12.0)	体部は外傾して立ち上がるが上位で内彎する。外面に鉄滓付着。	右回転撫で8周+α。底部鋭削り。体部下位回転鋭削り。 末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：5 色調：N 3/0 暗灰 残存：30% 窟
16	甕 土器	頸部径 (16.7)	胴部から口縁へは緩やかに外反する。	二次加熱により内外摩滅著しく整形不明瞭。	胎土：微A多+D+E+F +G+H 焼成：2 色調 ：7.5YR7/4にぶい橙 残存：25% 床
17	鎌 鉄製品	身幅 2.6	2片に折れ破損が著しい。厚さは基部の付近で0.5mmである。切先付近はやや曲り丸くなるが、旧態を留めているか不明である。	鍛造。反対側に長軸に沿って木目が付着する。	重量：31.7g 床
18	板状鉄 製品	現長 8.2 幅 3.1 厚 0.85	厚い板状であり、断面長方形となるが、刃はない。上方が狭くなる。未製品の可能性もある。	鍛造?。	重量：80.77g 床



第147図 第87号住居跡出土遺物(2)

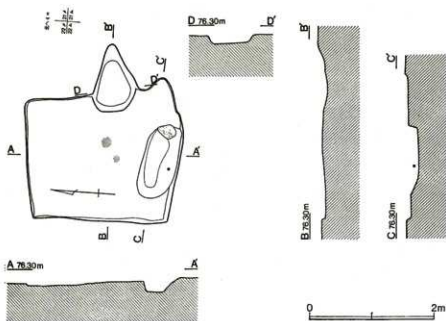
#### 第88号住居跡 (第148図)

22-メ区に位置し、第89号住居跡に近接する。規模は1.92×2.5 m、深さは0.22 mである。形態は不整形で、主軸はN-89°-E、床面高は75.93 mである。

竈は東壁中央にあり、長さ1.05 m×幅0.7 mである。床面南壁脇に楕円形の浅い掘り込みがある。中央に僅か鉄滓が分布する。遺物は覆土中から坏(1)・(2)、鉄滓附着甕(4)、鉄滓590 g、羽口片。

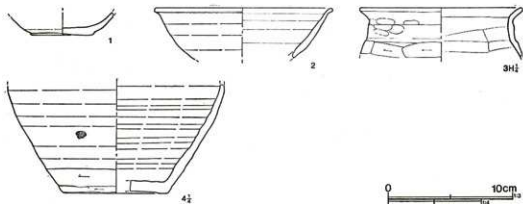
#### 第88号住居跡出土遺物 (第149図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須恵器	底径 5.1	指差し込み部が明瞭。	右回転撫で。底部右回転系切り。 末野産	胎土：0.7 B+C+D+E 焼成：3 色調：7.5 Y5/1 灰 残存：底完 覆土
2	坏 須恵器	口径(14.4)	口唇部は短く外反し、玉縁状になる。	右回転撫で。 末野産	胎土：0.8 以下B+C+H 焼成：2 色調：5 Y R5/8 明赤褐 残存：25% 覆土
3	甕 土師器	口径(17.2)	やや内傾するコ字状口縁で、やや厚手である。二次加熱を受ける。	口縁2段の横撫での後、胴上位を右→左へ寛削りする。内面は寛撫で。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 Y R 5/8 明赤褐 残存：20% 覆土



第148図 第88号住居跡

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	鉢 須恵器	底径(11.1)	胴部は外傾し、上位で内彎する。外面胴部に鉄滓附着する。	粘土帯被み上げ後、右回転撫で。底部寛削り。体部最下位は回転寛削り。内面底部に指頭痕明瞭。末野産	胎土：0.3以下B+C+E 焼成：2 色調：10YR5/3 にぶい黄褐 残存：30% 覆土



第149図 第88号住居跡出土遺物

第89号住居跡 (第150図)

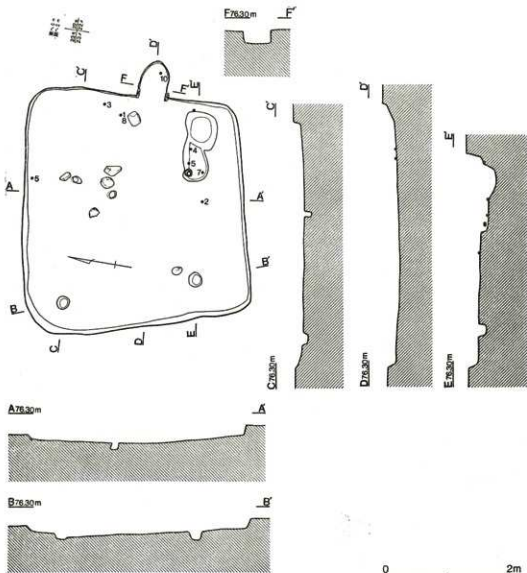
22-メ区に位置し、第88号住居跡に近接する。規模は $3.89 \times 3.57$  m、深さは0.3 mである。形態は北壁の長い台形で、主軸はN-82°30'-Eで、床標高は75.71 mである。

竈は東壁右寄りに位置し、長さ0.6×幅0.45 m、焚口袖には石が使われている。南東隅には貯蔵

穴がある。床には約15cmの石が数個散乱する。

柱穴は四壁沿いに浅いピットが2本存在しており、可能性が高い。

遺物は壺内から土師器甕(8)・(9)が、壺西から坏(1)、高台付埴(3)、土師器甕(6)が、貯蔵穴南には坏(2)、甕(4)、土師器台付甕(5)・(7)などが出土する。他に鉄棒が160g出土する。

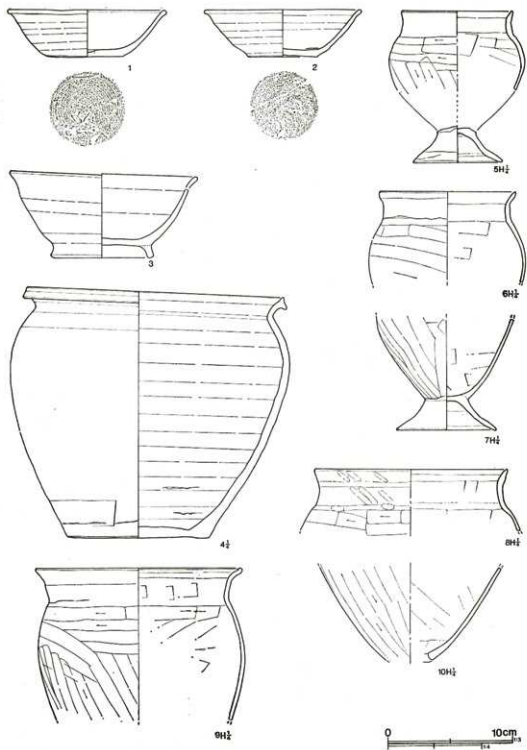


第150図 第89号住居跡



第89号住居跡出土遺物 (第151図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 12.7 底径 6.2 器高 3.8	口縁は緩やかに外反する。 口唇部は玉縁状になる。	右回転撫で6周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土: 0.7以下B+C+E 焼成: 3 色調: 2.5 Y5/2 暗灰黄 残存: 80% 床
2	杯 須恵器	口径 12.6 底径 5.6 器高 3.8	指差し込み底が明瞭で、口唇は外反する。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土: 0.7以下B+C+D +E 焼成: 2 色調: 5 Y 6/1 灰 残存: 75% 床
3	高台付 杯	口径 15.1 高台径 8.3 器高 6.9	高台はへの字状に開き、端部は外傾する。口唇は外反する。胎土分析№7	右回転成形後、左回転撫で。底部右回転糸切り。高台付着後回転撫で。末野産	胎土: 0.5以下B+D多 焼成: 2 色調: 2.5 Y7/1 灰白 残存: 60% 床
4	鉢 須恵器	口径(27.3) 胴径(29.8) 底径 15.1 器高 26.0	平底から内傾気味に開き、胴上位で窄まり、頸部にて短く外反して口唇に至る。口唇は上下に突き出し、端面は窪む。	粘土帯積み上げ後、右回転撫で。内外面摩滅。末野産	胎土: 1.1以下B+C+D +E 焼成: 2 色調: 5 Y 6/1 灰 残存: 60% 床
5	台付甕 土師器	口径(11.8) 胴径(14.3) 脚径 9.3	脚部はへの字状に開くが中位で開きが大きくなる。胴部は丸く、口唇の開かないコの字状口縁に至る。	口縁および胴部横撫で。胴上位右→左へ、下位上→下への篋削り。内面は右→左への篋撫で。	胎土: 微A多+E+F+G +H 焼成: 3 色調: 5 Y R 6/6 橙 残存: 上半部 45%、脚部80% 床
6	甕 土師器	口径 14.3 胴径 16.5	丸い胴部から、直立するコの字状口縁へ至る。	口縁は2段の横撫での後、胴上位は右→左への篋削りを行なう。内面は右→左への篋撫で。	胎土: 微A多+E+F+G +H 焼成: 4 色調: 7.5 Y R 6/6 橙 残存: 80%
7	台付甕 土師器	脚径 10.5 現高 11.6	6と同一個体の可能性あり。胴部は脚に向かって細く窄まり、脚はへの字状に開くが、中位でさらに開く。	胴部外面は上→下への篋削り、内面は右→左への篋撫で。脚部は横撫でが行なわれる。	胎土: 微A多+E+F+G +H 焼成: 3 色調: 7.5 Y R 6/6 橙 残存: 70% 床
8	甕 土師器	口径(20.4)	胴部からやや内傾するコの字状口縁に至る。	口縁は2段の横撫での後、胴上位を右→左へ篋削りする。内面は木口撫で。	胎土: 微A多+E+F+G 焼成: 4 色調: 2.5 Y R 6/6 橙 残存: 45%床・庫
9	甕 土師器	口径 22.0 胴径 21.9 現高 16.0	口縁は外反するコの字状口縁で、口唇端部は内側へ巻き込む。	口縁は2段の横撫での後、胴上位を右→左へ、下位を左上→右下へ篋削りする。内面は篋撫で行なう。	胎土: 微A多+E+F+G 焼成: 4 色調: 5 Y R 6/6 橙 残存: 上半75% 床
10	甕 土師器	現高 9.8	胴部は下方へ直線的に窄まる。	外面は上→下への篋削り、内面は篋撫でが施される。	胎土: 微A多+E+F+G +H 焼成: 4 色調: 5 Y R 5/4 にふい赤褐 残存 : 25% 庫



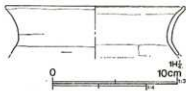
第151圖 第89号住居跡出土遺物

第90号住居跡 (第153図)

22-モ区に位置するが、規模は2.56×2.55m、深さ0.17mを測る。形態は正方形で、主軸はN-86°30'-E、床標高は74.77mである。

竈は東壁右寄りにあり、長さ0.6×幅0.43mである。床面には北西隅に深さ0.2mの下整形の落ち込みがある。

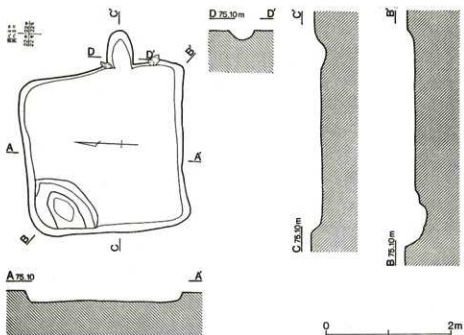
遺物は土坑の中から土器の壺(1)が1点出土する。



第152図 第90号住居跡出土遺物

第90号住居跡出土遺物 (第152図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 土器	口径(19.0)	口縁は大きく外反し、口唇端部が内側へ僅かに曲る。	口縁横撫での後、胴部右→左への削り。内外面摩滅著しく、整形不明確。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 YR 6/6 概 残存：30% 土坑



第153図 第90号住居跡

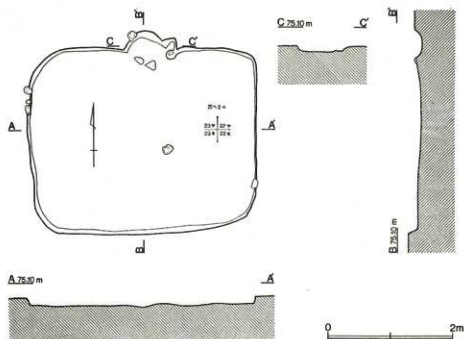
第91号住居跡 (第154図)

23-モ・ヤ区に位置する。規模は2.99×3.69mで、深さ0.17mを測る。

形態は隅丸長方形で主軸はN-0°30'-E、床標高は74.71mである。

竈は北壁中央にあるが、浅いため不明確である。長さ0.5×幅0.8mで、周辺に石が散乱する。

出土遺物は、竈内から坏(1)・(2)が出土する。



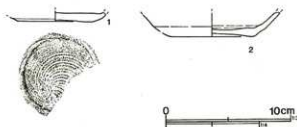
第154図 第91号住居跡

第91号住居跡出土遺物 (第155図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 7.1	底部と体部の境は、兩りによって丸くなる。	右回転撫で。底部右回転糸切り後、周辺右回転旋削り2周。 南比全産	胎土：B + C + I (1cl=2) 焼成：5 色調：5 Y 5/1 灰白 残存：底部70% 電床
2	杯 須恵器	底径 6.5	上げ底で、指差し込み部が明瞭。	右回転撫で。底部右回転糸切り。摩滅顯著。末野産	胎土：0.2 以下B + C + D + E 焼成：1 色調：5 Y 7/1 灰白 残存：底部50% 電床

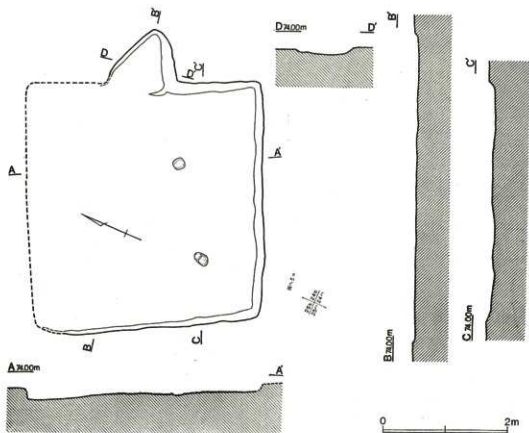
第92号住居跡 (第156図)

25-7区に位置し、規模は3.80×3.41mで、深さは0.2mである。形態は長方形で主軸はN-65°30'-E、床標高は73.56m。竈は東壁中央にあり、長さ1.01×幅1.1mを測るが、浅いため不明瞭である。柱穴はない。



第155図 第91号住居跡出土遺物

遺物は杯(1)、蓋(2)、壺(3)、甕(3)、土師器甕(5)・(7)、土師器台付甕(6)および、製鉄関係の鉄滓400g、羽口1個体と破片が多く出土する。

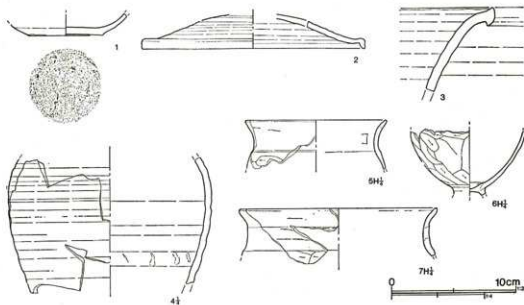


第156図 第92号住居跡

第92号住居跡出土遺物 (第156図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 6.0	指差し込み部が明瞭。	右回転撫で。底部右回転難し し余切り。 末野産	胎土：0.7以下B+C多 焼成：5 色調：5PB4/1 暗青灰 残存：底部完
2	蓋 須恵器	口径(17.9)	口唇は強く屈曲して下方へ 垂れ下がる。	右回転撫で5周。天井部を 右回転難削りする。内面中 心に火燂あり。 南比企産	胎土：B+C+I 焼成： 5 色調：5PB4/1暗青 灰 残存：25%
3	甕 須恵器	口径(40.5)	口縁は大きく外反し、口唇 はT字状に上下に尖る。器 肉の色はセビア色を呈す る。	粘土帯積み上げ、右回転撫 で。 南比企産?	胎土：0.3以下B+C 焼 成：5 色調：N4/0灰 残存：5%
4	壺 須恵器	胴径(21.5)	胴部中位で、上方は窄まり 始める。表に轆轤目顯著。	粘土帯積み上げ、右回転撫 で。特に胴上半は細かな回 転撫で。 南比企産?	胎土：B+C少 焼成：3 色調：2.5YR5/1赤灰 残 存：胴35%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	甕 土師器	口径(14.9)	外反する口縁である。	口縁横撫での後、胴部を右→左へ笊削りする。内面は笊撫で行なう。	胎土：微A多+F 焼成：3 色調：5 YR 5/4 にぶい赤褐 残存：口縁25%
6	台付甕 土師器	胴径 12.1 基部径 3.2	胴部は丸く、基部で窄まる。	底部は最後に粘土を押し込んで成形しているようである。胴外面左上→右下への笊削り。内面右→左への笊撫で。	胎土：微A多+0.6以下D+F 焼成：3 色調：5 YR 6/6 橙 残存：胴下半部70%
7	甕 土師器	口径(20.9)	コの字状口縁で大形甕である。口縁は厚手。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左の笊削り。	胎土：微A+F+G 焼成：3 色調：5 YR 7/6 橙 残存：口縁20%



第157図 第92号住居跡出土遺物

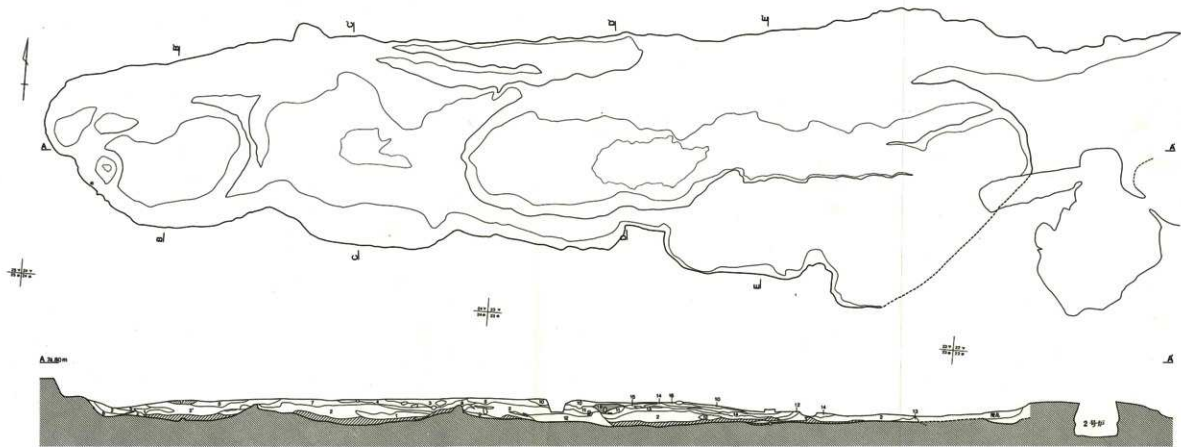
### 第93号住居跡 (第158図)

22~24-区に位置するが、東に接して第2号製鉄炉が存在しており、互いに有機的関連を持つ遺構である。規模は全長21.17mあり、幅は3.5~4.45mの、不整形の遺構がいくつも連結した形となる。横断面を見るに、最低3つの掘り形があり、前後関係も東がより古いと考えられる。床には粘土質の土が貼ってあり、皿状の掘り形を埋めた状態となる。覆土は多くの鉄滓・炭・焼土が混入する。竈・柱穴は持たず、住居と言えるか疑問であるが、出土遺物と遺構の状況から製鉄関係の工房跡と考えられる。

出土遺物は坏類の他、獸脚の鉤型(切)・鋳、砂鉄付着土器(切)および鉄製品が多く、獸脚(切)、鋳造容器(切)などが出土した。鉄滓は1.48g、羽口片・炉壁片も出土する。

第93号住居跡出土遺物 (第159・160図)

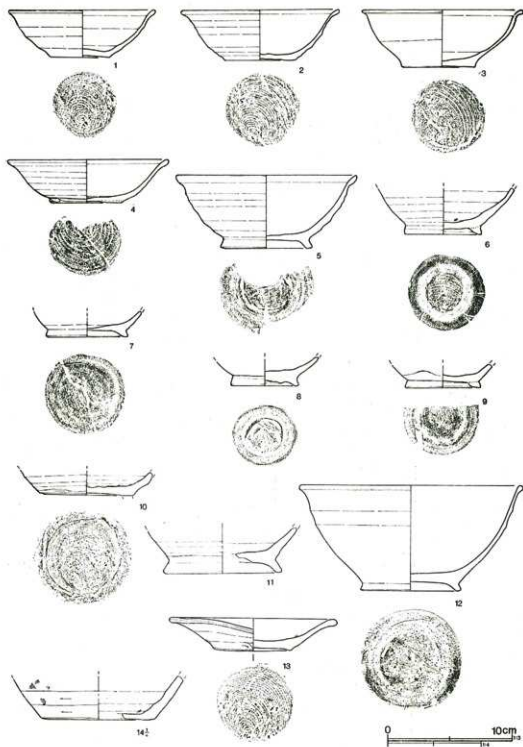
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 11.8 底径 4.8 器高 3.8	指差込み部で外反し、口唇は肥厚し外反する。焼き歪む。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：B+C多 焼成：5 色調：10B G 3/1 暗青灰 残存：100% 床
2	杯 須恵器	口径(12.8) 底径(5.7) 器高 4.0	口縁部は大きく外反し、口唇は肥厚する。	右回転撫で7周。底部右回転離し糸切り。粘土は粘りがある。南比企産?	胎土：B+C 焼成：5 色調：N 5/0 灰 残存：40% 床
3	杯 須恵器	口径 13.0 底径 5.9 器高 4.6	底部から大きく外反し、口唇では再び大きく外反する。内外面に小さな鉄滓付着。	右回転撫で。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：微B・C・D少 焼成：3 色調：7.5Y7/2灰白
4	杯 須恵器	口径 13.0 底径 5.8 器高 3.4	指差し込み部で外反し、口唇で肥厚し、再び外反する。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：B+C+E 焼成：2 色調：10Y R 6/4 によい黄橙 残存：50%
5	高台付 埴 須恵器	口径(14.5) 高台径 7.3 器高 5.9	高台はハの字状に開き、端面が僅かに外傾する。口唇は肥厚する。	右回転撫で7周。底部右回転糸切り。高台内外回転撫で。末野産	胎土：0.4以下B+C+E 焼成：2 色調：5Y R 6/3 によい橙 残存：35% 床
6	高台付 埴 須恵器	高台径 6.2	高台は小さく、ハの字状に開くが、先端は尖る。内面に小さな鉄滓付着する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台内外回転撫で。末野産	胎土：B+C 焼成：4 色調：7.5Y R 5/4 によい褐 残存：底部100%
7	高台付 埴 須恵器	高台径 6.6	高台は低くハの字状に開く。端面は内傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台内外回転撫で。末野産	胎土：B+C+E 焼成：1 色調：10Y R 6/2 灰黄褐 残存：底部100%
8	高台付 杯 須恵器	高台径 5.5	高台は小さく、ハの字状に開く。端面は丸い。高台は焼け歪む。	右回転撫で。底部右回転糸切り。内外面回転撫でを施すが、内が強い。末野産	胎土：B+C+E+H 焼成：2 色調：7.5Y R 6/1 褐灰 残存：底部100%
9	高台付 埴 須恵器	高台径 6.1	高台は小さく、ハの字状に開き低い。端面は内傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台内外面を回転撫で。末野産	胎土：B+C 焼成：5 色調：10Y 5/1 灰 残存：底部60% B区
10	高台付 埴 須恵器	底径 7.6	高台は弱れる。指差し込み部で外反。内面に鉄滓付着する。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。高台内外を回転撫で。末野産	胎土：B+C+H 焼成：5 色調：5 P B 4/1 暗青灰 残存：底完 A区床下
11	高台付 埴 須恵器	高台径 (9.6)	高台はハの字状に大きく開き、高い。端面は内傾する。	右回転撫で。高台の内外を回転撫で。末野産	胎土：0.5以下B+C+E 焼成：2 色調：10Y R 7/3 によい黄橙 残存：底部30% G区床



- 1 調査範囲 (調査範囲、埋土を含む)
- 2 調査範囲 (埋土を含む)
- 3 調査範囲 (埋土を含む)
- 4 調査範囲 (埋土を含む)
- 5 調査範囲 (埋土を含む)
- 6 調査範囲 (埋土を含む)
- 7 調査範囲 (埋土を含む)
- 8 調査範囲 (埋土を含む)
- 9 調査範囲 (埋土を含む)
- 10 調査範囲 (埋土を含む)
- 11 調査範囲 (埋土を含む)
- 12 調査範囲 (埋土を含む)
- 13 調査範囲 (埋土を含む)
- 14 調査範囲 (埋土を含む)
- 15 調査範囲 (埋土を含む)
- 16 調査範囲 (埋土を含む)
- 17 調査範囲 (埋土を含む)
- 18 調査範囲 (埋土を含む)

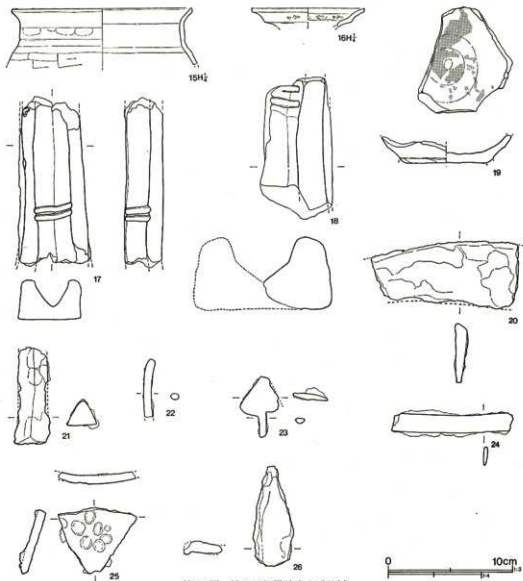
- 1 灰褐色土 (灰褐色土、ローム、褐色土の混合層で若干の灰を含む土層)
- 2 褐色土 (ロームアツプの下部層を部分的に含む、灰、ロームアツプを含む)
- 3 灰褐色土 (灰褐色土の下部層を含む土層)
- 4 褐色土 (砂層)
- 5 灰褐色土 (砂層に含む、灰、土を含む)
- 6 灰褐色土
- 7 灰褐色土 (砂層)
- 8 灰褐色土 (砂層)
- 9 灰褐色土 (褐色土とロームアツプの混合層)
- 10 灰褐色土 (褐色土、灰、土を含む)
- 11 灰褐色土 (2層に灰-灰が多含まれる層)
- 12 灰褐色土 (2層に灰-灰が多含まれる層)
- 13 灰褐色土 (褐色土でロームが混入)
- 14 灰褐色土 (褐色土でロームが混入)
- 15 褐色土
- 16 灰褐色土 (埋土、褐色土を含む)
- 17 埋土
- 18 埋土、灰、灰が混入





第159図 第93号住居跡出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	高台付 碗 須恵器	口径(18.0) 高台径 8.1 器高 8.4	高台は体部に比べ短く、口唇は肥厚し大きく外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D+E多 焼成：2色調：5YR6/6橙 残存：40% E区床
13	皿 須恵器	口径 13.6 底径 6.4 器高 2.6	体部は大きく外反し、口唇は玉縁状に肥厚する。焼け歪む。一部鉄滓付着。	右回転撫で5周。底部右回転まわし糸切り。 末野産	胎土：B+C 焼成：5色調：5B4/1暗青灰 残存：70%
14	甕 須恵器	底径 12.0	平底から外傾して立ち上がる。内外面に鉄滓付着。	右回転撫で。底部回転筥削り。	胎土：B+C+E 焼成：4色調：10YR7/3にふい黄橙 残存：25% B区
15	甕 土師器	口径(19.0)	直立するコの字状口縁で、口唇は内側へ僅かに巻く。	口縁2段の横撫での後、胴部右→左へ筥削り。内面は筥撫で。	胎土：微A多+F 焼成：3色調：2.5YR6/6橙 残存：口縁25%
16	壺 土師器	口径(11.9)	中位に段を持つ口縁で、口唇は端面をつくる。	内外面に刷毛目が施される。一部赤彩が見られる。五領期と考えられる。	胎土：微A+F+G+H 焼成：4色調：7.5YR7/4にふい橙 残存：20% B区床
17	獸脚鈿 型 土製品	現長 13.6 高 3.1 幅 4.8~ 5.6	内型の横断面はやや賑らむ三角形で、二本の沈線が入る。脚端部は欠損するが、やや太くなる。内面は還元吸炭する。2はこの形態の鈿型でつくられたであろう。	胎土を平らなところに押しつけ底をつくり、側面は指頭により成形。内型は平滑に仕上げられる。	胎土：0.4以下微A多+B+C+0.5以下黄白色砂質粘土塊多 焼成：3色調：7.5YR7/4にふい橙 残存：上端下端欠 C区床
18	獸脚鈿 型 土製品	現長 11.4 高 5.7 幅 (11.0)	横断面五角形となる。二本の沈線は幅が広い。鉄滓が付着する。内面は還元する。	粘土塊から作り出された型である。	胎土：微A多+H+モミガラ 焼成：2色調：10YR7/3にふい黄橙
19	高台付 碗 須恵器		高台、口縁が欠ける。内面割れ目に砂鉄、鉄滓が付着する。摩滅著しい。	右回転撫で。底部糸切り。 末野産	胎土：微白A+E 焼成：1色調：7.5YR6/6橙 残存：底部60%
20	鎌	現長 11.9 身幅 5.3 背幅 0.9	身の厚い大振りの鎌である。両端が欠損する。	鍛造。	重量：147.09g
21	鉄製獸 脚	現長 7.8 幅 2.4 高 1.9	17から推定するに獸脚であろう。重量があり、錆は塊状ではがれる。	鍛造。	重量：97.43g
22	棒状鉄	現長 4.6	一端は丸く旧態を呈する。	表面は平滑となる。	重量：6.33g



第160図 第93号住居跡出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
	製品	幅 0.65	横断面は卵形となる。		
23	鉄 鉄	切先長 3.2 幅 (3.4)	短頭腹袂鑄造正三角形形式であるが、頭が薄い。	鍛造。	重量：10.15g
24	刀子?	現長 9.9 身幅 1.4	厚い錆で覆われる。刀子とすれば細長い。	鍛造。	重量：24.93g B区 分析資料
25	容器状 鉄製品	器厚 0.65	表面に円形の割れ顯著。重量がある。獸脚に付く容器であろう。	鑄造。	重量：72.62g B区 分析資料

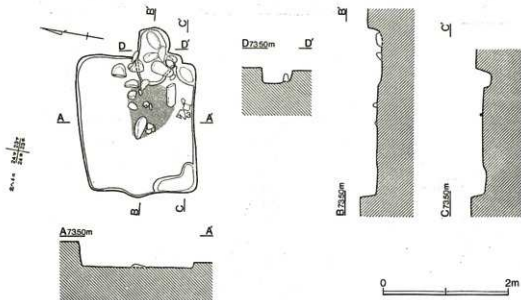
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
26	板状鉄製品	現長 8.0	錆で剥れ、不整形である。部分的に平らな面を持つ。		重量: 60.23g B区

#### 第94号住居跡 (第161図)

23一ホ区に位置し、第95号住居跡に近接し、第93号住居跡(工房跡)の下にある。規模は2.16×1.85m、深さ0.4mを測る。形態は長方形で、主軸はN-81°30'-E、床標高72.93mである。

竈は東壁右寄りにあり、長さ0.95×幅0.5mで煙道は垂直に立ち上がる。竈前方から中央にかけて大形の石とともに鉄滓が出土した。壁は垂直に立ち上がり、残存部で0.4mを測る。

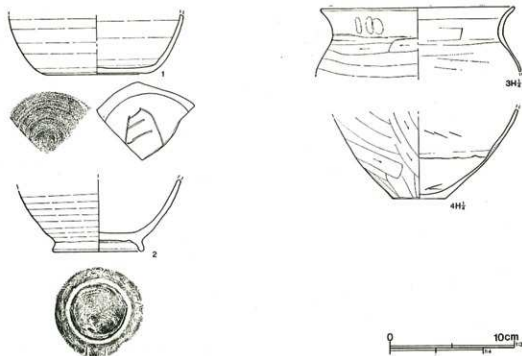
遺物は竈から塊(1)が出土するが、底部に「月」の筧書きがあり、第9号住居跡竈出土品と接合した。南壁際から土師器の甕(3)が出土する他、高台付塊(2)、土師器甕(4)がある。製鉄関連遺物として鉄滓が975g出土した。



第161図 第94号住居跡

#### 第94号住居跡出土遺物 (第162図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	須恵器		第9号住居跡No.5と接合した。同一個体のため説明は第9号住居跡を参照。		竈出土
2	高台付塊	高台径 7.4	高台はへんの字に開き、端面は丸くなる。	右回転撫で9周+α。底部は右回転糸切り。高台内外右	胎土: B+C+E 焼成: 2 色調: 2.5YR6/1赤灰



第162図 第94号住居跡出土遺物

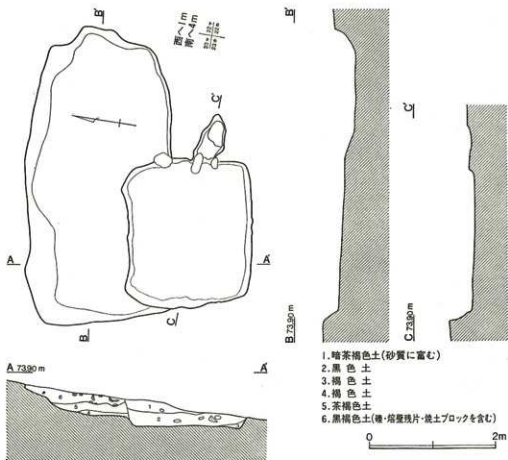
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	須恵器 甕 土師器	口径 20.5	口縁は大きく外反し、やや厚手である。	回転撫で。末野産 口縁2段の横撫での後、胴部上位を右→左への筥削りする。内面は右→左へ筥撫でする。	残存：口縁欠 胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 YR 4/8 赤褐 残存：60% 床
4	甕 土師器	底径 5.6	やや大きい平底から内脚気味に立ち上がる。	胴部外面上→下へ筥削りする。内面は筥撫で。胴下位に接合痕がある。	胎土：微A多+E+F+G+H 焼成：3 色調：5 YR 4/8 赤褐 残存：下半部50% 甕

第95号住居跡（第163図）

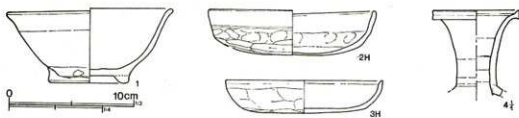
23一ホ区に位置するが、第94号住居跡に近接し、第93号住居跡（工房跡）の下にある。規模は2.37×1.99mで、深さは0.39mである。形態は長方形で、主軸はN-81°-E、床標高は72.92m。

竈は東壁右側にあり、長さ1.02×幅0.4mで右袖に河原石が使われる。住居跡の上には不整長方形で焙壁・焼土ブロックを覆土とする掘り込みがあるが、それを切り込んで構築している。

出土遺物は、高台付坏(1)、土師器坏(2)・(3)、壺(4)が出土する。



第163図 第95号住居跡



第164図 第95号住居跡出土遺物

第95号住居跡出土遺物 (第164図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	高台付 坏 須恵器	口径 13.4 高台径 6.4 器高 6.0	高台は太く低い。つくりも悪く、端部は丸くなる。口縁は大きく外反する。	右回転撫で。底部糸切り、摩滅のため不明瞭。胎土は練り込み風となる。末野産	胎土：0.3以下B+C+E 多 焼成：2 色調：5 Y 6/2 灰オリブ 残存：80 % 胎土分析№ 8

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯 土師器	口径 13.5 器高 3.6	浅い丸底から緩やかに立ち上がり、口縁に至る。口唇は僅かに内側が窪む。	口縁内外横撫で。底部寛削り。内面中央部横撫で。	胎土：微A・B・F少 焼成：3 色調：7.5YR7/4 にぶい橙 残存：50%
3	杯 土師器	口径 12.7 器高 2.6	浅い丸底で、丸く立ち上がるが、口唇は内側が外反し尖る。	内面全面撫で。外面口縁横撫での後、体部を2段、底径を一方方向に寛削りする。	胎土：微A+E+F 焼成： 2 色調：7.5YR7/4に ぶい橙 残存：90%
4	壺 須恵器	口径( 9.1) 頸部径 ( 4.3) 現高 9.0	口縁は大きく外反し、口唇部で上下に尖がりT字形となる。端面は浅く窪む。	粘土帯膜み上げ後、右回転撫で。口縁部の接合は、胴部に果せ、少し粘土を内側に巻く。 南比企産?	胎土：0.2以下B+C 焼成： 5 色調：5PB5/1 青灰 残存：口縁40%

#### 第96号住居跡(第165図)

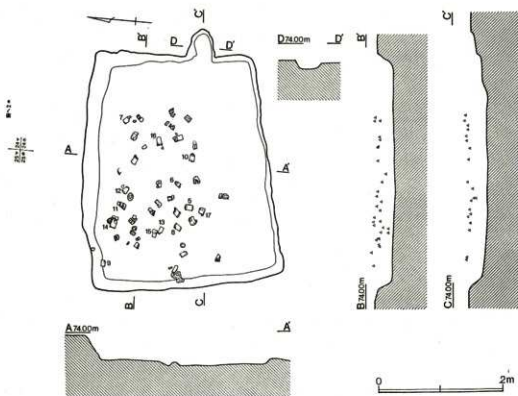
24・25一ホ区に位置し、第93号住居跡(工房跡)の下にある。規模は3.01×3.78mで、深さは0.31mである。形態はやや東壁が狭くなる長方形で、主軸はN-85°-Eで、床標高は73.53m。

竈は東壁右寄りであり、長さ0.8×幅0.45mである。床には柱穴などの施設はない。

出土遺物で注目できるものは、覆土中から検出された、50点の羽口である。第93号住居跡(工房跡)が上にあることから、廃棄されたものを投げ入れたと考えられる。他に蓋(1)、鉄滓付着の甕(2)土師器甕(3)、釘(4)などが出土する。鉄滓は75gと少ない。

#### 第96号住居跡出土遺物(第166・167図)

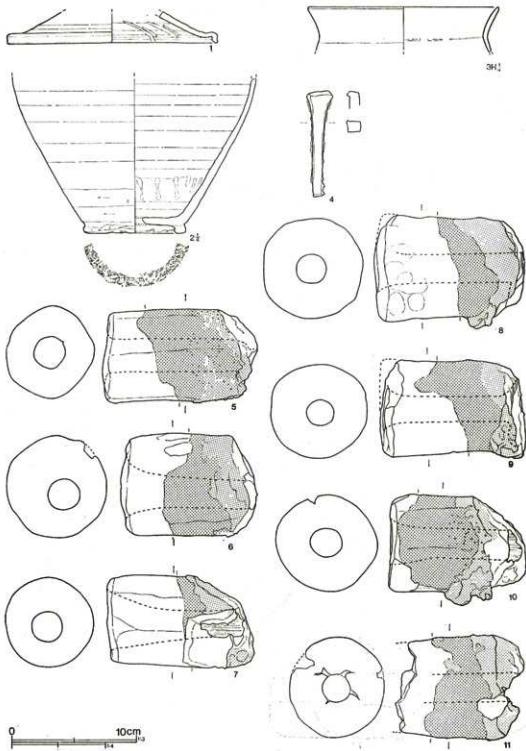
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	蓋 須恵器	口径(16.8)	口縁は強く屈曲して下方に垂れ下がる。口唇の内側は沈線状になる。	右回転撫で。内面に火傷が見られる。 南比企産	胎土：微B+C 焼成：5 色調：5PB4/1暗青灰 残存：20% 覆土
2	壺 須恵器	胴径 25.7 高台径10.8	高台は重みでつぶれ、端面に乾燥時の圧痕が残る。体部は外傾して直線状に延び上位で内彎する。鉄滓付着	粘土帯膜み上げ後、右回転撫で。胴部下位は回転寛削り。 末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成： 3 色調：7.5Y7/1灰 白 残存：下半部40%
3	甕 土師器	口径(20.2)	緩やかにくの字状に折れ曲る。二次加熱。	口縁横撫で。摩滅著しい。	胎土：微A多+E+F+G 焼成：2 色調：5YR6/6 橙 残存：22% 覆土
4	釘 鉄製品	現長 8.4	断面方形の角釘と考えられ、頭部は僅かな折り返しで作られる。頭部は幅広となり2.1cmを測る。	鍛造。	重量：34.42g



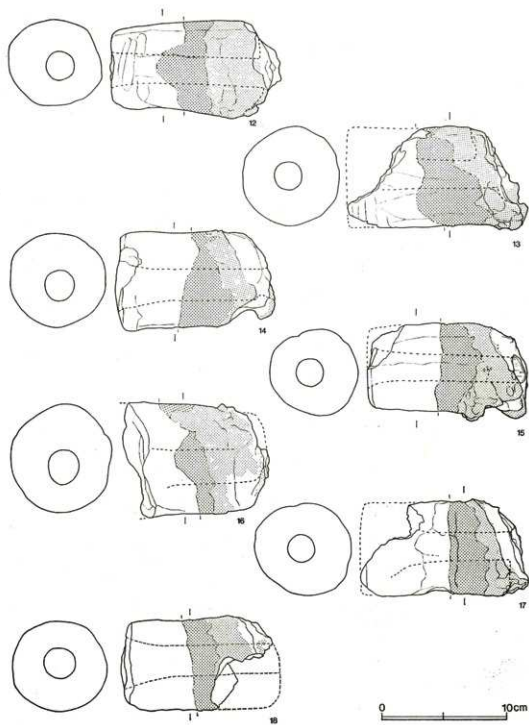
第165図 第96号住居跡

番号	器種	法	量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	羽	口全長 外径 孔径	12.5 7.4 2.4	高温のため口部が融解して垂れ下がりが、黒色ガラス化する。還元部が広く発泡。	棒に巻き、板に押しつけ多面形をつくる。口部周辺に鉄滓付着。	胎土：B+F多+スサ多 残存：100%
6	羽	口全長 外径 孔径	11.1 8.1 2.5	短かく、孔部は基部で擦れて太くなる。口部は黒色ガラス化する。	棒に巻き、板に押しつける。口部周辺に鉄滓が付着する。	胎土：A多+E+スサ 残存：100%
7	羽	口全長 外径 孔径	11.8 7.2 2.4	口部は融解して上部を失う。孔部は基部で擦り減り太くなる。口部は黒色ガラス化。	棒に巻きつけ板に押しつける。口部周辺に鉄滓が付着する。	胎土：微A多+スサ 均質 残存：90%
8	羽	口全長 外径 孔径	12.2 7.9 2.3	基部が太く、孔部も擦り減って太い。口部は黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、板に押しつけた後、外部を指で押し括れさず。鉄滓垂れ下がる。	胎土：多A+スサ 残存：95%
9	羽	口全長 外径 孔径	11.6 7.3 2.2	基部はやや太くなる。孔部もやや太い。口部黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、板に押しつけ、指撫で整形。鉄滓が垂れ下がる。	胎土：多A+スサ 残存：95%





第166圖 第96号住居跡出土遺物(1)



第167図 第96号住居跡出土遺物(2)

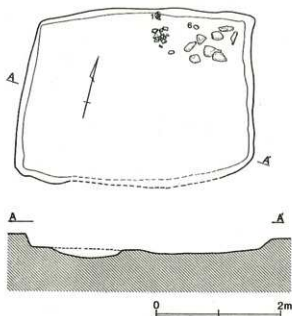
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	羽	口全長 10.9 外径 7.8 孔径 2.3	基部はやや太くなる。還元部が広く。口部の融解黒色ガラス化、発泡化する。	棒に巻きつけ、板に押しつける。口部周辺に鉄滓垂れ下がる。	胎土：0.5以下A+スサ多 残存：100%
11	羽	口現長 10.3 外径 8.0 孔径 2.2	基部は細く窄まり、口部は発泡するが黒色ガラス化しない。	棒に巻き、表を指頭痕で整形。口部周辺に鉄滓付着。	胎土：多A+スサ+F微 残存：60%
12	羽	口全長 13.7 外径 7.2 孔径 2.3	10と同様基部が細くなる。孔部は基部へ行くにしたがい太くなる。	棒に巻き、表を指頭痕で。口部に鉄滓付着する。	胎土：多A+スサ 残存：100%
13	羽	口全長 14.5 外径 7.8 孔径 2.2	基部はやや太くなるが、欠損する。口部は傾けて斜になる。	棒に巻き、指頭痕が残る。口部周辺には厚く鉄滓が垂れ下がる。	胎土：A+B+F+スサ 残存：70%
14	羽	口全長 12.5 外径 7.5 孔径 2.4	中程で折れ、基部にて太くなる。口部は融解して黒色ガラス化。孔部摩耗する。	棒に巻きつけ、板に押しつけ、指にて整形する。口部周辺には鉄分が付着する。	胎土：0.5以下A+スサ多 残存：95%
15	羽	口全長 12.9 外径 7.1 孔径 2.25	基部で細くなる形態である。口部は融解黒色ガラス化する。	棒に巻きつけ、板に押しつける。鉄滓は厚く垂れ下がる。	胎土：1.0以下A+スサ多 残存：95%
16	羽	口現長 11.8 外径 8.9 孔径 2.5	最も太い形で、基部が破損する。口部は黒色ガラス化する。	棒に巻きつけ、表に指頭痕がみられる。周辺に鉄滓付着する。	胎土：A+スサ、やや少ない 残存：80%
17	羽	口全長 13.6 外径 7.8 孔径 2.15	指頭での押圧により中窪みする。口部黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、表に指頭痕が見られる。口部周辺に鉄滓付着する。	胎土：A多+スサ+E 残存：60%
18	羽	口現長 12.3 外径 7.2 孔径 2.4	基部がやや太くなる。孔部は摩耗により太くなる。口部は黒色ガラス化。	棒に巻きつけ、表を指頭痕で。口部周辺は鉄滓が付着する。	胎土：0.4以下A多+スサ 残存：75%

#### 第97号住居跡（第168図）

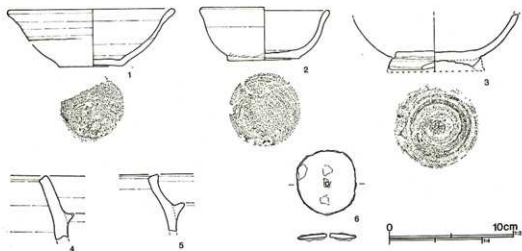
8—ケ区に位置し、1軒だけ段丘を違えてつくられる。黒田第20号墳の周溝の上で墳丘の風下につくられ、規模は3.75×2.85mである。形態は長方形を呈し、主軸はN—79°—Eである。

竈はなく、柱穴も存在しない。

出土遺物は(1)・(2)、高台付埴(3)、羽釜(4)・(5)、鉄製紡錘車(6)が出土する。



第168図 第97号住居跡



第169図 第97号住居跡出土遺物

第97号住居跡出土遺物 (第169図)

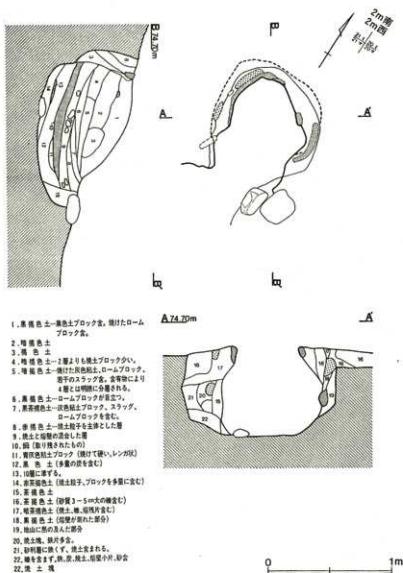
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径 13.5 底径 5.2	平底から外反して立ち上がり、口唇にて再び外反し、	体部外面中位に接合痕らしきものあり。右回転撫で。	胎土：0.4以下B+C+E 多 焼成：3 色調：7.5

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	杯 土師質	器高 4.6	肥厚する。	底部右回転まわし糸切り。 末野産	Y 5/1 灰 残存: 30% 床
		口径 10.4	平底から僅かに直立し、腰の張る体部から外反して口縁に至る。やや厚手。	右回転撫で。底部右回転まわし糸切り。胎土・作りから土師質土器。	胎土: B+C+E+F+金 H 焼成: 3 色調: 7.5 Y R 7/6 橙 残存: 80% 床
		底径 5.9			
器高 4.2					
3	高台付 埴 須恵器	高台径 (7.8)	高台はやや開く形態であるが、内側に粘土が張りつけてあるため、段を持つ。体部は丸い。	右回転撫で。底部回転糸切り後高台を張りつけ、内側を右回転撫で4周で整形。 末野産	胎土: B+C+D微+F 焼成: 2 色調: 5 Y R 8/5 明赤褐 残存: 底部80% 覆土
4	羽 須恵器	器厚 0.9	口縁は内傾し、口唇には沈線が入る。	粘土帯糞み上げ、回転撫で。 末野産	胎土: B+C+D+E+金 H 焼成: 3 色調: 5 Y R 6/6 橙 残存: 小片 床
5	羽 須恵器	器厚 0.6	口縁は内傾して反り、口唇は外へ突き出す。	粘土帯糞み上げ後、回転撫で。 末野産	胎土: 0.1 以下微A多+H 焼成: 3 色調: 7.5 Y R 6/4 にぶい橙 床
6	紡錘車 鉄製品	外径 5.1 厚 0.3 孔径 0.25	僅かに彎曲しており、端部は薄く尖る。	鍛造。	重量: 27.1g

## 2 製鉄関連遺構

### 第1号製鉄炉 (第170図)

21一マ区に位置し、段丘傾斜面に作られ、3基存在する製鉄炉のうち、最も東にある。シャフト炉であり、規模は上端で幅0.5m、下端幅0.75mあり、深さは現存0.7mを測ることができる。壁の残りは悪く、特に下の方では旧状を示すものか、融解した壁は存在しない。炉の中の土層は焼土・



第170図 第1号製鉄炉

粘土、炭化物、スラッグなどが混入するが、炉底から0.15m上には鏝であろうか、厚さ8m近くの層が見られた。この層は皿状になり、あるいはここが本来の炉底であると考えられる。この層の下には多量の炭を含む黒色土層が存在するが、これが防湿の役をはたした可能性がある。

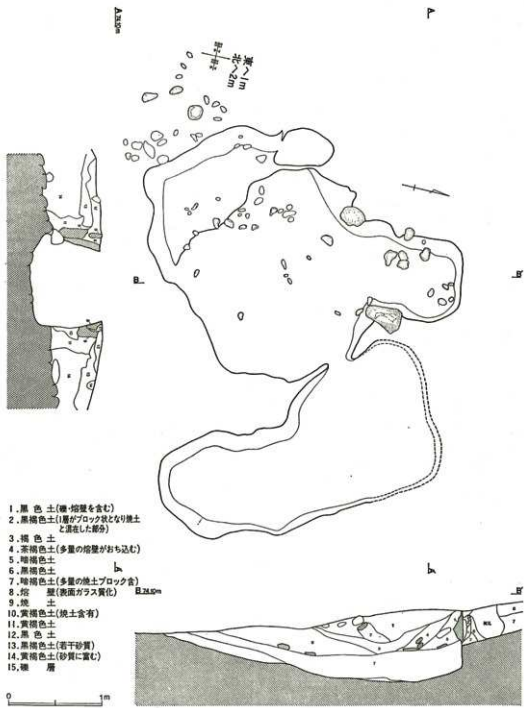
炉の構築は、まず炉よりも大きな掘り込みをつくり、そこに土を入れ、壁をスサ入り粘土で塗ってある。埋め込んだ土の中にも焼土、あるいは鉄滓が含まれる。このような壁をつくるのは、地山が礫層で、崩れ易いことも一因であろう。

### 第2号製鉄炉(第171図)

22—マ区に位置し、3基の炉の最も西に位置し、第93号住居跡と近接しており、両者は有機的な関連があったと考えられる。壁の残りはよいが、前部はすでに破壊されていた。炉の上幅は0.75m、下幅は0.98mを測る。ガラス化した壁は西側によく残り、厚さ7cmある。左右の壁は内傾するが奥壁はほぼ直立する。前方へは緩やかに立ち上がり、前庭部は炉に向かって傾斜する形となる。炉内は、炉の残存高0.75mの下半部を、焼土を含む暗褐色土で占めている。この土層の上には鉄滓が点々と堆積しており、炉壁の高さもこの土層を最下位として、それより下はほとんど焼けてはいない。おそらく第1号炉と同様、ここが炉底と考えられる。この炉の掘り形は、奥壁に一部見られる出土遺物は須点器坏類と羽口が出土する。

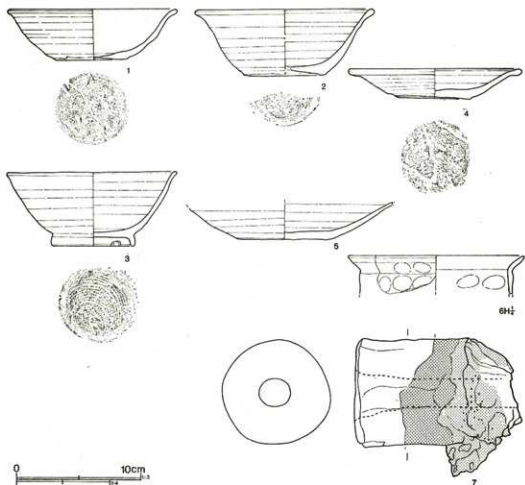
### 第2号製鉄炉出土遺物(第172図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏 須点器	口径 13.7	底部中央は極く薄くなる。口唇は大きく外反する。	右回転撫で5周。底部右回転離し糸切り。末野産	胎土：0.3以下B+C+D+E多 焼成：2色調：10YR 5/3にふい黄褐 残存：40% 胎土分析№18
		底径 5.9			
		器高 4.1			
2	高台付 碗 須点器	口径(14.4)	高台は剥落する。腰部と口唇部は厚い。	右回転撫で8周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：1.5以下B+C+D 焼成：3色調：2.5YR 6/2 灰赤 残存：30%
		現高 5.3			
3	高台付 碗 須点器	口径(13.7)	高台は下方に延び、端部は丸い。口唇は外反する。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.8以下B+C+D+E 焼成：3色調：2.5YR 6/2 灰赤 残存：60%
		高台径 6.7			
		器高 5.9			
4	皿 須点器	口径 14.0	指差し込み部は明瞭。口唇は大きく外反し、肥厚する。	右回転撫で6周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：B+C+E 焼成：2色調：5Y 6/2 灰オリブ 残存：60%
		底径 6.0			
		器高 2.4			
5	皿 須点器	底径 7.5	平底から外傾する体部へ移る。口唇は欠ける。	右回転撫で5周+α。底部右回転糸切り。末野産	胎土：0.6以下B+C 焼成：2色調：2.5YR 6/3にふい橙 残存：50%



第171図 第2号製錬炉





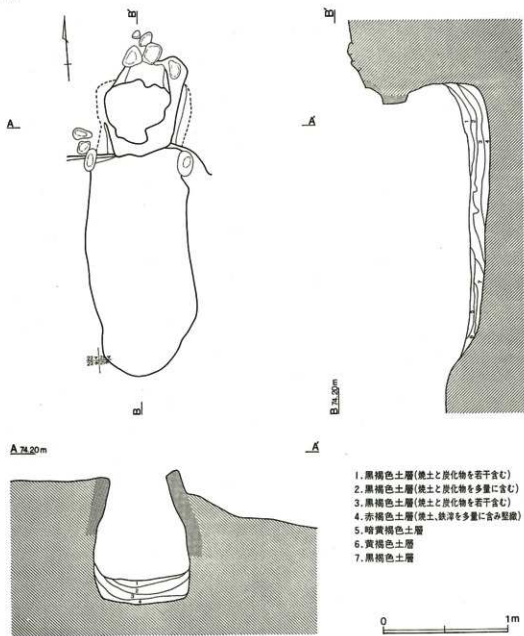
第172図 第2号製錬炉出土遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	甕 土削器	口径(18.6)	口縁は外傾し、口唇が薄くつまみ出される。	口縁横撫で。	胎土：0.3以下B+C+F+G+H 焼成：3色調；7.5YR6/6橙 残存：13%
7	羽	口全長 13.3 外径 8.4 孔径 2.4	基部がやや太く、孔径も基部で擦り減り太くなる。口部は黒色ガラス化。	棒に巻き、板に押しつける。基部は指で押しつける。口部周辺に鉄滓流れる。	胎土：A多+E+スサ 残存：90%

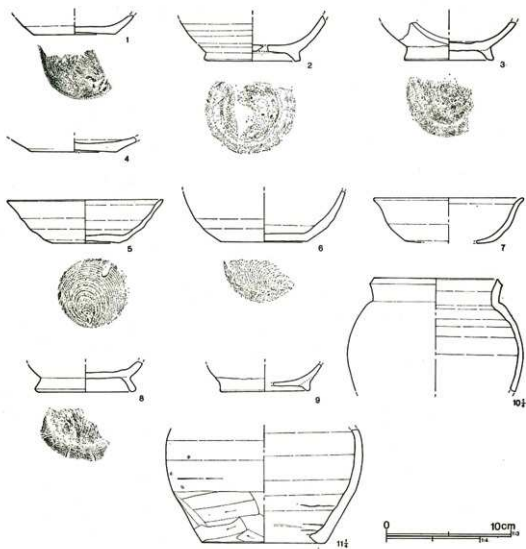
第3号製錬炉 (第173図)

21—マ区に位置し、3基の炉の中央にある。炉の残りが最もよく、前方の壁も上部だけが存在した。規模は幅が上端で0.45m、下端で0.75mで、深さ1.1mである。炉の壁厚は、0.12mと厚く、

ガラス化して残りはよいが、炉底から上へ西壁で0.5m、東壁では0.35mの位置から下は存在しない。このことは他の炉と同様、本来の炉底が案外上の方にあったと考えられる。現状の炉底には、焼土・鉄滓を多量に含む堅緻な層が存在するが、この層は奥壁から1.1mも前庭部方面まで延びており、炉からすではみ出している。この層よりも上層も同様に前庭部まで延びており、最下層が炉底となったとは考えられない。前庭部は掘り方が僅かに炉に向い傾斜するが、埋土によって水平となる。出土遺物は近辺から須恵器坏類が出土している。なおこの炉は保存処理を施し、取り上げた。



第173図 第3号製鉄炉



第174図 第3号製錬炉近辺出土遺物

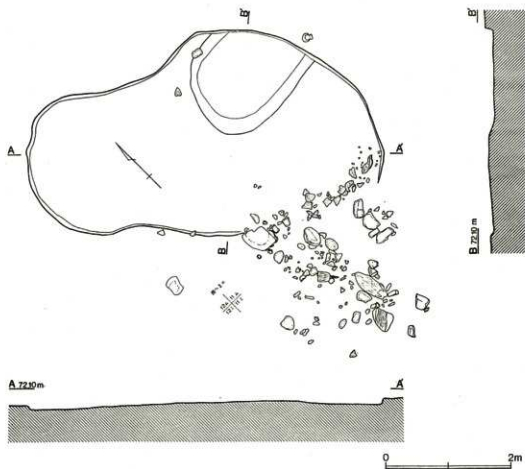
第3号製錬炉近辺出土遺物 (第174図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径(6.5)	指差し込み部がある。	右回転撫で。底部右回転離し し切り。 末野産	胎土: 0.6以下B+D+E 焼成: 2 色調: 7.5 YR 6/6 橙 残存: 底40% 伊左
2	高台付 須恵器	高台径 (7.7)	高台はハの字状に開く。端面 には浅い沈線を入れ、外 傾する。	右回転撫で。底部右回転糸 切り。 末野産	胎土: B+C+E少 焼成: 5 色調: 5 Y 6/2 灰オ リーブ 残存: 40%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	高台付 埴 須恵器	高台径 (7.1)	高台はハの字状に開き、端部が内傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下B+D+E 焼成：4 色調：2.5Y6/2 灰黄 残存：40%
4	杯 須恵器	底径 7.0	指差し込み部で外反する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：B・C・D・E多 焼成：2 色調：5Y7/1 灰白 残存：底部完 炉左
5	杯 須恵器	口径 12.5 底径 5.4 器高 3.4	体部に輪樋目明瞭。口唇は外傾する。	右回転撫で4周。底部右回転まわし糸切り。南比企産	胎土：B+I(1cl=1) 焼成：3 色調：2.5Y8/1灰白 残存：40% 炉上部
6	杯 須恵器	底径 6.9	体部は丸い。	右回転撫で。底部右回転糸切り。 南比企産	胎土：B+C+I(1cl=1) 焼成：5 色調：2.5Y7/1灰白 残存：30% 炉上部
7	杯 須恵器	口径(12.0)	体部中位に削り出された稜を持つ。	右回転撫で。体部下位は回転篋削りされる。 末野産	胎土：B+C+D 焼成：2 色調：7.5YR5/8にふい褐 残存：20%
8	高台付 埴 須恵器	高台径 8.1	高台は細くハの字状に大きく開く。端面は外傾する。	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台張りつけ後、内外回転撫で。 末野産	胎土：B+C+D+E 焼成：2 色調：10YR7/4にふい黄橙 残存：底30%
9	高台付 埴 須恵器	高台径 7.3	高台端部は細くなり、端面は外傾する。二次加熱を受け、赤色、表面黒色化。	右回転撫で。底部摩滅整形不明。 末野産	胎土：B+C+D 焼成：2 色調：2.5YR6/8橙 残存：底30%
10	壺 須恵器	口径(13.0) 胴径(12.5)	胴部は丸く、口縁部は短く立ち上がる。口唇は外傾する端面をつくる。	右回転撫で。特に口縁部に強い撫で。 末野産 炉上部	胎土：0.5以下B+C+D+E 焼成：4 色調：2.5Y6/1 灰灰 残存：20%
11	壺 須恵器	底径(13.0)	底部から外傾し、屈曲して内彎する。	右回転撫で。胴下位は右→左への篋削り。形態、焼成、胎土から10と同一か。	胎土：0.3以下B+C+D+E 焼成：5 色調：2.5Y6/1 灰灰 残存：25%

#### 製鉄関連遺構（第175図）

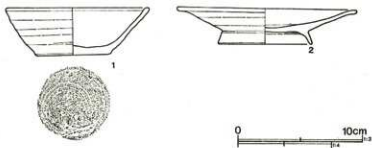
11—ム区に位置するが、発掘調査開始時は製錬炉と考え調査を進めたが、製鉄遺構とはならなかった。遺構は不整楕円形を呈する浅い掘り込みであるが、そこにはなんら施設は存在しなかった。しかしその南側には多量の炉壁、鉄滓、焼石が散乱しており、製鉄関連遺構との有機的な関連をうかがうことができる。他に須恵器の小片も出土する。



第175図 製鉄関連遺構

### 3 土 坑

土坑の形態はさまざまであるが、長方形、円形、楕円形に大きく分けられる。時期を限定できる土坑は数少なく、1号、99号土坑群から須恵器が検出されているだけである。



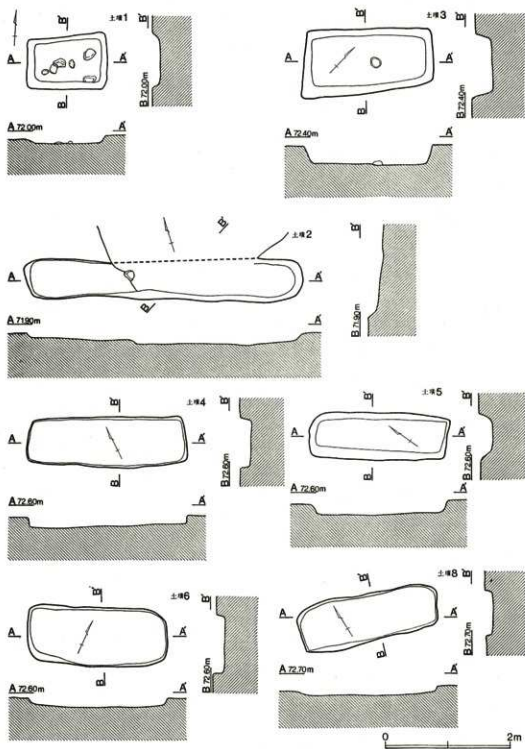
第176図 第99号土坑出土遺物

第99号土坑出土遺物 (第176図)

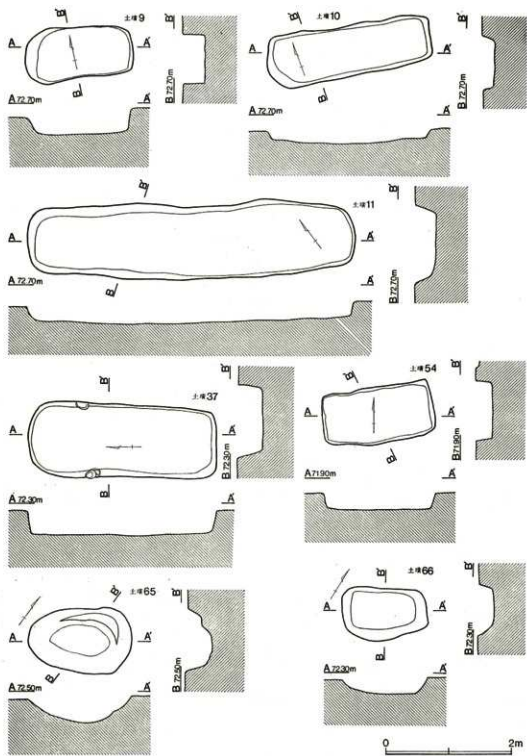
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	環須恵器	口径 11.5 底径 6.1 器高 3.8	指差し込み部が明瞭で、体部は外傾し、口唇部は肥厚する。	右回転撫で。底部右回転離し切り。末野産	胎土：B+C 焼成：5 色調：N5/0灰 残存：60%
2	高台付皿須恵器	口径 14.5 高台径 7.6 器高 2.9	全体に薄造り。高台はへの字状に直線的に開き、体部は浅く口唇は大きく開く。	右回転撫で。軟質で摩滅著しく整形不明。末野産	胎土：0.8以下B+C+D +E 焼成：1 色調：7.5 YR 7/4 にぶい橙 残存：70%

第3表 土坑計測表

番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位	番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位
1	1.30×0.86×0.10 <sup>m</sup>	N-85°30'-E	80	3.94×1.34×0.35 <sup>m</sup>	N-52°30'-E
2	4.5×0.72×0.20	N-73°-W	81	1.10×0.61×0.16	N-31°-W
3	2.10×1.04×0.32	N-42°30'-E	82	0.96×0.87×0.38	N-3°-W
4	2.60×0.82×0.18	N-63°30'-W	83	0.17×0.15×0.22	-
5	2.21×0.76×0.20	N-33°-W	84	1.09×0.99×0.09	-
6	2.26×0.95×0.15	N-68°-E	85	1.82×1.57×0.49	-
8	2.30×0.84×0.11	N-72°-W	86	0.86×0.76×0.14	N-4°-E
9	1.74×0.86×0.34	N-86°-W	87	0.11×0.82×0.12	N-17°-E
10	2.66×0.7×0.11	N-80°-W	88	1.27×1.21×0.37	-
11	5.26×1.2×0.31	N-54°-W	89	3.36×0.82×0.17	N-61°30'-E
37	3.04×1.13×0.37	N-3°-E	90	0.97×0.87×0.09	N-48°-E
54	1.80×0.92×0.27	N-82°-E	91	2.14×0.72×0.24	N-28°30'-W
63	2.87×2.82×0.39	N-57°-E	92	1.27×0.62×0.15	N-26°-W
64	3.17×2.07×0.52	N-68°-W	98	2.07×1.66×0.21	N-48°-E
65	1.65×1.04×0.39	N-55°30'-E	99	2.06×1.58×0.24	N-61°-E
66	1.35×0.85×0.23	N-57°-E	100	1.63×1.00×0.54	N-24°30'-E
67	1.78×1.30×0.58	N-34°-E	101	1.63×0.66×0.60	N-73°-E
68	2.00×0.82×0.43	N-80°-W	102	0.63×0.43×0.70	N-58°-E
69	1.86×0.73×0.19	N-71°-E	103	1.12×0.62×0.24	N-61°30'-E
70	1.28×0.82×0.32	N-35°-W	104	1.19×0.49×0.18	N-17°30'-W
71	5.25×1.0×0.15	N-41°-W	105	0.77×0.62×0.13	N-98°30'-W
72	1.33×1.16×0.34	N-14°30'-W	106	0.72×0.42×0.09	N-65°-E
79	2.69×1.63×0.25	N-27°30'-W	107	0.72×0.49×0.09	N-69°-E
73	3.36×1.13×0.70	N-65°-E	108	2.95×2.53×0.12	-
74	1.53×1.05×0.60	N-49°30'-E	109	1.09×0.80×0.32	N-58°-E
75	2.55×1.25×0.86	N-65°-E	110	1.18×0.10×0.35	N-21°-W
76	2.97×2.92×0.75	-	111	0.50×0.65×0.14	N-6°-W
77	1.36×1.19×0.21	N-29°-W	112	2.05×2.00×0.48	-
78	1.82×1.29×0.44	N-29°-W	113	1.04×0.88×0.13	N-21°-W
79	2.69×1.63×0.25	N-27°30'-W			



第177图 第1~6·8号土坑



第178图 第9~11·37·54·65·66号土坑